

青年期の進路選択に関する親のサポートの研究

成田 絵吏

目次

目次	1
はじめに	3
第1章 進路選択をめぐる親のサポートに関する研究の概観	4
第1節 各学校段階における進路選択 ―青年期に注目して―	4
1.1 進路選択に関する理論―発達理論に焦点を当てて―	4
1.2 中学生，高校生，大学生における進路選択	8
第2節 進路選択に関する親のサポート	16
2.1 進路選択に関する親のサポートの国内の研究	22
2.2 進路選択に関する親のサポートの国外の研究	25
2.3 養育態度，愛着，コミュニケーションなどにおける研究	35
第3節 本研究の目的および構成	43
第2章 親からの進路選択に関するサポートの横断的研究	
―中学生，高校生，大学生の各学校段階における比較検討―	44
2.1 問題と目的	44
2.2 方法	45
2.3 結果	48
2.4 考察	55
第3章 高校生の進路選択と親からのサポートの研究	
―進路選択に関する自己効力，進路選択行動との関連の検討―	58
3.1 問題と目的	58
3.2 方法	59
3.3 結果	61
3.4 考察	65

第4章 大学生の進路選択と親からのサポートの研究

—サポート源、サポート内容と進路選択との関連の検討— 67

4.1 問題と目的 67

4.2 方法 69

4.3 結果 71

4.4 考察 78

第5章 進路選択における日常生活の中での親のサポートに関する質的研究

—医療系専門学校に進学した学生のインタビュー調査から— 81

5.1 問題と目的 81

5.2 方法 83

5.3 結果 87

5.4 考察 104

第6章 総合考察 107

6.1 本研究で得られた知見 107

6.2 青年の進路選択における親のサポートの役割 109

6.3 本研究の限界と今後の課題 111

文献 112

初出一覧 131

使用調査票 132

付記 153

はじめに

青年期における重要な課題の一つとして進路選択がある。西山（2000）は、進路選択とは、「社会的な自己実現やそれを通しての経済的自立への道筋を実現していく選択行動」と定義しており、青年は進路を選択、決定する過程の中で、自分が社会の中でどのように自己実現、経済的自立をしていくかという課題に取り組む。進路選択は、経済的自立だけではなく、一人の社会人としての精神的な自立という側面もあり、ここでは進路選択を「社会の中で自己実現、経済および精神的な自立を実現するために進路を選択、決定していくプロセス」として用いる。

また、進路選択をめぐる課題は、自分はどんな進路に関心があるのか、どういう進路に進みたいのか、どんな進路に進むことに適しているのかなど、過去や現在の自分と向き合い、将来の自分像を構築していく、自分の人生と向き合う課題であり、“自分は～”という自己に直面する課題である。進路選択は、青年にとって重要な発達の課題であるが、自分の進路について悩み、失望や無力を感じ、そこで立ち止まってしまう者もいる。文部科学省（2014）の調査によれば、平成23年から約2年半の間に自殺した小学生、中学生、高校生の自殺の背景には、進路に関する問題が1割弱存在していたことが明らかになった。自分がどのような進路を歩みたいのか、広くどのように生きていきたいのかという問いは、後の自分の人生を方向づける重要なものであるが、それゆえにすぐに一つの解が出るようなものではない。ある解が出たとしてもそれは絶対的なものではなく、暫定的な解であり、その後も悩みながら自分の進路を歩んでいくものではないか。繰り返し悩みながらも前に進んでいくためには、一人で抱え込むのではなく、周囲の他者に相談し、支えや励ましといったサポートの存在が重要ではないかと思われる。青年にとって親は重要なサポート源であり、日常生活の中で幼いころから見てきた最も身近な職業人である親は、子どもの進路に対する考えやイメージに影響を及ぼすと考えられる。

よって、本研究では青年にとって重要なサポート源であり、最も身近な職業人である親のサポートと進路選択との関連を検討することを通じ、青年のよりよい進路選択を促進するための援助的介入に還元する示唆を得ることを目指している。

第1章 進路選択をめぐる親のサポートに関する研究の概観

本研究は青年期の進路選択と親からのサポートを検討するものであり、そのために第1章においては進路選択における親のサポートに関する先行研究を概観する。第1節において、各学校段階における進路選択に関する課題や状態を述べ、第2節では国内外で検討されてきた青年の進路選択をめぐる親のサポートに関する先行研究を概観する。さらに、親と青年の進路選択との関連についてはサポートという視点以外からも検討されており、その点についても触れる。それらを踏まえ、第3節において本研究の目的と構成について述べる。

第1節 各学校段階における進路選択—青年期に注目して—

1.1 進路選択に関する理論—発達理論に焦点を当てて—

これまで進路選択に関してさまざまな理論が提唱されてきた（Osipow, 1990；坂柳, 1990）。Osipow（1990）は従来提唱されてきた理論を、Holland の理論、社会学習理論、発達理論、適応理論の4つに分類した。坂柳（1990）はこれまで提唱されてきた理論を、進路選択の原因や規定要因といった内容に焦点を当てた内容理論（Content theory）と進路選択の過程のメカニズムに焦点を当てた過程理論（Process theory）という視点から Table1-1 のように分類している。

Table1-1 進路選択に関連する諸理論の概要（坂柳, 1990）

カテゴリー	理論名	主な特徴	主な該当者
内容理論 (Content theory)	特性—因子理論 (Trait & Factor)	個人の能力や興味などの特性と職業が要請する要因とが適合すれば、職業選択・適応の問題は解決する。	Parsons, F. Hull, C.L. Myer, G.E. Dawis & Lofquist
	人格理論 (Personality)	職業選択の原因を、主に個人の人格的諸特徴(欲求・興味・性格など)と関連付けて説明する。	Roe, A. Brill, A.A. Bordin, E.S. Holland, J.L.
	状況理論 (Situational)	職業選択には、個人を取り巻く環境状況(社会的・経済的・偶然的要因)が影響を与えている。	Blau, P.M. Miller & Form Lipsett, L. Sewell, A.H.
過程理論 (Process theory)	発達理論 (Developmental)	職業選択や適応をめぐる行動は、個人の継続的な過程であり、いくつかの発達段階がある。	Ginzberg, E. Super, D.E. Jordaan, J.P. Grites, J.O.
	意思決定理論 (Decision-making)	職業選択を、個人の意思決定の連続的な過程として捉え、そのメカニズムを解明しようとするもの。	Tiedeman, D.V. Hilton, J.L. Gelatt, A.B. Krumboltz, J.D.

過程理論の中で発達理論では、職業の選択はそれが行われる一時点でなく、過去、現在、将来までも含む連続的な過程であり、その過程に焦点を当てている。Ginzberg, Ginsburg, Axelrad, & Herma (1951) は 11 歳から 21 歳の青少年に面接調査を行い、それに基づいて青年期における進路選択の過程をいくつかの段階に区分し、職業の選択を青年期の全期間において行われる一連の連続的な過程であるにとらえ、その過程を「空想期 (Fantasy Period) 」(～11 歳)、「暫定期 (Tentative Period) 」(11 歳～18 歳)、「現実期 (Realistic Period) 」(18 歳～21 歳) の 3 つの段階に区分し、各段階の特徴について記述した。「空想期」は、「洋菓子屋さんになりたい」、「プロのサッカープレイヤーになりたい」など、現実的制約を考えず、自由に想像をふくらませる。想像はその時の感情、重要な人物などによって変わり、実現が不可能な非現実的なものである。しかし、次の「暫定期」になると、将来の職業を決める必要性を認識し、現実的な視点からも考える。この時期はさらに 4 つの下位段階に分けられ、興味が職業を選ぶ主要な基準になる「興味段階」、それぞれの職業には異なった能力が必要とされることを認識し、自己の能力を考慮して検討する「能力段階」、形成されてきた自己の価値基準から職業の選択を試みる「価値段階」、興味や能力、価値観といった自己の内的要因と共に現実的な外的条件や環境状況を含めて職業の選択をしなければならないことを認識する「移行段階」の 4 つの段階である。つまり、「暫定期」は、現実的な職業の選択を方向づける段階である。次の「現実期」では、希望と現実の対立、矛盾や葛藤、現実と妥協に直面する。この時期は 3 つの下位段階に分けられ、これまでの経験から職業の領域や方向性を探索する「探索段階」、探索の結果、ある特定の職業領域に関心が集まり、それに向かって考え始める「結晶化の段階」、その特定の職業についてさらに具体的に検討を深める「特定化の段階」へと至る。このように Ginzberg et al., (1951) は、進路選択は青年期の全期間を通じて行われるものであり、その過程は連続的なもので、基本的には非可逆的であり、個人的要件（興味、能力、価値観）と現実的条件（雇用条件など）との妥協の過程であるとしている。

さらに、Super (1957；日本進路指導協会訳, 1960) は、青年期のみでなく生涯発達の視点からとらえている。彼は、「成長段階 (Growth Stage) 」(～14 歳)、「探索段階 (Exploration Stage) 」(15 歳～24 歳)、「確立段階 (Establishment Stage) 」(25 歳～44 歳)、「維持段階 (Maintenance Stage) 」(45 歳～64 歳)、「下降段階 (Decline Stage) 」(65 歳以降) の 5 つの下位段階に人生を区分し、各段階で求められる発達課題を示した (Table1-2) 。

Table1-2 職業生活の段階階(Super(1957)より吉田(2007)が作成したものを一部修正)

①成長段階 Growth Stage (誕生～14歳)

自己概念は、学校・家庭における主要人物との同一視を通じて発達する。欲求と空想はこの段階の初期において支配的である。興味と能力は社会参加と現実吟味の増大に伴い、この段階でいっそう重要になる。この段階の副次段階は、

空想期(4～10歳) 欲求中心・空想の中での役割遂行が重要な意味を持つ。

興味期(11～12歳) 好みが志望と活動の主たる決定因子となる。

能力期(13～14歳) 能力にいっそう重点が置かれる。職務要件(訓練を含む)が考慮される。

②探索段階 Exploration Stage (15～24歳)

学校・余暇活動・パートタイム労働において、自己吟味、役割試行、職務上の探索が行われる。この段階の副次段階は、

暫定期(15～17歳) 欲求、興味、能力、価値観、雇用機会のすべてが考慮される。暫定的な選択がなされ、それが空想、討論、課程、仕事などのなかで試みられる。

移行期(18～21歳) 青年が労働市場や専門訓練に入り、そこで自己概念を充足しようと試みる過程で、現実への配慮が重視されるようになる。

試行期(22～24歳) 表面上適切な分野に位置づけられると、その分野での初歩的な業務が与えられる。そして、それが生涯の職業として試みられる。

③確立段階 Establishment Stage (25～44歳)

適切な分野が見つけれられ、その分野で永続的な地歩を築くための努力がなされる。この段階の初めにおいて、若干の試行が見られる場合がある。その場合、分野を変える場合もあるが、試行なしに確立が始まるものもある。とくに専門職の場合がこれである。この段階の副次段階は、

試行期(25～30歳) 自分に適していると考えた分野が不満足なものだと分かり、その結果、生涯の仕事を見出さないうちに、あるいは生涯の仕事が関連のない職務のつながりだということがはっきりしないうちに分野を1～2回変更することがある。

安定期(31～44歳) キャリアパターンが明確になるにつれて、職業生活における安定と保全のための努力がなされる。多くの人にとって創造的な時期である。

④維持段階 Maintenance Stage (45～64歳)

職業の世界である地歩をすでに築いたので、この段階での関心はその地歩を保持するにある。新しい地盤が開拓されることはほとんどなく、すでに確立されたラインの継続が見られる。

⑤下降段階 Decline Stage (65歳以降)

身体的、精神的な力量が降下するにつれて、職業活動は変化し、そのうちに休止する。新しい役割が開発されねばならない。いわば最初は気が向いたときだけの参加者という役割で、次いで参加者でなしに、傍観者としての役割をとるようになる。この段階の副次段階は、

減速期(65～70歳) 場合によっては公式の引退(定年)の時であり、時には維持段階の後期にあたる。仕事のペースは緩み、職責は変化し、ときには下降した能力に合わせて仕事の性質が変容する。多くの人は、常用的な職業の代わりにパートタイムの仕事を見いだす。

引退期(71歳以降) おのおのの年齢的限界については、人によって大きな違いがある。しかし、職業上の完全な休止は誰にでもいずれやってくる。ある人にとっては気楽に楽しく、別の人には気重で落胆を伴って、あるいは死とともにやってくる。

「成長段階」は、学校や家庭の重要な人物との同一視を通じて自己概念が発達する段階であり、この段階はさらに3つの下位段階に区分され、自分の欲求を中心として空想が行われる「空想期」、興味により活動が導かれる「興味期」、能力に重点が置かれ、職務要件も考慮するようになる「能力期」である。次の段階は「探索段階」であり、学校、余暇、パートタイム労働などを通じ、自己や職業に関する探索が行われる。この時期も3つの下位段階に分けられ、興味、能力、価値観、雇用機会なども考慮し、暫定的な選択が行われ、それが空想や討論、仕事などで試行される「暫定期」、労働市場や専門訓練に入り、そこで自己概念を充足しようと試み、現実も含めて検討する「移行期」、一応の適切なある分野で初歩的な業務をうけもち、それが生涯の職業となるか試みられる「試行期」である。この理論において特徴的な点は、進路発達を一生涯の発達ととらえ、青年期以降も発達し続けるとし、「確立段階」、「維持段階」、「下降段階」といった段階を設定し、その特徴を記述している（Table1-2）。その他にも彼の発達理論において注目すべき点として、個人のキャリアは、学校、職場、家庭、地域などさまざまな場面で演じられるものであり、子ども、学生、余暇人、市民、労働者、配偶者、家庭人、親といったさまざまな役割の組み合わせにより形成されるものであるという点であり（Super, 1980）、彼の理論の中核には自己概念の発達が置かれ、職業に焦点を当てながらも職業生活を送る個人の生活全体をとらえている。

このように、これらの発達理論から青年期は、非現実的、空想的に自分の職業を想像していた段階から、自らの興味から職業を検討し始め、次第に興味だけでなく自己の能力や価値観からも検討するようになり、さらにそのような自己の内的要因だけではなく、現実的な外的条件や環境状況を含めて考慮する必要性を認識し、特定の職業を暫定的に決定して、学校からさらに上級の教育機関ないし職業へと移行していく時期であり、進路選択において重要な時期であると考えられる。

1.2 中学生、高校生、大学生における進路選択

1.1 で指摘した進路選択において重要な時期である青年期は、日本の学校制度において中学校、高校、大学などの学校段階におおむね該当する。各学校段階により進路に関する課題は異なる。

まず、中学生は、Ginzberg et al., (1951) や Super (1957) の理論からは、将来の職業を決める必要を認識し始め、自らの興味から職業を検討するようになり、次第に自己の能力や価値観からも検討するようになる時期であると考えられる。国立教育政策研究所生徒指導研究センター(2002) は、中学生の進路に関する発達課題として、「肯定的な自己理解や自己有用感を獲得し、興味・関心や職業に関する基礎的な知識・理解等に基づく選択基準を形成する」、「生き方や進路に関する現実的な探索を積極的に行う」、「暫定的な進路計画を立案したり、主体的によりよい選択をしようとする姿勢を身に付ける」をあげており、中学校では生徒がそのような課題に取り組めるよう、生徒が卒業後の進路について十分に情報を得て理解を深め、就職、進学共にその意味を十分に理解し、自覚を持ち進路を選択できるように指導を行う必要性を指摘している。現代の日本では、中学生は卒業後に就職するよりも高等学校など何らかの教育機関へ進学する者が大多数である。平成 24 年 3 月に中学校を卒業した者は 1,195,204 人であり、そのうち高等学校等進学者は 1,174,596 人であり、その他専修学校などに進学した生徒は 4,930 人、就職した者は 4,409 人であった(文部科学省, 2012)。

高校への進学には主に学力試験に基づく入学試験があり、中学生にとってその試験の存在は大きく、進路をめぐり自分の関心や適性、将来の職業などについてじっくり検討する一つの節目というよりも、目前に迫った高校入試のための学力向上に集中せざるを得ない状況がある。坂柳(1992) は中学生を対象に進路成熟について縦断的調査を行った。進路成熟とは、「進路の選択・決定やその後の適応への個人のレディネスないし取り組み姿勢」であり、進路選択や、決定後の適応についての準備状態や態度であると考えられる。進路成熟は、「①教育進路成熟(主に、進学先の選択・決定への取り組み姿勢)」、「②職業進路成熟(主に、職業選択への取り組み姿勢)」、「③人生進路成熟(主に、人生や生き方への取り組み姿勢)」の 3 系列で構成されている(坂柳, 1992)。調査の結果からは、進学へのレディネスを中心とした「教育進路成熟」は学年が上がるにつれて明確に上昇的に変化していたが、「職業的進路成熟」と「人生進路成熟」は比較的緩やかな上昇ないし停滞しており、中学生は将来の職業について積極的に向き合うよりも、目の前の卒業後の進

学以外の直接的に高校受験に結びつかないことは先延ばしする傾向があると指摘している（坂柳, 1992）。進路に関する問題で悩んだ経験のある中学生は 59%存在しており（石隈・小野瀬, 1997），中学生の悩みの中で進路に関する悩みは大きな位置を占めるが，その内容は将来の職業，人生設計ではなく，目の前の課題である高校受験のための学力についてということが大部分を占めるのではない。三浦・上里（1999）の高校受験期の中学生を対象とした調査では，多くの生徒が学業ストレスを自分にとって影響力のある出来事であると認識していた。三浦・坂野（1996）は中学生の心理的ストレスについて，学年が上がるにつれて学業に関連する出来事をストレスとしてとらえるようになり，その背景に学習内容が難解になる，高校受験への意識が高まることを指摘している。現代の高校入試では学業成績が重要視されるため，中学校から高校への移行が，将来どのような職業に就きたいのかなど長期的な視点で自分の進路をじっくりと考える節目となる機会ではなく，いかに学業成績を上げ，高校入試を突破するかということに集中しなければならぬ状況にあることが推察される。中学校から高校へという移行を，学業成績という視点のみから考えるだけでなく，高校へ進学することの意味，将来の職業など長期的な視点をもつことがより必要ではないかと思われる。

高校生では，Ginzberg et al., (1951), Super (1957) の理論からは，自己の内的要因だけではなく，さらに現実的な外的条件や環境状況を含めて考慮する必要性を認識し，個人的要因と外的条件を合わせて職業について検討するようになる時期と考えられる。国立教育政策研究所生徒指導研究センター（2002）は，高校生の課題として，「自己理解を深めその自己を受容できること」，「多様な生き方や進路・職業の理解の上に立って，自分なりの選択基準となる人生観や職業観・勤労観等を身に付ける」，「自己の将来を設計し，社会的移行の準備を行う」，「そのための現実吟味を十分行い，積極的に試行する」ということをあげている。高校卒業後の進路としては，学校から職業への移行である就職，大学や専門学校などの教育機関への移行である進学という，大きく二つに分かれる。平成 24 年の高等学校卒業者の大学等進学率は 53.5%，専修学校（専門課程）進学率は 16.8%で，一方で就職率は 16.8%だった（文部科学省, 2012）。このように現代は高等学校卒業後すぐに社会に出て働く者よりも，何らかの教育機関へ進学する者が高等学校卒業者の過半数以上存在する。

坂柳（1993）の高校生の進路成熟に関する調査によれば，学年が上がるにつれて進学へのレデ

ィネスを中心とする「教育進路成熟」は、「職業進路成熟」、「人生進路成熟」といった他の進路成熟よりも上昇的な変化が速くなっていたが、「職業進路成熟」、「人生進路成熟」でも学年が上がるに応じて上昇的に変化しており、学力偏差値に偏った指導だけでなく、将来職業人としてどう生きていくべきかなど長期的展望、生徒の個性、希望職業や人生設計に応じた指導の必要性を指摘している。中学生では学力試験に基づく高校入試という目の前の課題に大きく関心が向けられていたが、高校生になると職業や生き方といったことも意識し、高校卒業後の進学を検討するようになると考えられる。ただ、高校生にとっても進路を考える際、学業成績の存在は大きい。高校生のストレッサーとして菅・上地（1996）は「学業・進路」、「校則・規制」、「教師との関係」、「友人との関係」、「部活動」の5つを報告している。下山（1984）は、高校生はその後の進路について学業成績を中心として進路を決定しており、その要因として受験というイベントの大きさを指摘している。柳井・清水・前川・鈴木（1989）の全国の高校生を対象とした調査からは、「自分の志望の達成には学力が十分ではないこと」について「よくある」、「ときどきある」と80%の生徒が回答しており（「まったくない」、「あまりない」、「ときどきある」、「よくある」の4件法）、高校生において学力不足に関する悩みが高いことを報告している。また、「自分の適性がわからない」には60%、「就きたい職業がわからないこと」には55%の生徒が「よくある」、「ときどきある」と悩みの高さを回答しており、学力だけでなく、自分の適性や将来の職業に関しても悩んでいる高校生の存在がわかる。本多（2004）は高校生が進路選択に関して抱く悩みを検討した結果、「自分の目標や関心がわからない悩み」、「やり通す自信がない悩み」、「将来状況が不確かだという悩み」、「実現できるか自信がない悩み」、「自己判断に自信が持てない悩み」、「進路情報が不足しているという悩み」の存在を指摘し、「自己判断に自信が持てない悩み」と「やり通す自信がない悩み」が他の悩みに比べて多いことを指摘している。進路について悩んだ経験がある高校生は77%であり（石隈・小野瀬, 1997）、その内容としては、入学試験など学力に関する悩みだけでなく、自己理解や将来の職業に関することでも大きいのではないかと。

しかし、高校生が自分の進路選択という課題にどう取り組むかは、個人差が大きいようである。例えば、大学への進学動機をみると、職業との連続性を検討して明確な目標を持って進学する学生もいれば、「周りが行くから何となく」、「教師や親に言われたから」といった自ら大学に行く意味を見出しておらず、漠然と進学している学生、「働きたくない」、「遊びたい」という理由で

進学した学生も存在する(舘上・狩野, 1984; 古市, 1993)。大学への進学動機には、舘上(1984a)は「大学の本来的功能」、「家族への配慮と規範機能」、「モラトリアム機能」、「大学の副次的機能」、「大学の経済価値機能」を指摘しており、古市(1993)は「無目的・同調」、「享楽思考」、「勉学思考」、「資格・就職」という進学動機を報告している。また、学力など「合格可能性」のみで進学を決める学生も存在することが指摘されている(山村・鈴木・濱中, 2012)。このように進学動機は様々であるが、比較的最近の調査である(社)全国高等学校 PTA 連合会・(株)リクルート合同調査調べ(2012)の「高校生と保護者の進路に関する意識調査」によれば、高校生は進学について「自分のやりたいことができる学校に進学したい」、「自分の個性や能力を生かせる学校に進学したい」という自分の個性や能力が伸ばせる学校、「社会で役立つような知識・技術を身に付けられる学校に進学したい」、「就職率が高い学校に進学したい」という将来職業に就いた時に役立つことを身につけられる、就職が有利になる学校に進学したいという思いを抱いている高校生が多いことも報告されている。しかし、特に目的がなく漠然と進学したといった将来の職業との関連を深く考えず大学に進学したとしても、進学先が特定の職業人を養成する学校や学部なのか、どのような領域を専門的に学ぶのかにより、その学校の卒業後に就業可能な領域は狭まる。例えば、経済学部に進学した場合、その学部を卒業後すぐに医療専門技術職などに就業することは難しい。本人の意識の程度はあるが、ある学校、学部に進学するということは、将来自分が従業する職業の幅を絞ったということになる。高校生の段階において、さまざまな職業について知った上で、自分の興味、適性とも関連づけながら、広く職業について検討し、ある程度の見通しを持ちながら、進学先を決定していくことが重要ではないかと思われる。

大学生では、Ginzberg et al., (1951) や Super (1957)からは、さまざまな役割試行の上、自己吟味や職業上の探求が深まり、労働市場や専門的訓練に入り、そこで自己概念を充足しようと試みられる段階であると考えられる。大学生は、大学卒業後の進路だけでなく、進学した大学に対する悩みも生じることがある。鶴田(1993; 1994; 2001)は「入学期」には、不本意入学や進路変更、入学後の目標喪失という悩みが生じやすく、大学や学部に所属感を持つ、学科や専攻を選択するといったことが課題となり、2~3年生の「中間期」は進路変更や将来の進路に関する悩みが生じやすく、将来の進路選択への準備といったことが課題となり、「卒業期」は卒業後の進路選択の迷いや不安といった悩みが生じやすく、職業への移行に関することが課題となり、学年別に進

路に関する悩みや課題を指摘している。森田（1999）は大学相談室における進路に関する相談を、再受験や転学、他大学編入といった「進路変更に関する問題」、将来の具体的な目標が決まらない、決められないといった就職、進学などに関する「進路選択／選択過程における問題」と大きく 2 つに分類し、さらに Table1-3 のように細かく相談内容を報告している。

Table1-3 森田(1999)の大学学生相談における進路に関する相談内容および相談期待	
相談内容の分類	
①進路変更：再受験，転学部（学科），他大学編入	
a：第一志望：第一志望だった大学や学部が諦められず，「やはり変わりたい」という思いから，再度目指そうとしているもの	
b：方向転換：入学後気持ちや考えが変化し，「変わりがなくなった」という思いから，他の大学や学部を新たな目標としているもの	
c：変更躊躇：進路変更を希望しているものの，その判断に自信がなく，aやbのように具体的な行動には至らず，「変わりたいが迷う」状態にあるもの	
d：所属違和感：現在の所属における不満，違和感が主にあるが，具体的な方向は見つかっておらず，「どこかへ変わりたい」というもの	
e：所属不本意：再受験失敗，転学部不許可などで進路変更が実現せずに，「もう変われない」という不本意感が主であるもの	
②進路選択／決定過程：進学，就職，退学	
f：将来模索：学科や専攻領域を絞り込む途中で，「自分は何をやりたいのか」と適性や興味などを模索しているもの	
g：不決断：差し迫った就職や進学に関して，複数の選択肢があり，どれを選べばいいのか，最終的な決断がつかず「決められない」と迷っている状態にあるもの	
h：停滞不安：就職活動に行き詰まりを感じ，「なかなか決まらない」ということに関する不安や焦りを感じているもの	
i：目標喪失：目標自体を見失い，無気力，「進む方向が分からない」状態にあり，具体的な方策がないもの	
j：進路受容：就職や退学など決断後，「決めたことを納得したい」という思いから，踏ん切りをつけ，前進していこうとしているもの	
相談期待	
①外的情報収集	
a：具体的な情報：相談というより，手続き方法，進路に関する情報を質問に来る形。「知りたい」	
b：行動指針や助言：相談に来た学生自身の考え方や方針について自信がなく，明確な指針を得るためにカウンセラーの意見を聞こうとしている。「聞きたい」。	
②内的変化志向	
c：自己確認：相談に来た学生の中に問題解決の見通し，方針はあるものの自信がなく，カウンセラーに聞きたいというのではなく，自分の考えを聞いてほしい，話して整理，確認したいというもの。「話したい」。	
d：内的探究：進路についてcより漠然としており，そのことを自分でも感じている。進路の問題をきっかけに自分を振り返りたい。「考えたい」。	
f：不安解消：進みたい方向性を見いだせず，具体的な解決の見通しもなく，駆け込み寺のように相談室に来談した状態。「気持ちを休めたい」。	

進路変更に関する悩みには、Table1-3 の相談の内容の a~e にあるように変更の意思や方向性がどの程度明確かという点で学生の姿は異なり、a と b は変更への意思や方向性が明確で、手続きのために必要な情報などを得るために来談し、c は希望する変更先はあるがどれがよいか迷っている状態、d は「どこかに変わりたい」と変更の方向性が曖昧で現在の所属に対する違和感や不満が目立ち、e は変更希望がかなわず所属への不満が中心となっている。f~j の進路選択、決定過程に関する悩みについても Table1-3 のように具体性や方向性、見通しの明確さは異なり、f は進路選択の準備段階、f と g は決断にふみきれないこと、h は決定できずに自信を無くし、このままでよいのか悩んでいる状態、i は選択決定以前に方向性が不明で不安定な状態、j は進路を決定した後の悩みであり決定が正しかったのか再確認しようとしているというさまざまな学生像を指摘している。また、森田（1999）は学生相談に対する期待についても併せて検討し、直接的な問題解決に役立つ方法や情報、助言を求める「外的情報収集」と、問題解決の方法以前に自分の気持ちなどについて来談者自身が語り、考え、何かを見出したいという「内的変化志向」に大別でき（Table1-3）、来談した学生のうち 69%が「外的情報収集」を求め、「内的変化志向」はその半分弱であるが、何を求めているかは学生の進路に対する具体性や方向性、明確さなどにより異なることを指摘し、不明確な者ほど継続面接の中で進路以外のことに焦点が移っていく傾向にあったことを報告している。進路の問題は本人の能力や希望、成育歴上の問題、親子関係の問題、アイデンティティの問題、男性・女性といった性に関する問題などの問題をもはらんでいる場合があり（安福, 2005）、学生にとっては業後の進路選択という課題に取り組む中で、それらの解決すべき課題に向き合うことが求められる場合もある。

大学は大学生にとって職業人として社会へ出る直前の教育機関であることが多く、大学に入ったことでそれまでは学業などに追われて後回しにしていた学生も、自分はどのような職業に就きたいのかなど自分の進路に対する関心が高まり、それに関する悩みも生じやすいと考えられる。しかし、何をしたいのか、どのような職業に就きたいのかといったことについて、就職活動などの現実的に卒業後の進路を決めなければならない時期が迫ってきてから考え始める学生も存在するだろう。卒業後の進路には、進学や留学という選択肢もあるが、ほとんどの学生は就業する。松井・清水（2008）は、大学生は「暫定的に選択した職業について準備し、それを試行することによって現実吟味し、それが自分自身の生涯にわたる職業になりうるかどうか、あるいは自分にと

ってふさわしい職業かどうかを考える探索段階」であるとし、Table1-4のように各学年における課題をあげている。

Table 1-4 大学生の各学年における進路に関する課題（松井・清水，2008をもとに作成）

学年	課題
1年次	<ul style="list-style-type: none"> ・大学進学目的、選択した専門分野などを、自己の将来のキャリア計画に照らして総合的に検討する ・4年間の大学生活(勉学)の目標を明確にし、暫定的な計画を立てる
2年次	<ul style="list-style-type: none"> ・さまざまな機会(体験)を通して自己理解の深化をはかり、自己の職業適性を考える ・職業関連情報を積極的に収集し、自己とキャリアとの関係性についての洞察を深める
3年次	<ul style="list-style-type: none"> ・自己理解(自己分析)、企業関連情報、インターンシップなどの啓発的経験などを総合的に検討し、卒業後の職業を選択する
4年次	<ul style="list-style-type: none"> ・その志望実現に向けて具体的な準備活動に入る ・志望進路の実現を図り、職業生活への適応準備を行い、職業人としての心構えを深める

ところで、日本では多くの企業が新規卒者採用を行っており、卒業直後に就業するにはある時期にはこの活動をしなければならないといった標準化・マニュアル化された就職活動スケジュールが存在する(労働政策研究・研修機構, 2007)。就職活動(vocational exploration)とは、「就職先を獲得するための一連の行動」を意味し(高村, 2000)、一般企業から専門的職業までさまざまな職業に就く職業探索活動全般を意味するが、現在は「一般企業への内定獲得活動」の意味として用いられている(高村, 2000)。業種により多少異なるが一般企業への就職活動は、Webの就職支援サイトへの登録、エントリーシートへの書き方や試験対策、企業情報などの収集、合同企業説明会や各企業の説明会やセミナーへの出席、エントリーシートの提出、エントリーシート通過後に筆記試験や面接試験といったことがある(労働政策研究・研修機構, 2007)。決められた就職活動のスケジュールを行えないことはその後の活動にマイナスの影響を及ぼし、結果的に内定先の獲得が難しくなる場合もある。ある期間内に一定の活動を終えなければならず、一日に何社も会社説明会に参加、連日の面接というハードスケジュール、不安や焦り、さらに内定が思うように取れず自分に自信を無くしていく学生もおり(労働政策研究・研修機構, 2010)、就職活動は学生にとって身体的、精神的にストレスフルな活動である。また、就職活動は社会的な情勢などに

よりそのスケジュール、状況は変化するが、それにも対応していかなければならない。下村・木村（1997）は大学生の就職活動のストレスとして、疲れや時間的制約といった「物理的・身体的ストレス」、不合格の理由が分からないといった企業の採用プロセスについての「企業関連ストレス」、自分のやりたいこと、どんな会社が合うのか分からないといった「適性・興味ストレス」を指摘している。藤井（1999）は「職業決定および就職活動段階において生じる心配や戸惑い、並びに就職決定後における将来に対する否定的な見通しや絶望感」を「就職不安」と定義し、就職不安は、就職活動自体に対する「就職活動不安」、職業適性に関する「職業適性不安」、自分が卒業後就職した職場に対する「職場不安」の3つの側面があり、ストレスおよび抑うつとの関連を検討した結果、特に就職活動に関する不安がストレス、抑うつとの間に関連があり、就職活動における過度な不安が精神的健康にネガティブな影響を与えることを指摘した。

また、就職活動が上手くいかず、就職先が決まらないまま大学を卒業していく学生もあり、その後既卒として就職活動を継続している者もいれば、希望せずフリーターなど不安定な非正規雇用として働く若者も多い。大学における職業への移行支援の拡充と共に、移行が困難な学生に対する、在学中および在学後も利用可能な支援機関の拡充が求められる。若年層の就労問題に対して、政府は2003年に「若者自立・挑戦戦略会議」を発足後、「日本版デュアルシステム」、「若年者トライアル雇用」、「ジョブカフェ」の設置などさまざまな公的支援を試行錯誤しながら行っている（若者自立・挑戦戦略会議, 2003）。就職先が未定のまま卒業していく学生に対し大学側は、そのような公的支援と学生を繋ぐという役割が重要となるのではないか。

以上、中学生、高校生、大学生という青年における進路選択について概観した。中学生においては学業ということに関心が集中し、将来の職業といった長期的視点を持ちにくい、自分が学校から職業へ移行し、社会の中で職業人としてどのように生きていくかということは、高校生、大学生へと学校段階が上がるにつれて青年の中で大きくなる。自己、自己と社会のつながりについて向き合い、学校から職業への意向へ向けて準備する青年期は、進路選択と言う課題を通じて心理的に大きく成長する時期である。

第2節 進路選択に関する親のサポート

進路選択における親の存在の重要性については、キャリア教育においても指摘されてきた。文部科学省（2004）の「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」では、キャリアを「個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関連付けや価値付けの累積」とし、学校から職業へのスムーズな移行を目指してさまざまな教育的試み、キャリア教育がなされてきた。キャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促進する教育」（文部科学省、2011）であり、社会において職業人として自立した生活をするために必要な能力や態度を育てるという、社会人、職業人としての自立という視点を中心に据えた教育的働きかけである。そのキャリア教育においては家庭の役割の大きさが指摘されている。学校と家庭や保護者との連携は重要であり、家庭は「子どもの成長・発達を支え、自立を促す重要な場であり、働くことに対する保護者の考え方は、子どもに影響を与える。親が、子どもに働く姿を見せたり、子どもと働くことの大切さについて話し合ったりすることを通じて、子どもは多くのことを学ぶことができる」（文部科学省、2011）として家庭の役割の重要性を明記している。そして学校は、保護者に必要な情報を提供し、子どもとの進路について共通理解を図ること、保護者が学校のキャリア教育に関する取り組みを理解して学校の活動に参加すること、家庭における家事やボランティア活動など様々な社会活動に参加する、また保護者の働く姿や社会活動に参加する姿が子どもに与える影響の重視性を指摘している。

このように進路選択において親からのサポートの重要性がうかがわれる。ソーシャル・サポートとは、「特定個人が、特定時点で、彼／彼女と関係を有している他者から得ている、有形／無形の諸種の援助」（南・稲葉・浦、1987）である。ソーシャル・サポートの機能は、研究者によりいくつかの機能が提唱されているが、Cobb（1976）は、①ケア、愛されている、②尊敬、価値あるものとしての評価、③ネットワークの一員である所属、という3つのサポート機能を指摘している。House（1981）は、①共感する、愛情を注ぐといった「情緒的」なサポート、②仕事を手伝う、お金を貸すなど直接手を貸す「道具的」なサポート、③問題を対処するために必要な情報や知識を与える「情動的」なサポート、④個人の行動や業績に適切な評価を与える「評価的」なサポートという4つを提唱している。Vaux（1988）は、さまざまなサポート機能があるが、それらは大き

く、問題解決に直接的ないし間接的に役立つ「道具的サポート」と、心理的な負担を緩和する「情緒的サポート」の2つに大別できると指摘している。

また、ソーシャル・サポートの測定については、「困ったら～してくれるだろう」というソーシャル・サポートの利用可能性を質問する「知覚されたサポート」、または「～してもらった」というある一定期間に実際にどれだけのサポートを得たのかを質問する「実行されたサポート」を測定する場合が多い。先行研究より知覚されたサポートが高い者ほど適応状態がよいことが明らかにされてきた（福岡・橋本, 1997；森・堀野, 1992；岡安・嶋田・坂野, 1993；嶋田, 1996）。これは、ストレッサーに対する個人の認知過程において、ストレッサーの否定的評価や対処の困難さの評価を低め、ストレッサーの影響を緩和するためである（Cohen & Wills, 1985）。実行されたサポートについては、ストレスとは関連がない、またストレッサーな状況にあるものほどサポートを得ていることが指摘されている（岡安ら, 1993）。しかし、好ましくないストレス状況にある者ほど実際にサポートを受ける傾向が高い、コーピングの一つとしてサポートを得ることが多いことがあり（Barrera, 1986）、実行されたサポートがストレス状態を軽減する効果がないというわけではない。岡安ら（1993）によれば、実行されたサポートはコーピング方略としての機能があり、ストレスの軽減に直接作用する、また実際にサポートを受けてストレスを軽減できた経験は次にストレッサーに直面した場合のサポートの利用可能性を高め、ストレス軽減効果が生じることを指摘している。その後の人生に少なからぬ影響を与える進路選択に関する課題を一人で行うことは青年にとって困難であるが、そこで助言や情報、励ましといった実際にサポートを受けることで解決し、前に進んでいけることがあり、また実際にサポートを受けながらも自分で進路選択に関する課題を達成できたという経験は、さらに自ら活発な進路選択を促進させる、さらに次の課題へ積極的に挑戦することを可能にさせると考えられる。

青年を取り巻くサポート源として家族、友人といったインフォーマルなサポート源から、教師、カウンセラーといったフォーマルなサポート源まで幾つか存在するが、本研究においては親に注目する。というのも、親は子どもにとって重要なサポート源であるだけでなく、幼い頃から日常生活の中で自然に目にしてきた、社会で働くもっと身近な大人である。また、親自身の職業に対する態度、また広く職業というものに対する態度がどのようなものであったかが子どもに与える影響は大きいと考えられる。親と子どもの進路に関する国内の研究は Table1-5 のように行われている。

親と青年の進路選択に関する研究は、サポートという視点からだけでなく、愛着 (Felsman & Blustein, 1999 ; Ketterson & Blustein, 1997) , 養育態度 (Dietrich & Kracke, 2009 ; Kracke, 1997 ; 2002 ; Vignoli, Croity-Belz, Chapeland, Fillipis & Garcia, 2005), コミュニケーション (平石, 1997 ; 高橋, 2008 ; 2009) といった視点からも検討されてきた。しかし、特に親からのサポートと子どもの進路関連変数との関連に焦点を当てた国内の研究はまだ少ない。本研究においては、それら先行研究も参考にし、親のサポートを、「青年の進路選択にポジティブな影響を与えられと考えられる意図的、または非意図的なものをふくむ有形、無形の援助」と定義する。非意図的というのは、日常的な親のかかわりや態度、親の働く姿などであり、日々のそれらの累積は青年の進路選択や、何か具体的に進路選択に影響を与えることが考えられる。親のサポートを検討するために、本節においては進路選択をめぐる親のサポートに関する先行研究を概観する。

Table1-5 青年の進路選択と親との関連についての国内の主な研究

研究者名と年		主な調査概要
1,	小川・田中(1979)	父親の職業が息子の職業選択に与える影響を検討した結果、専門的職業ほど職業継承性が高いことが認められ、親の期待が継承性を規定する重要な要因であること示した。
2,	副田・柏木(1980)	幼少期から母親が何らかの職業を持っていた娘は、現在フルタイムの職業に就いている、現在は職業に就いていない場合でも将来フルタイムで働きたいと思っているなど職業志向性が高かった。
3,	伊藤(1980)	女子短大生を対象とした調査の結果、両親から明確な性役割行動を期待されている者は、その性役割に基づいた職業経歴を選択していた。
4,	小川・田中(1980)	娘の職業選択において父親の職業の方が母親の職業よりも継承希望が大きく、親の継承期待が高い者の方が低い者よりも継承希望が高かった。
5,	田中・小川(1981)	看護女子学生を対象とした調査の結果、母親の期待が娘の看護職継承性を規定しており、母親を職業上のモデルとして同一視の重要性を指摘した。
6,	田中・小川(1982)	親の期待と職業モデルとして親を同一視するということが、親の職業を子どもが継承するプロセスにおいて重要な役割を持っていることを明らかにした。
7,	淵上(1984a)	大学進学理由をめぐり教師から影響を受けていると認知している生徒は専門知識や教養をつけたいという理由をもつ生徒、母親から影響を受けていると認知している生徒は親孝行や親の勧めという理由を持つ生徒が多かった。
8,	淵上(1984b)	教師から影響を受けたと認知している生徒は、教養や専門知識を身につけたいという大学への進学動機を持ち、適性や将来の職業から大学を選択する生徒が多く、母親から影響を受けたと認知している生徒は親の勧めや親孝行などの動機を持ち、家庭の経済事情や地理的な要因を重視して大学を選択する生徒が多かった。
9,	淵上・狩野(1984)	中学生は進学において友人、父親、母親、先生から影響を受け、先生から影響を受けた生徒は進学動機として知的欲求や自己実現欲求をもつ者が多く、母親から影響を受けた生徒は周囲の人物に従う者が多いことを指摘した。
10,	田中・小川(1985)	教師、建築設計士という専門職業に従事する親の職業を大学生が継承する傾向が高く、そこには親の職業的態度が重要な規定要因であることを明らかにした。
11,	松井(1986)	親子間の労働価値観の類似度について検討した結果、親から影響を強く受けた大学生の方が、弱い大学生よりも、親子間の労働価値観の類似度が高かった。
12,	清水・坂柳(1988)	高校生を対象とした調査の結果、父親や母親、友人、教師といった身近な人物と会話する頻度が多いほど、教育的および職業的進路成熟が高いことを示した。
13,	久田・箕口・千田(1990)	大学受験をめぐり、両親、先生、友だちなどからのソーシャルサポートが高い受験生ほど積極的なコーピングを行っていた。
14,	伊藤(1995)	女子短大生を対象に調査を行った結果、父母の示す家庭か職業かという娘の性役割に関する指向性は娘の職業生活を規定することを明らかにした。
15,	平石(1997)	職業的アイデンティティ探求をめぐり親子間相互交渉という視点から検討した結果、親子間相互交渉について、「自己探求型」、「結合型」、「再同一視型」という3つのタイプに分類した。
16,	下村・木村(1997)	就職活動中の大学生は、家族から経済的、情緒的なサポート、友人から就職活動、企業関連情報、情緒的サポートなどサポート源により異なるサポートを得ていたことを明らかにした。
17,	高井(2001)	親から明確に価値の継承を言われて受け継いだ「直接継承」、親の言動を見て受け継いだ「間接継承」のうち、親の職業を受け継ぎたいと思っている者ほど「直接継承」が高かった。
18,	金井・三後(2004)	「キャリアパースペクティブ」において、職業や働き方の目標となる人物であるキャリアモデルの存在の重要性を指摘した。
19,	水野・石隈・田村(2003)	中学生の人間関係における適応については友達からのサポートが重要であるが、進路領域の適応においては保護者からのサポートが重要であることが明らかにした。
20,	平尾(2004)	大学生の親は子どもの就職について地元、安定志向を持ち、親に相談してほしい、卒業後すぐに正社員として働いてほしいという思いが高いことを明らかにした。

21	堀 (2004)	無業の若者には、家族以外の人間関係が希薄な「孤立型」、地元の同年齢という限定された人間関係しかもっていない「限定型」が多く、限定されたソーシャルネットワークの問題点を指摘した。
22	小杉 (2004a)	若年無業者増加の背景の一つとして家庭に関する要因があり、経済的な困難さ、家庭における子どもに対する関心の低さ、期待の低さ、教育への過剰な関心などを指摘した。
23	小杉 (2004b)	職業への移行が困難な状況について、厳しい家計状態や子どもへの関心の低さ、特定の進路への期待、過剰な自己実現志向への理解、教育達成に関する関心の薄さを指摘した。
24	鹿内 (2004)	女子高校生を対象とした調査の結果、親を望ましいモデルと認知している者ほど進路選択に積極的に取り組もうとする態度が高かった。
25	上村 (2004)	就職活動に関して親に話す頻度が高く、親からのアドバイスが多い者ほど、就職活動に対する自己評価が高いが、親が就職先を紹介するなど過度な行為は自己評価を低めていた。
26	本田 (2005)	フリーターに対するヒアリング調査から、学校から職業への移行を困難にさせている要因の一つとして、進路に関する家族からのアドバイス機能不全を指摘した。
27	宮本 (2005a)	学校から職業への移行困難事例を分析し、親の経済水準の低さ、子供の職業に対する無関心や不適切な態度が学校から仕事への移行を困難にしている要因であることを指摘した。
28	石毛・無藤 (2005)	高校受験期の中学生にとって、母親、友人、先生からのサポートがストレス反応の抑制に好ましい関連を示していた。
29	北原・佐々木・岡部 (2005)	進学、職業に関して大学新入生の過半数が相談しており、相談内容については「将来や進路の選択」、次いで「受験校の選定」、「学費等の金銭面」が多かった。
30	三宅・遠藤 (2005)	大学生とその保護者を対象に調査を行った結果、多くの親は子どもの将来の職業について子どもとの会話経験があり、親の子どもが安定した評判の良い就職をしてほしい思いは高かった。
31	鹿内 (2005)	同性の親が大学生にとって好ましいモデルとなり、職業意識に好ましい関連を示すが、父親娘関係でも職業人という役割を担う父親をモデルとすることと職業意識と好ましい関連を示した。
32	牛尾 (2005)	就職をめぐる大学生は男女とも家族の中では母親が一番の相談相手であり、男子学生については父親も母親と同程度で相談相手として選ばれていたことを明らかにした。
33	鹿内 (2006)	職業人として親をモデルとする傾向の高さと職業意識との間に好ましい関連、女子大学生は結婚や出産などの関連から、モデルとして母親の重要性を明らかにした。
34	矢崎 (2006)	大学生の進路選択に関する親の期待について検討した結果、雇用条件の良さや安定など「安定期待」、社会人として自立した生活など「自立期待」という2つの期待に大別された。
35	田澤 (2006)	親と会話があり、支持的であると親を認知している大学生は就職を先延ばしにしようという傾向が低く、就職に必要な情報や自信もあるが、職業に関する不安もあった。
36	松田・前田 (2007)	親や友人のサポートは自己効力感に正の影響を与え、自己効力感は未関与に負の影響を与えていた。
37	鹿内 (2007)	職業選択において、「親のアドバイス」、「親の期待や希望」、「親の仕事」という親の要因の存在を指摘した。
38	山口・下平 (2007)	高校生の進路に関する悩みは、将来の自己実現や経済的な支援が考慮されることから、友だちや教師よりも親に対する被援助志向性が高かった。
39	松本 (2008)	高校生は肯定的な存在モデルとして男子では父親、有名人、女子では有名人、母親をモデルとしている生徒が多かったことを明らかにした。
40	新見・前田 (2008)	中学生を対象とした調査から、学校、進路に関することを家族や友人と話す者ほど、キャリア意識が高いことを明らかにした。

41,	高橋(2008)	男子青年を対象とした調査から、進路について両親と議論しようとする学生ほど、アイデンティティ感覚が高いという関連を示した。
42,	高橋(2009)	女子青年を対象とした調査から、進路について両親と議論しようとする学生ほど、アイデンティティ感覚が高いという結果を明らかにした。
43,	安達(2009)	大学生にとって親など周囲からのサポートは自己向上に関する動機に正の標準偏回帰係数を示していることを明らかにした。
44,	太田・飯田(2009)	高校生は進路決定の過程において、男性に比べて女性の方が親に対して「情緒的サポート」を求めている。
45,	大谷・木村・小関・藤生(2010)	就職希望の高校生の進路選択をめぐるサポートとして「友人のサポート」, 「モデルとしての友人の存在」, 「安心できる家庭」, 「教員のサポート」, 「親のサポート」の存在を指摘した。
46,	鹿内(2010)	父親の「支持的態度」が高いほど職業決定をめぐる「回避」, 「未決定」, 「不安」は低い, 母親にはそのような関連が示されなかった。
47,	成田・緒賀(2010)	大学生は友人, 家族, 大学スタッフの順に援助を求めており, 相談してよかったという援助要請経験は進路選択に関する自己効力とポジティブな関連を示していた。
48,	赤田・若槻(2011)	大学生のソーシャル・サポートと自己効力, 職業的不安について検討した結果, 進路決定者方が未決定者よりも友人のサポート、自己効力が高かった。
49,	水野・佐藤(2012)	就職活動中のサポート資源について検討した結果, 友人, 先輩, 家族, 大学, 書籍, インターネットなどサポート源があり, それぞれのサポート内容を整理した。
50,	中條(2012)	高等学校の進路相談について検討し, 学校は親には生徒の意思を尊重しながらも, 進路に関する客観的データを示すなど関わり, 生徒には自己理解を促進するかかわりの重要性を指摘した。
51,	鹿内(2012)	父親の「支持的態度」は男女共に「職業未決定」, 「就活不安」と弱い関連が示され, 母親の「支持的態度」は, 男子のみ「未決定」, 「決定回避」の低さ, 「就活不安」の低さとの関連した。
52,	浦上・山中(2012)	就職活動中の学生は家族や友人から現実を告げる, 精神的な安定に関する言葉がけを受けていたが, 同じ言葉がけでもやる気が高まるかプレッシャーになるかは就職活動に対する個人の意味づけにより異なることを指摘した。
53,	神戸・菅野・大月(2013)	大学受験期の進路選択過程におけるソーシャル・サポートにはポジティブな面もあるが, 心理的負荷などネガティブな側面もあることを指摘した。
54,	中野(2013)	進路決定をめぐり, 親主導ではなく, 子どもの意見を尊重し, 支持するかかわり, 親子の意見の相違を明確に述べ, 子どもが意見を明確化するかかわりが重要であることを示した。
55,	大谷・木村・藤生(2013)	就職希望の高校生を対象とした調査の結果, 親, 教師からのサポートは進路意思決定に対して正の標準偏回帰係数が示された。
56,	鹿内(2013)	父親から息子への「相互性(他者の見解に敏感でそれを尊重する)」の高さが息子のアイデンティティ確立をめぐり好ましい関連を明らかにした。
57,	安達・佐藤・赤木(2014)	中学生にとって進路決定は, 親との「自立をめぐる葛藤」, 「依存から自立へというテーマ」が含まれていることを明らかにした。
58,	鵜木・橋本(2014)	進路自己効力が高いほど, 保護者, 友人, 教員からサポートを得やすく, 友人からサポートの得やすさと進路自己効力の間に好ましい関連を示した。

2.1 進路選択に関する親のサポートの国内の研究

青年がサポートを主にどのようなサポート源から受けるのかは発達段階により異なる。尾見(1999)は小学5年生、中学1～3年生、高校2年生を対象としてサポートの比較検討を行い、中学生以降に父親や母親といった家族からのサポートは減少するが、親しい友人からのサポートが増加し、主なサポート提供者が両親から友人に移行することを明らかにした。この結果は、Buhrmester & Furman (1986 ; 1987) といった国外のサポートの横断的研究で得られた知見とも一致する。

サポートの適応や精神的健康といった面への効果について、嶋田(1996)は中学生、高校生、大学生を対象としてサポートの利用可能性の知覚とストレス反応との関連を検討した結果、中学生、高校生においては両親のサポートの利用可能性の知覚が高い生徒の方が、友人からのサポートの利用可能性の知覚が高い生徒よりも、ストレス反応が低かったが、大学生ではその逆の結果を報告している。中学生や高校生の精神的健康において、友人よりも家族からのサポートが重要であるということは岡安・嶋田・丹羽・森・矢富(1992)でも指摘されている。つまり、中学生以降、親から友人へと主なサポート源は移行していくものの、サポートの効果については、中学生、高校生においては親からのサポートは依然として重要であると考えられる。特に進路に関する問題については、学年が上がるにつれて社会へ出ていく時期が近づき、将来の職業と関係する進学や就職をめぐる課題は青年だけでなく親にも大きな関心事となる。

中学生における進路選択をめぐる親のサポートについて、水野・石隈・田村(2003)の中学生を対象とした調査では、友人関係上の問題など「社会領域」の適応には友達からのサポートを多く受けていた生徒ほど高い適応を示していたが、自分の進学先や将来の職業、生き方に関する悩みなど「進路領域」においては保護者からサポートを多く受けていた生徒ほど高い適応を示しており、問題領域により効果的なサポートが異なることがわかる。また、石毛・無藤(2005)は高校受験期のストレス反応の抑制において母親、友だち、教師からの知覚されたサポートの重要性を指摘している。このように進路選択に関して、友人や教員という人物からのサポートも重要であるが、親のサポートも重要性であることが考えられる。

高校生においても進路選択に関して親からのサポートは重要であると考えられる。久田・箕口・千田(1990)の大学受験を控えた高校生を対象とした調査によれば、父親、母親、きょうだい、友

人からの利用可能なサポートが高い生徒ほど、勉強に取り組むなど積極的に課題に取り組む傾向があり、利用可能なサポートが低い生徒ほど、気晴らしなど受験からの回避、諦めるという傾向を指摘している。山口・下平（2007）は、進路の悩みは教師や友人よりも親や家族に相談する傾向が高いことを明らかにし、この結果について親とは高校卒業後も密接な関係が続き、経済的な支援の存在であり、進路を親に相談する傾向が強いのではないかと推察している。（社）全国高等学校PTA 連合会・（株）リクルート合同調査調べによる「高校生と保護者の進路に関する意識調査」（2012）でも、高校生は進路について「母親」に相談する生徒が最も多く、次いで「友人」、「父親」、「高校の担任の先生」の順であり、男女共に「母親」が一番の相談相手だった。相談相手となる理由には、母親は一緒にいる時間が長いので自分のことを理解してくれている、父親は身近な社会人であるという理由があげられていた。北原・佐々木・岡部（2005）の 看護、保育、福祉、栄養を専攻する学部に入学者を対象とした調査でも、現学校への進学について親に相談した経験のあるものは全体の約 9 割であり、そのうちで相談相手については「両親とも」が約 5 割、「母親」が約 4 割、「父親」は約 1 割であり、相談内容には「将来や進路の選択」、「受験校の選定」、「学費等の金銭面」などがあつた。また、大谷・木村・小関・藤生（2010）は就職を希望する高校生にとって、親、友人、教員からのサポートと共に、モデルとなる友人の存在、「安心できる家庭」がサポートとなっており、親のサポートを高く知覚している生徒ほど進路選択に関する自己効力が高かった。さらに、同じく就職を希望する高校生を対象とした大谷・木村・藤生（2013）の調査では、親のサポートと教員のサポートの知覚が高い生徒ほど進路に対する意思決定の度合いが高く、就職を希望する高校生にとって、親の関心の高さや親と話し合うことなどを通じて進路意思決定が進むことを推察している。このように、高校生にとって、友人や教師というサポート源から得られるサポートの重要性と共に親のサポートの重要性も明らかにされており、親のサポートについて焦点を当ててより検討していくことが必要である。

一方、大学生の進路選択に関する親からのサポートについては、中学、高校とは異なった様相を見せる。大学生の進路選択に関する課題の多くは、大学から職業への移行をめぐるものである。大学生の進路に関するサポートに関する研究には、就職活動中の大学生のサポートを検討した研究が多い（水野・佐藤, 2012; 下村・木村, 1997 など）。下村・木村（1997）は、就職活動中の大学生は、「家族」から主に経済的な支援や情緒的なサポート、「先輩」から主に就職活動や企業関

連情報、情緒的なサポート、「同性の友人」から主に就職活動、企業関連情報、情緒的サポート、「異性の友人」から情緒的サポートを受けており、サポート源により異なるサポートを得ていることを明らかにした。また、水野・佐藤（2012）の就職活動中のサポート資源に関する研究では、就職活動中の学生は就職活動をしている友人、就職活動をしていた先輩といった人物だけでなく、就職サイトや書籍など自助資源をよく活用して就職活動を行っていることを明らかにした。成田・緒賀（2010）の就職活動をしている、またその予定である3年生を対象にした調査でも、進路選択をめぐり最も援助を求めていたのは友人であり、次いで家族、大学の教職員という順であった。このような先行研究から、大学生にとって、同じ課題に取り組んでいる友人といった人物は重要なサポート源であるといえる。しかし、親もサポート源として存在しており、友人などとは異なるサポート機能を有していることが考えられる。

大学生の進路、主に職業の選択を考えると、その課題に対して以前の学校段階に比べて親の承認や物理的な支援は必須ではない。しかし、親のサポートが進路選択に促進的な関連を示すことが先行研究から明らかにされている（Guay, Senécal, Gauthier & Fernet, 2003；Lent, Brown, Nota & Soresi, 2003；Restubog, Florentino & Garcia, 2010）。また、落合・佐藤（1996）の中学生、高校生、大学生を対象とした心理的離乳の過程に関する研究によれば、中学生や高校生においては大学生に比べて「親が子を危険から守る親子関係」が多く、「子が親から信頼・承認されている親子関係」は少ないことが報告されており、大学生の進路選択に関する親のサポートは、以前の学校段階に比べて内容が異なるサポートが存在し、それが学生の進路選択を促進している可能性が考えられる。近年は学生の保護者向けに就職説明会を行う大学も多く、就職活動を親子で乗り切るための書籍なども出版されており（小島・東海, 2004；リクナビ HP, 2012）、大学生における親のサポートについては今後より一層検討していくことが望まれる。

また、サポートの効果に関して、下村・木村（1997）は家族、同性・異性の友人、先輩といった人物からのサポートと就職活動との満足度との関連を、就職活動関与の程度といった変数を含めて検討した結果、就職活動関与が高い学生は就職活動の満足度とサポートに正の関連が見られたが、就職活動の関与が低い学生はサポートと満足度に正の関連が見られず、その原因として不満の多い就職活動であったためにサポートを多く受けた可能性を指摘している。つまり、サポートを得ながらも、自分がやり遂げられるかどうか本人の自己評価に強く影響し、サポートは課題

の解決になっても、自己評価は低められ、最終的に就職活動全体の満足度が低くなったのではないかと推察している。一方、松田・前田（2007）は、就職活動に限定せず、職業の選択と親と友人のサポートに関して検討した結果、サポートは自己効力感に正の影響を与えており、自己効力を介して職業の選択に間接的にポジティブな影響を及ぼす可能性を示唆した。また、成田・緒賀（2010）の調査でも、問題が解決・軽減した、理解してもらえたと評価されるサポートは、進路探索行動に直接ポジティブな関連を示す進路選択に対する自己効力に正の関連を示していた。このように、サポートが進路選択に関する自己効力といった認知変数を媒介し、進路に関する行動や態度に間接的な関連が示唆されるという海外の研究の知見があるが（Constantine, Wallace & Kindaichi, 2005 ; Guay et al., 2003 ; Lent et al., 2003 ; Restubog et al., 2010）, しかし日本人が取りやすいコミュニケーションスタイルや養育態度の異なり、文化差があり、日本における親のサポートについてより詳細に検討していくことは意味があると考えられる。

以上、青年の進路選択における親のサポートについて国内外の研究を概観した結果、親のサポートの重要性、親のサポートと進路選択との関連を検討していくことがより必要であると考えられる。

2.2 進路選択に関する親のサポートの国外の研究

国外で親からのサポートと青年の進路選択に関する関連を検討した研究には Table1-6 のように進路選択に関する自己効力、進路探索行動や進路不決断といった変数との関連を検討した研究がある（Constantine et al., 2005 ; Guay et al., 2003 ; Flores & O'Brien, 2002 ; Leal-Muniz & Constantine, 2005 ; Lent et al., 2003 ; Nota, Ferrari, Solberg & Soresi, 2007 ; Restubog et al., 2010 ; Turner & Lapan, 2002）。

Table1-6 青年の進路関連変数と親からのサポートに関する国外の主な研究のまとめ

	研究者名と年	対象者	主な独立変数	主な従属変数	主な調査結果
①	McWhirter, Hackett, & Bandalos (1998)	高校生 (Mexican American high school girls)	社会経済的地位, 両親のサポート	職業関与	両親からのサポート得点が高いほど、職業関与が高いことが明らかにされた。
②	Lapan, Hinkelman, Adams, & Turner (1999)	高校生	Hollandの職業興味に関する価値感, 効力感, 親のサポート	Hollandの職業興味	職業興味に直接影響を与える価値感と効力感に親からの知覚されたサポートは影響を与え、親のサポートの職業興味へ直接的な影響は示されなかった。
③	Turner & Lapan (2002)	中学生	進路自己効力, 親のサポート	Hollandの職業興味	知覚された親のサポートは進路自己効力に対する有意な説明変数であり、進路自己効力は職業興味を直接予測していたことを示した。
④	Lent, Brown, Nota, & Soresi (2003)	高校生	職業に関する自己効力と結果予期, 職業への興味, ソーシャルサポートや障害,	Hollandの職業類型に関する選択考慮	自己効力と結果予期は興味を予測しており、興味は自己効力、結果予期と選択考慮の媒介していた。ソーシャルサポートと障害は自己効力との関連が明らかにされた。
⑤	Guay, Senécal, Gauthier, & Fernet (2003)	大学生	両親や仲間のサポート, 進路選択に関する自律性, 進路選択自己効力	進路不決断	進路不決断に進路選択自己効力と進路選択における自律性が正の関連を示しており、自己効力と自律性と親や仲間からの自律的なサポートの認知との間に正の関連を明らかにした。
⑥	Turner, Steward, & Lapan(2004)	中学生	数学・科学に関する自己効力と結果予期, 父親, 母親のサポート	数学・科学に関する進路興味	父親と母親のサポートは数学・科学に関する自己効力を予測しており、特に母親からのサポートは数学の数学に関する結果予期も予測していた。数学に関する自己効力と結果予期は数学・科学に関する進路興味を予測していたことを明らかにした。
⑦	Constantine, Wallace & Kindaichi (2005)	高校生 (African American Adolescents)	職業に関する障害の知覚, 進路に関するサポート	進路の明確さ, 進路不決断	職業に関する障害の知覚は進路不決断と負の関連が、知覚された親からのサポートは進路の明確さと正の関連を示した。
⑧	Leal-Muniz & Constantine(2005)	大学生 (Mexican American college students)	親の進路に関するサポート, 進路に関する障害の知覚, 進路に関する態度	職業探索とコミットメント, 早期完了の傾向	知覚された親のサポートは職業探索やコミットメントに対して正の関連を示し、逆に進路選択における早期完了の傾向に対しては負の関連を示した。
⑨	Navarro, Flores, & Worthington(2007)	中学生 (Mexican American middle school students)	数学・科学に関する過去の遂行の達成, 社会階層, 周囲のサポート	数学・科学に関する自己効力と結果予期, 数学・科学に関する興味	社会階層は数学・科学に関する過去の個人的達成を予測していた。数学・科学の過去の個人的達成と知覚された両親のサポートは数学・科学に関する自己効力と正の関連を示し、自己効力は興味に対して正の関連が示された。
⑩	Nota, Ferrari, Solberg, & Soresi(2007)	高校生	進路探索自己効力, 家族からのサポート	進路不決断	進路探索自己効力は、家族のサポートと正の関連を示し、進路探索自己効力を媒介して進路不決断を抑制する影響を示唆した。

⑪	Creed, Fallon, & Hood (2009)	大学生	周囲からのソーシャルサポート、計画、自己探索	進路に対する関心	周囲からのソーシャルサポートは、自己探索や計画に正の関連を示し、自己探索は進路に対する関心と正の関連を明らかにした。
⑫	Dietrich & Kracke (2009)	中学生	親のサポート、かわり	進路探索、進路選択困難	親のサポートは進路探索に対して促進的な関連を示しており、一方で親の関与の欠如は進路選択困難と関連が示した。
⑬	Ma & Yeh (2010)	高校生 (Chinese immigrant high school students)	親からのサポート	進路・教育アスピレーション、大学進学計画	米国に在住する中国人の高校生を対象に調査を行った結果、進路に関する親からのサポートは進路および教育に関するアスピレーション、大学進学計画と正の関連を示した。
⑭	Restubog, Florentino, & Garcia(2010)	大学生	進路自己効力、親のサポート、キャリアカウンセリングを受けた回数	進路不決断	学生と親が評定した親のサポート、キャリアカウンセリングを受けた回数は、6か月後の進路自己効力に正の関連を示し、さらに自己効力は進路不決断に直接関連を明らかにした。
⑮	Garcia, Restubog, Toledano, Tolentino & Rafferty(2012)	大学生	学習目標の方向づけ、親のサポート、	進路選択自己効力	親のサポートは、進路選択自己効力に対して正の関連を示し、学習目標の方向づけに対しては進路選択自己効力が正の関連を明らかにした。

特に進路選択に関する自己効力との関連を検討したものが多い(Guay et al., 2003 ; Lent et al., 2003 ; Restubog et al., 2010 など)。

「自己効力 (self-efficacy) 」とは、ある結果をもたらすために必要な行動を自分が成功裏に遂行できる能力が自分にあるかどうかという自己評価であり、行動に直接影響を与えると仮定される (Bandura, 1977) 。個人は何らかの行動を遂行する前にその行動を成功裏に遂行できるかどうか予測し、十分に遂行できるという高い自己効力がある場合、行動し、困難に直面したとしても努力し、克服できるよう働きかけるが、自己効力が低い場合、行動に移すことを躊躇する、回避する (Bandura, 1986) 。この自己効力の概念を、進路領域に適応したのは、Hackett & Betz (1981) であり、伝統的に女性が主に従事する職業、男性が主に従事する職業名を取り上げ、その職業に求められる課題を達成することに関する自己効力を質問し、男性は男性中心の職業にも女性中心の職業にも同程度の十分な自己効力を示したが、女性については女性中心の職業には男性よりも高い自己効力を示し、男性中心の職業に対しては男性よりも低い自己効力を示した。この結果については、女性はそれまでの社会経験を通じて形成した伝統的に男性が中心に従事している職業に対する自己効力の低さが、自身の可能性の過小評価につながり、そのような職業を選択、従業

することを阻害しているのではないかと指摘されている。その後、進路選択のプロセスにおいて Taylor & Betz (1983) が自己効力の概念を適用し、彼らは進路選択のプロセスにおいて求められる行動に対する自己効力である「進路選択に対する自己効力 (career decision-making self-efficacy)」という概念を提唱、それを測定する尺度 (Career Decision-Making Self-efficacy Scale; CDMSE) を開発した。CDMSE は、Crites (1965) のキャリア成熟モデルにおける進路選択能力に基づき作成され、「自己認識 (accurate self-appraisal)」、「職業情報の収集 (gathering occupational information)」、「目標選択 (goal selection)」、「将来の計画 (making plans of for the future)」、「問題解決 (problem solving)」という 5 つの領域における自己効力を測定する全 50 項目からなる尺度から構成されている。CDMSE が作成され、進路選択に関する自己効力と進路不決断 (career indecision)、探索行動といった変数との関連を検討する研究が増加し (Blustein, 1989; Taylor & Betz, 1983; Taylor & Popma, 1990)、国内においても、浦上 (1995)、富安 (1997) が進路選択に関する自己効力を測定する尺度を開発し、自己効力が進路選択に関する行動に対して促進的な影響を及ぼすことが縦断的研究でも明らかにされている (浦上, 1996a; 富安, 1997)。

また、自己効力は操作可能な変数であるため、自己効力を高めるためのさまざまな試みがなされてきた (城, 2004; 川崎, 2000; 室山, 1997; 2002; 大瀧・古川, 1999; 下村, 2007; 浦上, 1996b; 横山, 2004)。下村 (2000; 2007) や室山 (1997; 2002) は、生徒個人の職業の関心や成熟の程度に応じた効果的な介入について検討し、下村 (2007) は中学生を対象にコンピュータを用いた実践研究から、進路について自律度の高い生徒は進路に関して既にある程度の自己知識体系を持っており、自己理解に関するテスト行って自己知識体系を活性化、テストの結果に基づいて情報を効果的に活用していくこと、自律度の低い生徒は自身の興味や適性などの自己知識体系が十分でないため、まずコンピュータを自由に使用してさまざまな職業情報を得て、自分の興味など職業情報を処理する自己知識体系を整理させることが、自己効力感を高めるには効果的な介入であると指摘している。浦上 (1996b) は自己や職業について理解を深め、意思決定を促進させることを目的としたワークブックを開発し、大学生を対象にワークブックによる各自の学習を通じて進路選択に関する自己効力の形成を検討した結果、明確な有効性は確認できなかったが、その要因にコンピュータの普及やワークブックに収容できる情報数や収容方法などの媒体の要因、一人でも

取り組みやすく受け入れやすい情報提示という要因など改善点を指摘し、周囲の他者からのアドバイスの重要性も指摘している。

国外で親のサポートと青年の進路選択に関する関連を研究した研究として、Raque-Bogdan, Klingaman, Martin & Lucas (2013) は大学生を対象に調査を行った結果、進路に関する親のサポートは教育や進路に関する効力感に好ましい関係を示すことを明らかにした。Nota et al., (2007) は高校生を対象として、知覚された家族のサポート、進路探究活動を成功裏に遂行できるかどうかという進路探究自己効力と、進路不決断との関連を検討した結果、進路不決断に直接負の関連を示す進路探究自己効力に対して家族のサポートは正の関連を示し、家族からのサポートと進路不決断との関連を進路探究自己効力が媒介することを指摘した。また、Guay et al., (2003) の大学生を対象とした調査でも、知覚された家族からのサポートが進路選択自己効力に正の関連を示し、進路選択自己効力が進路不決断に負の関連を示しており、サポートが進路選択自己効力を介して進路不決断に抑制的な影響を与えることを示唆している。その他の研究においても (Lent et al., 2003 ; Restubog et al., 2010) , 親からのサポートは進路選択に関する自己効力という認知的変数と好ましい関連を示し、間接的に興味や不決断に関連することが示唆されている。

サポートと進路選択に関する関連を検討した研究は、Lent, Brown, & Hackett (1994) の「社会認知的進路理論 (Social Cognitive Career Theory:SCCT)」を理論的背景としたものが多い (Lent et al., 2003 ; Turner & Lapan, 2002 ; Restubog et al., 2010)。社会認知的進路理論は、既存の進路理論を整理・統合し、Bandura (1986) の社会的学習理論を適用しており、自己効力、結果予期 (out-come)、目標 (goal) という個人の認知的変数を中心に据え、進路選択に関して説明している。しかし、認知的変数ばかりに注目するのではなく、経験的要因、ジェンダー (性別) や民族性 (人種) といった個人的要因、サポートや障害といった環境的要因も考慮し、個人的要因や環境的要因は個人の認知的変数と相互作用し、個人は進路を歩んでいくと考えられる。例えば、Figure 1-1 のように自己効力と結果予期から興味へ、興味から目標の設定、活動の選択、実行に至るモデルを提唱している。

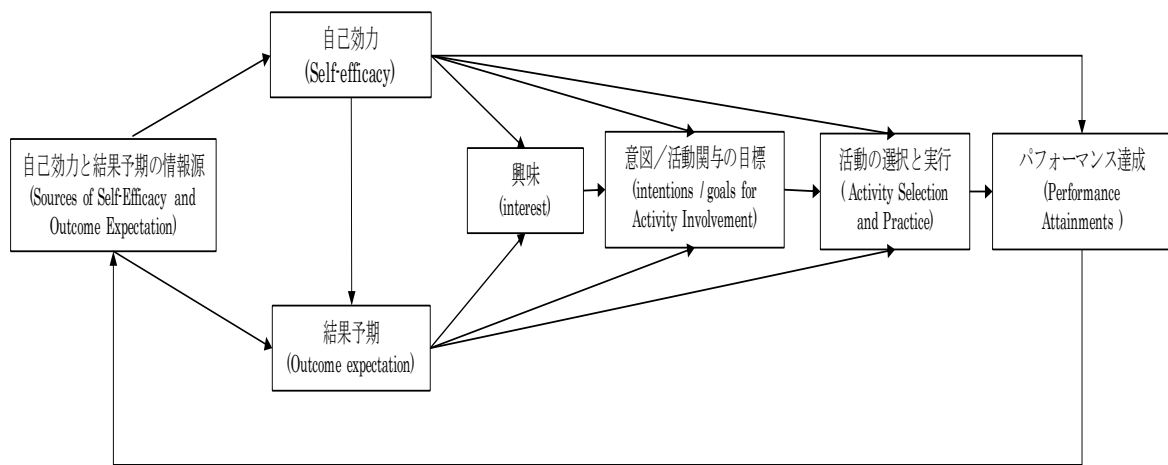


Figure1-1 自己効力と結果予期から興味、目標の設定、活動の選択、実行に至るモデル(Lent et al, 1994)

興味とは、「職業や進路に関する課題の好き、嫌い、無関心という個人の独特のパターン」(Hansen, 1984)であり、児童期から青年期にかけてさまざまな活動を経験する中で親や友人といった周囲の人々からその活動についてフィードバックを受け、強化される。その中で何度も経験し、フィードバックを受けた特定の活動に効力感を形成し、活動の結果に対しての期待も抱くようになる。これまでの経験から自分はある活動をうまく行う能力があるという効力感、良い結果が得られるだろうという期待が育まれ、その活動に対して個人は興味を形成し、そして興味は進路に関した目標の設定について検討し、行うべき行動を選び、実行され、パフォーマンスが達成される。さらに、そのパフォーマンスの達成に基づいて自己効力、結果予期が変容し、興味へと再びこのプロセスが続くと考える(Lent et al., 1994)。

この理論において、特に自己効力という認知的変数がモデルの中心となっている。自己効力は、現実の能力をかけ離れて高い場合は不準備なまま達成困難な課題に手をつけて失敗につながるが、低すぎる場合は遂行が可能な課題でさえ回避し、停滞させるため、実際の能力の水準をやや上回る程度の自己効力をもつことがパフォーマンスの達成には有効であると考えられている(Bandura, 1986)。また、Bandura (1977) は、操作可能な変数である自己効力の形成ないし変容させる4つの情報源が指摘している。これはSCCTにおいても取り入れられている。自己効力の形成・変容には、「遂行行動の達成 (performance accomplishment)」、「代理学習 (vicarious

learning)」、「社会的説得 (social persuasion)」、「生理的状态と反応 (physiological states and reactions)」という要因がある(Bandura, 1977)。「遂行行動の達成」とは実際の成功経験を個人が経験することである。成功経験は自己効力を高め、失敗経験は自己効力を低める。この遂行行動の達成は、自己効力に対するもっとも影響力のある情報源であり、またその影響力は課題の難易レベル、遂行する条件、評価などにより異なる。例えば、遂行が困難な状況において繰り返し成功を経験し、肯定的な評価を受ける、つまり強化を受けることにより、高い自己効力が形成される (Bandura, 1986)。「代理学習」は、他者が行った成功や失敗を観察することであり、これによっても自己効力に変容する。特に実際に遂行できない課題においては、この代理学習が重要な情報源となる。例えば、～が出来たのだからあのようになれば私にもできるだろう、～を見てこうすれば達成ができるのではないかという経験は、モデルと観察者の共通性、性別、経済状況、学業的背景、課題の特徴、問題解決のやり方などの点で共通している場合に、より一層代理学習は影響力をもつ (Bandura, 1986)。「社会的説得」は、課題に対する好意的な態度や、関心、励ましといった言語的な支え、助言など言葉による強化、行動への方向づけなどは自己効力を高め、無関心、非好意的な言葉といったことは自己効力を低める方向に働く (Bandura, 1986)。「生理的状态と反応」は、不安、抑うつといった情緒的状态は自己効力にネガティブに作用し、陽気、リラックスした情緒的状态は、課題に熟達している感覚を促進させ、自己効力にポジティブに作用するとされている (Bandura, 1986)。SCCTにおいては、このような4つの情報源は自己効力を形成・変容させる経験的要因として位置づけ、それら4つの情報源に影響を受けた自己効力、結果期待といった認知的変数が、進路選択に影響を与えると仮定している。

また、SCCTでは、個人が進路を選択するプロセスを、個人の認知的変数を中心に置きながらも、そこにサポートや障害といった環境的変数、性別や人種という個人的変数も含め、それらの変数が相互作用をしながら進むと説明している (Figure 1-2)。

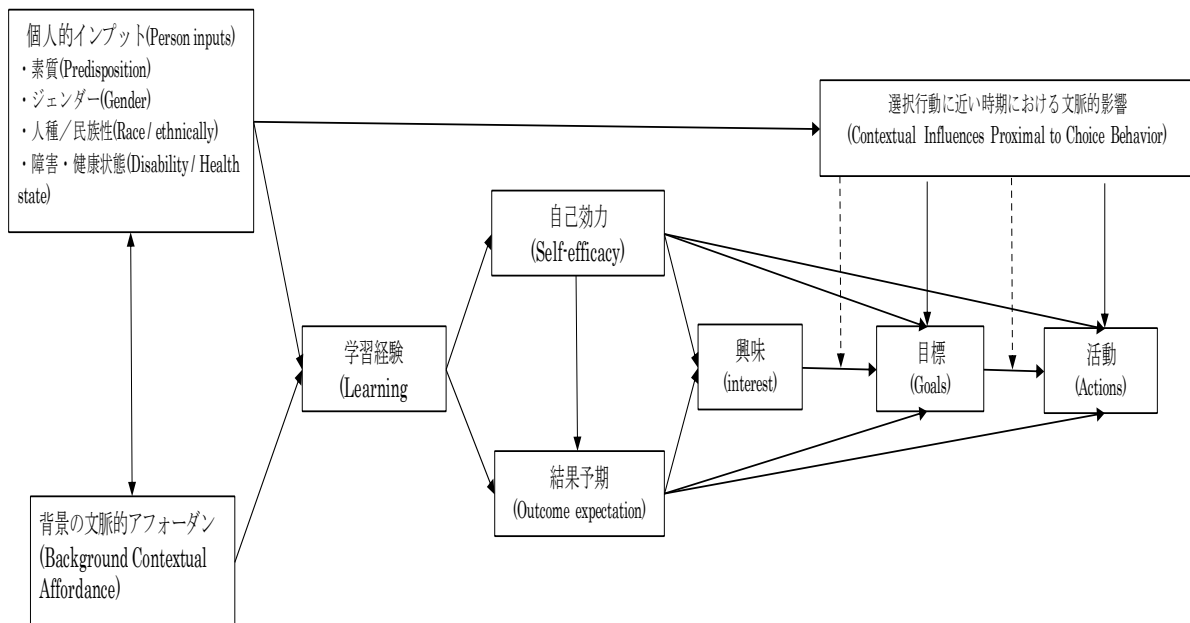


Figure1-2 認知的変数と環境の変数、個人的変数の相互作用に関するモデル (Lent, Brown & Hackett, 2000)

ジェンダーや人種といった個人的変数は、生物学的特性として扱うのではなく、それらに社会や文化が付与した心理的・社会的特性を重要視し、ジェンダーや人種に関連する経験が、自己効力といった認知的変数に影響を与えているとしている。例えば、性別により異なる学習機会を与えられ、その経験により形成された自己効力や結果予期を介して影響が及ぶと考える。

また、サポートや障害など環境的要因についても説明しており、サポート有無や程度など進路をめぐり自分を取り巻く環境を個人がどのように評価、解釈するかという個人の能動的な認知に注目し、サポートといった環境的変数について、何かの進路を選択、決定する時までの時間的な程度により、以下のように影響を2つに分類している (Lent et al. 2000)。

- ① 何らかの進路を決定する時期からは時間的にまだ遠く、認知的変数が形成されるプロセスに影響する末梢、文脈的な影響 (distal, background influence)
- ② 何らかの進路を決定する時期から時間的に近く、直前的な影響 (proximal influence)

しかし、2つのサポートは重複するものもあり、例えば家族からのサポートはあらゆる形で常

に存在し、どの時点においても大切な役割を担っている。サポートといった環境的変数は興味から目標の選択へのプロセス、目標から活動へのプロセスを調整しており、例えば個人が置かれている環境が良好であると認識している者ほど、興味に合った目標の選択し、目標から活動への関連は強める、逆に個人が置かれている環境を良好ではないと認識している者ほどその関連は弱くなる。つまり、十分なサポートがあるという状況において、個人は興味がそれと合った目標に発展し、目標がそれと合った活動の遂行につながりやすいが、例えば家族からの否定的な反応、雇用における差別といった要因は、興味とは異なる目標や活動を選択しやすくさせると指摘されている。

SCCT を背景としてサポートと進路選択に関する関連を検討した研究では、サポートが自己効力を介して興味や不決断に関連を示すという示唆が得られてきた (Lent et al., 2003 ; Turner & Lapan, 2002 ; Restubog et al., 2010) 。Turner & Lapan (2002) の中学生を対象とした調査では、知覚された親のサポートは、職業興味を直接的に予測する進路自己効力と関連を示し、サポートは職業興味に対しては自己効力を媒介として影響を及ぼすことを示唆した。同じ知見は Lapan, Hinkelman, Adams & Turner (1999) の高校生を対象とした調査でも得られ、彼らの調査では Holland の 6 つの職業類型に関する興味に直接影響を与える価値観や効力感に対して親のサポートは正の関連が見られたが、親のサポートと職業興味の直接的な関連は見られなかった。

このようにサポートが自己効力を媒介して進路に関する行動や態度と関連を示すことが明らかにされてきたが、他方で Constantine et al., (2005) の African American の高校生を対象とした研究では、進路に関する親のサポートが進路の明確さと正の関連を示したことを報告している。Leal-Muniz & Constantine (2005) は 大学生 Mexican American college students を対象に調査を行い、知覚された親のサポートは職業探索やコミットメントに対して正の標準偏回帰係数が示されたが、逆に進路選択における早期完了の傾向に対しては負の標準偏回帰係数が得られたことを明らかにしている。しかし、サポートと進路選択に関する行動や態度との直接的な関連を指摘したそれらの研究では、自己効力を測定していない。また、松田・前田 (2007) は、Leal-Muniz & Constantine (2005) の調査対象者は、多くの障害や貧しい支援体制の中で進路を選択していかなければならず、親のサポートが重要な役割を担っているため、サポートの直接的な影響がみられたのではないかという対象者の要因について指摘している。Navarro, Flores & Worthington

(2007) の Mexican American middle school の生徒を対象に行った調査の結果では、社会階層は数学・科学に関する過去の個人的達成を予測しており、数学・科学の過去の個人的達成と知覚された両親のサポートは数学・科学に関する自己効力を有意に予測したが、数学と科学に関する興味のある予測因は数学・科学に関する自己効力、数学・科学に関する結果予期だった。このように、マイノリティを対象とした調査からもサポートが職業に関する興味への自己効力を媒介とした関連が指摘されている。

また、Navarro et al., (2007) のように、ある特定の領域、例えば数学や科学の分野の学業や関連職業に焦点化し、サポートとの関連を検討した研究も存在する。Turner, Steward, & Lapan (2004) の中学生を対象として、数学に関する自己効力、数学に関する結果予期、父親のサポート、母親のサポートと数学に関する進路興味との関連を検討した結果、父親と母親サポートは共に自己効力と正の関連を示し、特に母親からのサポートは数学の数学に関する結果予期にも正の関連を示していた。しかし、興味については他の先行研究同様にサポートは直接的な関連は示されず、数学に関する自己効力と結果予期が数学・科学に関する進路興味が正の関連を示していた。

このように、海外ではサポートとさまざまな進路関連変数と関連を検討するだけでなく、数学や科学に関する進路とさらに領域を限定し、また対象者についても社会的弱者を対象とした研究など、ある領域、対象者を限定して検討している。国内においては、ソーシャル・サポートに関する研究、進路選択に関する研究は多くあるが、両者の関連を検討した研究は少なく、親のサポートと進路関連変数について、教育制度や雇用制度、文化が異なる我が国においても詳しく検討し、知見を蓄積していくことが求められる。

2.3. 養育態度，愛着，コミュニケーションなどにおける研究

親と青年の進路選択については，サポートという視点からだけではなく，養育態度，愛着，コミュニケーションなどの視点からも研究がなされている。

親の養育態度との関連については，Roe (1957) は，幼少期における親の養育態度，家庭環境が子どもの人格の形成に影響し，その結果，将来の進路を規定するという理論を提唱している。親の子どもに対する態度，親の態度に対する子ども認知，幼少期の家庭の雰囲気により，子どもの志向性が規定され，その結果，将来子どもが選択する職業の領域が方向づけられるという環状モデル (Circular Model) である (Roe, 1957)。例えば，一般的に家庭の雰囲気が暖かく，子どもへの親の態度が受容的で，親の態度を子どもは愛情があると認知している場合，子どもは対人志向的で，対人的接触を伴う職業領域，例えば，サービス，商業関係，組織・団体関係，一般文化的，芸術・芸能といった職業領域に進む傾向があるなどである。両親の養育態度と子どもの進路との関連を検討した研究はいくつか存在するが，それらは過去ではなく，現在の親の養育態度や養育行動と進路関連変数との関連を検討したものが多い (Dietrich & Kracke, 2009 ; Kracke, 1997 ; 2002 ; Vignoli, Croity-Belz, Chapeland, Fillipis & Garcia, 2005)。また，養育態度については応答性，統制の二軸で親の養育態度をとらえた Baumrind (1971) の視点を取り入れたものが多く，Kracke (1997) は，親の *authoritativeness*，青年の問題に関する開放的な態度や関心と青年の進路探索との間に望ましい関連を明らかにした。また，Kracke (2002) は中学生を対象とした縦断的な調査から，子どもの主体性を尊重する親の養育行動が，情報探索などの子どもの進路選択に関する行動に促進的な関連を示すことを明らかにした。Keller & Whiston (2008) は中学生のキャリア成熟と，子どもが自己決定を促す，子どもへの関心，誇りの高さといった親の養育行動との間に正の関連を報告している。さらに，Kracke, Schmitt, -Rodermund (2001) も，子どもに対して支持的な親の態度と青年の情報探究活動との間に正の関連を明らかにしている。

また，親と青年の進路選択については，愛着という視点からも検討されている。親との安定した愛着は安全基地として機能し，青年の活発な職業世界への探索を促進すると考えられ，青年期における自己や環境への探索活動と，母親，父親，友人といった重要な人物との愛着との間に正の関連が指摘されてきた (Felsman & Blustein, 1999 ; Ketterson & Blustein, 1997)。Blustein, Prezioso, & Schultheiss (1995) は，安定した愛着関係からもたらされる安心感は自己や環境の探

索を促進し、進路選択やコミットメントに促進的な関連を明らかにした。Ryan, Solberg, & Brown (1996) も大学生の進路探索自己効力と安定した愛着との間に好ましい関連を明らかにした。Wolfe & Betz (2004) は、大学生を対象に行った親への愛着と進路選択自己効力、職業コミットメントへの恐怖との関連を検討した調査からは、特に安定した愛着と進路選択自己効力に正の関連が示され、逆に職業コミットメントへの恐怖とは負の関連があり、安定した愛着が青年期の進路選択における重要性を指摘した。その他の愛着と進路選択に関する研究においても安定した愛着の重要性が指摘されている (Blustein, Walbridge, Friedlander, & Palladino, 1991 ; Emmanuelle, 2009 ; O'Brien, Friedman, Tipton, & Linn, 2000 ; Tokar, Withrow, Hall, & Moradi, 2003) 。また、Lopez & Andrews (1987) は進路不決断の大学生に対する臨床経験から、両親との過剰で不適切な結びつき、家族機能不全が青年の固体化のプロセスを阻害することで、青年は不決断に至っており、進路不決断は親子の分離による家族不安の軽減、自分とは相容れない親の期待のストレスから青年を守るという意味を指摘している。

国内でも青年の進路選択と親の養育態度、期待、モデル機能などに注目した研究がいくつか存在する。伊藤 (1980) の女子大学生と父母の養育態度との関連を検討した研究では、両親から伝統的な性役割に基づく躰を受け、両親が娘の職業中心の生活を望まない場合、娘は専業主婦という経歴をたどることを明らかにした。また伊藤 (1996) でも女子青年の職歴選択と両親の養育態度に関して、特に性役割に注目して検討し、両親が娘に示す養育態度が娘の家庭か職業かという志向性の違いを左右していたことを報告している。小杉 (2004a) は若年層の失業や無業、フリーターを生み出す要因を Figure1-3 のような多様な視点から検討し、家庭における経済的困難や親の期待といった不適切な養育態度の問題を指摘している。

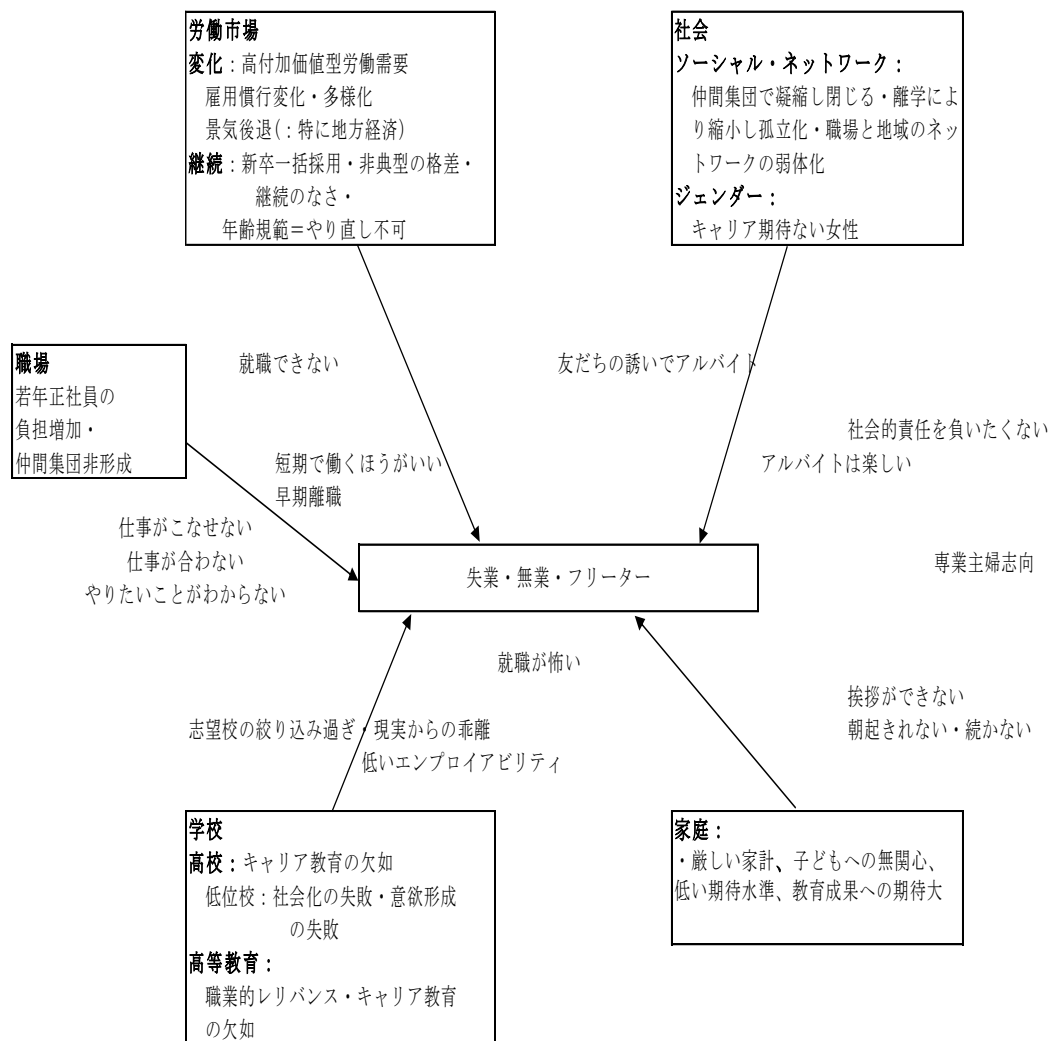


Figure1-3 若年就業問題の構造(小杉, 2004a)

また小杉（2004b）は若年者無業増加の背景として職業への移行が困難な状況に応じて、労働市場、学校、家庭、社会における要因を Table1-7 のようにも指摘し、ここでも家庭の経済状況や親の養育態度の要因の重要性がわかる（小杉, 2004b）。家庭の要因としては経済的な困難、子どもに対して放任的、無関心な態度、また逆に特定の進路に対する期待や過剰な期待がある。また、子どもがやりたいことをさせてやりたいという親の態度や働かないでも生活できる家庭状況という要因も学校から職業への移行を困難にしていることも指摘されている（宮本, 2004；小杉, 2004b など）。

Table1-7 職業への移行が困難な若者の状況について労働市場、学校、家庭、社会的要因（小杉，2004b）

困難状況のキーワード	労働市場	学校	家庭	社会等
刹那を生きる	高校への求人が少ない/友達 の誘いでアルバイト・ア ルバイトはお金のため/労 働力需要に対して低いエン プロイアビリティ	学校は消極的な居場所/高 校中退/遅刻欠席・学業不 振/学校の就職斡旋に乗れ ない	厳しい家計状況/親の子ど もへの関心が低い/朝起き られない，基本的生活習 慣の未確立	地域の友達との関係が密だが 閉じている。他の地域にはで ていかない/やりたいことは 特になし/友達もみんな同じ ような進路/遊ぶ金のために アルバイト
つながりを失う	学卒就職のプロセスに乗れ ない/正社員就業の経験が なく履歴書が書きにくい/ 就労への希望はあるが，社 会的関係の構築に課題	友人関係など，人間関係 の形成に失敗/学校の職業 斡旋に乗れない	親の転勤が多い家庭で あったケースも	学校契機の友人関係は殆どな い/就職後に何らかのトラブ ルで離職して，そのまま社会 との関係が縮小してしまう ケースも/人と話さない生活 がさらに対人能力を低下させ 就職できない悪循環も
立ちすくむ	大卒時点で就職活動はする ものの，キャリアの方向づ けができず限定的な活動/ 志望の絞り込みすぎ	キャリア志向なく高等教育 に進学/専門教育の職業 的レリバンスなし/大学の 就職支援活用も限定的	大学が当然という家計/親 は教育達成に関心が高い/ 自己実現志向にも理解を 持つことが多い	皆がするから就職活動とい うのではなく，自分の課題と して取り組んだ/親には申し 訳ないという気持ち強い
自信を失う	就職するが要求される水準 の仕事がこなせず早期離職 /迷惑をかけないために短 期のアルバイト/2浪2留な どで年齢が高いため就職を あきらめるケースも	専門教育の職業的レリバ ンスなし/大学の就職支援 を活用	大学が当然という家計/親 は教育達成に関心が高い	心身ともに疲れた状態，次の 仕事はゆっくり探したい
機会を待つ	高校への求人が少ない/地 域経済の衰退		就職のため親元を離れる ことは希望しない	地元志向が強い

宮本（2005a）は学校から仕事への移行を，親の経済水準，親の職業に対する態度や養育態度などから検討している（Figure 1-4）。経済水準が低く，子どもへの教育に対する関心の低い「放任型」（Figure 1-4 における「類型Ⅰ」に相当），親の教育水準や教育に対する関心は中程度であるが，卒業後の進学は経済的に困難であり，就職難など社会的な影響を受けやすい「就職難型」（Figure 1-4 における「類型Ⅱ」に相当），親の教育水準や子どもへの教育に関する関心は高いが，それに対して子どもが親の期待に応えられず，自立が困難な「期待はずれ型」（Figure 1-4 における「類型Ⅲ」に相当），その3つの類型に当てはまらず，複雑な事情をかかえる「複雑事情型」（Figure 1-4 における「類型Ⅳ」に相当）の4つに分類し，親の経済水準の低さ，子どもの職業に対する無関心や不適切な態度が学校から仕事への移行を困難にすると指摘している。

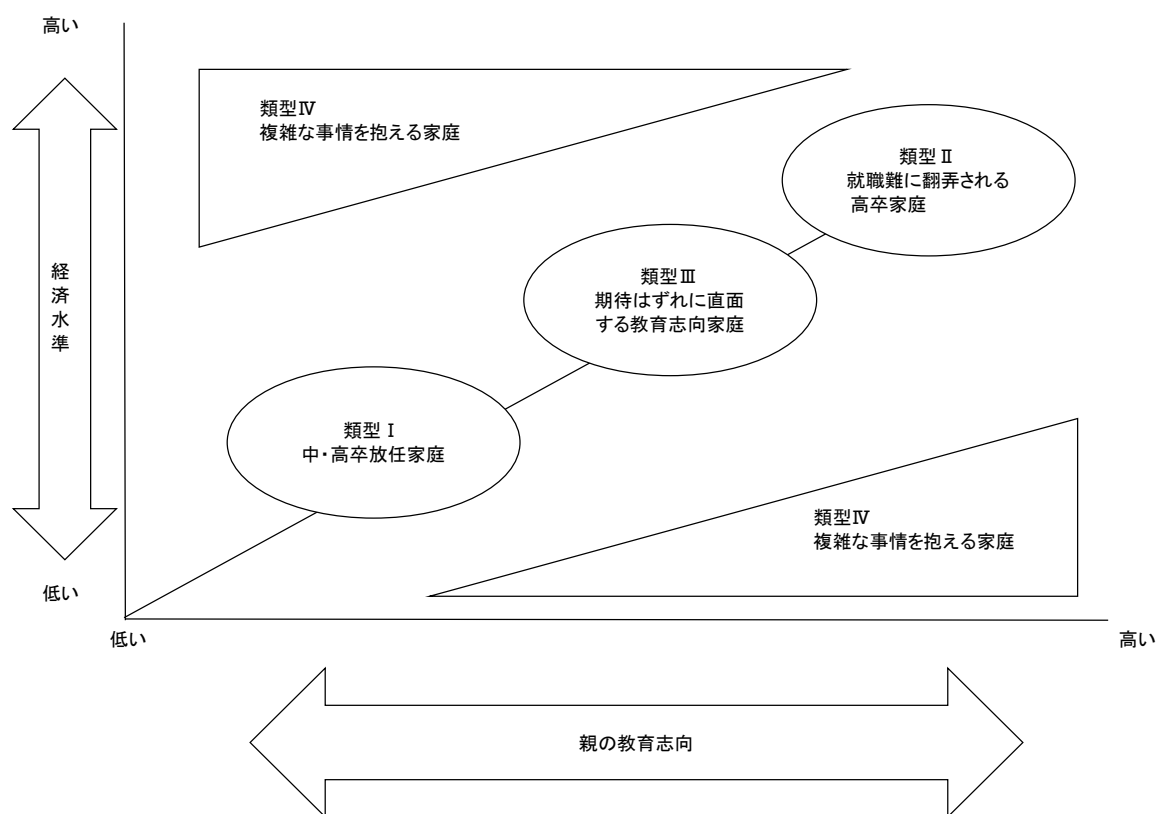


Figure1-4 非正規雇用の若者の家庭の類型（宮本，2005a）

また、離婚や再婚、病気、死別や経済的困難など複雑な家庭環境における高校生は、高校在学時からアルバイトをし、親から小遣いをもらうことがなくなり、経済的自立の第一歩が早期に始まるが、それは「経済的に自立できること(=親に頼らなくてよくなること)は、自分の尊厳を守り、悪条件から身を守るための最有力条件」(宮本，2004)という意味を持ち、後戻りすることは無いが、不安定でその場しのぎの収入が得られる仕事を続け、結果として不安定就労や低い収入などにより親から完全な自立の達成を困難にさせているという状況を指摘している(宮本，2004)。また、本田(2005)も学校から職業への移行を困難にさせている要因の一つとして、進路に関する家族からのアドバイス機能不全を指摘し、放任的な親子関係の中でアドバイスがなされていない場合と、特定の進路に限定した硬直的、過度な期待や圧力を与えている場合という両極化した家族の機能不全を指摘している。

さらに、親と青年の進路選択との関連を検討した研究には、職業継承という視点から検討され

ており、小川・田中（1979）は親から子への職業継承について、Crites（1962）が指摘した、①親の職業を子どもが継承する程度に関する研究、②親への同一視に関する研究、③親の態度に関する研究の3つの大きな流れを受け、親から子への職業形成に関する一連の研究を行い、親の職業を子どもが継承する過程には親の期待という要因の重要性を指摘しており、特に専門職で親の職業を子どもが継承する程度が高いことを明らかにしている（小川・田中, 1979; 1980; 田中・小川, 1982; 1985）。小川・田中（1979; 1980）は、親の職業に対する子どもの継承希望は、親の継承期待が媒介しており、親が継承期待を抱く場合について継承性が高まるという知見が得られ、親の期待という役割の大きさを明らかにした。田中・小川（1985）では子どもが親と同様の職業を選択するのは教師や建築士といった専門的職業において多く、しかしそこには職業内容や子どもの性別により相違が見られ、例えば、専門職の中でも女性が就業しやすいとされる教師については女性の継承率は高いが、建築士といった伝統的な性役割との関連から男性が就業しやすい職業は継承率が高いわけではないことを明らかにし、職業により職業継承の高さが異なることを明らかにしているにしている。また、田中・小川（1981）では母娘間の看護職の継承について、娘が認識した母親の期待の高さ、母親の看護職経歴の長さが娘の看護師の職業希望との高さに関連しており、継承行為は母親を職業モデルとして母親を同一視する行為であると指摘している。また、高井（2001）は、大学生の親の職業を受け継ぎたいという思いを抱く要因として、親が自分の価値をはっきりと言葉にして明確に言うだけでなく、大学生自身が親の言動から感じていたことを明らかにした。

また、モデルという視点から検討した研究も存在する（松本, 2008; 鹿内, 2005; 2006）。松本（2008）は職業モデルについて、肯定的な存在モデルとして男子では「父」、「有名人」、女子では「有名人」、「母」の順に多かったことを報告している。鹿内（2006）は、子どもが同性の親を職業人の望ましいモデルとし、親子間にコミュニケーションがなされている場合、その職業意識に望ましい影響を及ぼすこと指摘した。また、副田・柏木（1980）は母親が娘の職業に及ぼす影響について検討したところ、幼少期、年少期において母親が何らかの職業を持っていた娘は、フルタイムで働いている、学齢期の子どもを育てながら職業に就いているなど職業志向性が高く、幼・少年期において母親が何らかの職業に従事していたことが娘の価値観、行動に与える影響が大きいことを指摘した。職業モデルの存在は自身のキャリアの見通しを促進させる（金井, 2003）。女性の

場合は出産や子育てなどの女性特有のライフイベントが職業生活に及ぼす影響が大きく、同性であり、そのような女性特有のライフイベントを経験してきた母親の存在は娘が自分の進路選択において重要な存在となるのではないかと。しかし、田中・小川(1982)は親への職業的同一視は同性の親子間が中心であるものの、異性の親子間にもそれが同程度見出されており、また、高橋(2009)は、女子青年にとっても父親の存在は、親、職業人として精神的な支えやモデルとしての意見が職業を選択に関して積極的に取り組むことにおいて重要であることを明らかにしている。また、新見・前田 (2008)は家族と多く話をする生徒は、あまり話をしない生徒よりも、コミュニケーション内容にかかわらず、キャリア教育において重視されている「人間関係形成」、「情報活用」、「将来設計」、「意思決定」(文部科学省, 2006)に基づいたキャリア意識が高かったが、父親、母親といった家族構成員別のコミュニケーションについてのキャリア意識の比較には有意差は見られなかったことを報告している。このように、コミュニケーションから親と青年の進路選択の関連を検討した研究もあり、安達・佐藤・赤木 (2014) は中学生を対象として進路の決定をめぐるコミュニケーションについてインタビュー調査を行った結果、親とは教師や友人と比較してより濃密なコミュニケーションが行われており、親から子どもに与えられるメッセージとして、学力や具体的なアドバイスなど「現実的なメッセージ」、「家庭の事情を言われる」、「子どもの将来への心配」、「がんばりを大事に」という努力を大切にするメッセージが伝えられており、また親自身の叶えられなかった進路、個人的な思いを子どもに重ねることもあるが、それは直接語られるというより、些細な言動の中で子どもに「進路に対する親の個人的思いが示される」。しかし、最終的には親は子どもの思いを尊重し、自立を適切に促進させるという「決めるのはあなた」という生徒自身の意思決定を促進するメッセージを送っており、中学生にとって進路選択時の親子間コミュニケーションは「依存から自立へ」、「自分に対する思いの深まり」という体験が含まれ、心理的に成長する機会であると指摘している。また、大学生においても、田澤 (2006) が進路に関して親との会話があるかどうか、自分の進路を支持してくれていると思うか思わないかという視点から検討し、親と会話があり、支持的だと思っている学生は就職を先延ばしにしようという傾向が低く、就職に必要な情報や自信もあるが、職業に関する不安は存在し、相談したいという思いも高かったことを報告している。また、会話はあっても支持されていないと思っている者は就職を先の先延ばしにしようとする傾向が見られ、必要な情報が少なく、自信も低い、会話がなく支持もされ

ていない学生は情報が少ない、自信が低い、職業決定を先延ばししたいと思っている傾向があることを指摘している。高橋（2008;2009）は、大学生を対象として進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連を検討し、進路について両親の意見と一致していなくてもその不一致を確認し、議論しようとする青年ほど、アイデンティティ感覚が高く、職業決定することに対して積極的に取り組んでいることを明らかにした。

以上、本節においては親のサポートだけでなく、養育行動や愛着、親子間コミュニケーションといった親と青年の進路選択に関して先行研究を概観してきた。進路選択をめぐる課題は、過去の自分をふりかえる、現在の自分について向き合う、未来の自分について見通しを持つなど自分と向かい合う課題である。自分自身に真剣に向かい合うだけに自分に対する悩みも生じやすい。しかし、自己理解をどれだけ深めることができたかということは進路選択において重要な点である。小竹（1988）は、自己と職業の関係について自ら真剣に検討することが、その後の適応を含めて進路選択のプロセスにおける重要な点であると指摘している。自分は何がしたいのか、自分はどのような職業に向いているのか、といったことに自分自身が真剣に向き合い、悩むことは、回避すべきものではなく、むしろこの時期に取り組まなければならない課題である。また、自分の反応に対する他者の反応や自他の比較を通じて自己理解は促進されるという面もあり（溝上、2000）、杉村（2001）は、アイデンティティ形成は、自己の欲求や関心だけでなく、他者の意見や期待といったことを考慮し、相談や討論などで他者を利用し、自己と他者との視点の食い違いを相互調整により解決する過程であると指摘している。アイデンティティの形成において、職業の選択は重要な位置を占める（下山、1986）。助言や励ましなどサポートを受けるという一連の他者とのやりとりを通じて、これまでは気がつかなかった自分の一面を知ることができる、あるいは自分の性格や能力、適性に対する自分からの評価と他者からの評価との矛盾に気がつくことができ、新たな自分に関する情報や他者からの視点を含め、自己や職業、両者の関連性についての理解をより深めて行くことが可能となると思われる。

第3節 本研究の目的と構成

本研究では親のサポートが青年の進路選択に及ぼす影響について検討していく。

青年期において進路選択をめぐる課題は、後の人生を方向づけるものだけでなく、過去の自分や今の自分を見つめ、将来の自分を構築していくという自己に直面することが求められる。進路選択に関する課題は重要なものだけに、一人で抱え込むのではなく、周囲の他者に相談、助言、支えを得ながら悩み、取り組んでいくことが重要ではないかと思われる。進路選択に取り組む青年にとって、親は重要なサポート源であり、先行研究から親のサポートと青年の進路選択との間に肯定的な関連が明らかにされている (Constantine, Wallace & Kindaichi, 2005; Guay, Senécal, Gauthier & Fernet, 2003; Lent, Brown, Nota & Soresi, 2003; Restubog, Florentino & Garcia, 2010)。進路選択については、学年が上がるにつれて学校から職業へ移行していく時間が迫り、子ども親双方に関心が高まり、親からのサポートについて検討することが必要である。

中学生、高校生、大学生は進路選択をめぐりさまざまな課題に取り組み、大きく成長する重要な時期である。そのような時期において主要なサポート源であり、また幼少期から目にしてきた最も身近な「働くモデル」である親のサポートが青年の進路選択と関連を示すのか検討することを本研究の目的とする。

そのような目的の下、第1章においては親のサポートと青年期の進路選択に関する先行研究について概観した。そして、第2章ではそもそも青年期の生徒・学生は親から進路に関するサポートをどの程度得られているのかという基礎的知見を得るという視点から親の進路選択に関するサポートを検討し、第3章においては高校生を対象として親のサポートが進路選択に関する課題を行っていくことに対する自信や行動との関連を検討することを通じて進路選択を促進する親のサポートを検討し、第4章においては進路に対する姿勢や精神的健康という青年の状態から親だけでなく、友人、学校スタッフを含めてどのようなサポートを求めているのか検討し、第5章では限定した質問からは汲み取れない日常生活における親のサポートが子どもの進路選択に及ぼす影響についてインタビュー調査から検討を行い、第6章において第1~5章を総括し、本研究で得られた知見を総括し、青年のよりよい進路選択を促進するための親のサポートの重要性や援助的介入の可能性について検討する。

第2章 親からの進路選択に関するサポートの横断的研究

—中学生，高校生，大学生の各学校段階における比較検討—

2.1 問題と目的

家族からのサポートが進路選択に関する自己効力を媒介とし、職業選択に対する関与（松田・前田, 2007），進路不決断（Nota et al., 2007），進路決定（Restubog et al., 2010）に好ましい影響を与えることが示唆されてきた。親からのサポートは子どもの進路選択において重要な位置を担っている。

ところで、そもそも進路選択に関するサポートを親というサポート源から中学生、高校生、大学生はどの程度受けているのだろうか。一般的に進路領域に限らず、親からのサポートは学年が上がるにつれて減少する（尾見, 1999；谷口, 2007）。しかし、このような知見は、サポートの領域によっても差異はないのだろうか。進路選択における親のサポートについて各学校段階で横断的な比較検討を行った研究はみられない。しかし、進路選択におけるサポートは学年が上がるにつれて減少すると考えにくい。というのも、進路について、職業人として社会へ出る時間が近づくにつれて、子どもだけでなく親にとっても関心が高まる。また、進学する場合には親の承認や理解、支援を得なければ実現が難しい場合がある。今日では中学卒業後ほとんどの生徒が、定時制や通信制を含めて高校に進学する（文部科学省, 2012）。しかし、高校生では、卒業後に就職か進学か、進学するにしてもどこに進学するかという卒業後の進路について、本人の希望や能力だけでなく、親の教育観や養育態度、経済状況なども影響する（小杉, 2004a；耳塚, 2002）。宮本（2005）は親の経済水準の低さ、子どもの職業に対する無関心や不適切な態度が学校から仕事への移行を困難にすると指摘している。特に高校卒業後の進路選択については、親からの影響の大きいと考えられる。また、進学の場合、中学生、高校生共に、受験というストレスフルなイベントにおいて、励ましや理解といった親からのサポートの重要性が示されている（久田ら, 1990；石毛・無藤, 2005）。このように親からのサポートは重要な役割を担っていると考えられる。

一方、大学生では、進路に関する課題として大きく就業先の選択があり、それには以前の学校段階に比べて親の承認や物理的な支援は必須というわけではない。また、下村・木村（1997）や水野・佐藤・濱口（2013）において、大学生は就職活動をめぐり、就職活動や企業関連情報、心理的

な支えなどのサポート源として友人の存在が大きいことが示されている。しかし、学生の保護者向けに就職説明会を行う大学も多く、就職活動を親子で乗り切るための書籍なども出版されている（小島・東海, 2004; リクナビ HP, 2012）。また、平尾（2004）の調査から親は大学生の子どもが就職について、親に相談して決めてほしいという思いを持っていることを指摘している。大学生の進路選択をめぐっても親のサポートについて以前の学校段階と比較検討し、大学生についても親のサポートについて検討する必要がある。

以上の点をふまえ、進路に関する親からのサポートについて中学生、高校生については学校段階が上がるごとに多くなり、大学生についてはそれ以前の学校段階よりもサポート量が減少することが考えられる。よって、本調査では中学生、高校生、大学生における進路に関する親の実行されたサポートの比較検討を行う。

2.2 方法

2.2.1 調査時期と調査協力者

2012 年 9～11 月上旬にかけて質問紙調査を実施した。大学生は、地方の中都市に位置する私立 A 大学文系学部生に協力を依頼し、協力者 144 名のうち、無記入など不適切な票を除く 129 名（2 年生 64 名、3 年生 65 名；男性 49 名、女性 80 名）を分析対象とした。高校生は、地方の中都市に位置する県立 B 高校に協力を依頼し、協力者 158 名のうち、不適切な票を除く 135 名（1 年生 98 名、2 年生 37 名；男性 71 名、女性 64 名）を分析対象とした。中学生は、地方の中都市に位置する市立 C 中学に協力を依頼し、協力者 408 名のうち、不適切な票を除く 382 名（1 年生 202 名、2 年生 180 名；男性 192 名、女性 190 名）を分析対象とした。

2.2.2 調査手続き

調査の実施について、大学生は依頼した講義時間の一部を用いて著者が調査の内容を説明し、質問紙の配布、実施、回収した。中学生と高校生は、各クラス担任に調査の説明や同意、実施の注意点などを記載した手引きを事前に渡し、担任が HR などの時間に手引きに基づき調査を実施

した。なお、各協力校は東海地方の学校で、中学校と高校は大多数の生徒が高校また大学や専門学校などに進学し、大学は多数の学生が民間企業等に就職する学校である。なお、本調査は著者の所属機関の倫理委員会の承認を受け、調査に用いた尺度は全て開発者に使用の許可を得て行った。調査の実施に際しては、特に調査への参加や不参加、途中辞退に関して協力者に何ら不利益が生じないこと、個人情報の保護には最大限の配慮をする旨などを口頭および書面で説明するなど必要な配慮を行った。

2.2.3 調査内容

(1) 基本的属性

学校（大学生は学部も質問した） 学年、性別の記入を求めた。

(2) 進路に関する親のサポート

Turner, Alliman-Brissett, Lapan, Udipi & Ergun (2003) が、進路に関する親のサポートを測定することを目的に作成した「Career-Related Parent Support Scale」を邦訳して用いた。この尺度は、「私の将来の進路について、どんな授業や勉強が役に立つのか教えてくれる」といった助言や学びの機会の提供等の「Instrumental Assistance」（7項目）、「保護者の業務内容を話してくれる」など親の職業を話すといった「Career-Related Modeling」（7項目）、「卒業後、私が就職、または進学などすることを励ましてくれる（がんばれと言うなど、応援しているんだというような言葉を言ってくれる）」等の励ましの言葉といった「Verbal Encouragement」（6項目）、「私が将来の進路について不安だなあと思うことを理解してくれる」など情緒的な面の理解等の「Emotional Support」（7項目）の4つの下位尺度から構成されている。Turner et al., (2003) は middle school の生徒を対象として、各項目にあるようなことを親が実際にどの程度行っていると思うか質問し、進路に関する自己効力との間に正の関連を明らかにしている。

邦訳に際して、まず著者が日本語訳を行い、その後英語の専門家が back translation を行った。そして、それを著者と臨床心理学の教員がオリジナルと日本語訳した各項目を見比べ、オリジナルの各項目の意図から外れず、協力者の回答のしやすさを考慮して日本語訳した項目を完成させた。実施に際しては、「あなたの保護者（父親、母親、またはそれにあたる大人の男性、女性）は、

以下のことについて、どの程度当てはまりますか？」と教示をし、各質問項目についてどの程度あてはまるか（どの程度してくれていると思うか）を「全く当てはまらない（1点）」から「とても当てはまる（5点）」の5件法で回答を求めた。

倫理的配慮という点から、教示において保護者とし、括弧書きで父親、母親と表記し、保護者以外の「それに当たる大人の男性、女性」を想定した場合に誰を想定して回答したのか質問する項目を設けなかったが、依頼した中学、高校の先生とこの教示文で生徒が父親、母親という保護者を想定するかどうか検討した際、今回の協力者の多くが主に父親と母親（ないしどちらか一方）の保護者を想定したと考えられる。また、半年などある一定期間において行われたサポートといった期間を設けなかった理由としては、設けた期間のうちに進路に関する親との懇談や希望校の説明会や模試など協力者が進路の意識が高まるようなイベントを体験したかどうかにより、親から受けるかかわりの量が異なる可能性があると考えられたために期間を設けず、全体として項目にあるようなことを親がしてくれているかどうか質問した。

(3) ソーシャル・サポート

Turner et al., (2003) とは異なる社会文化、年齢集団に対し、邦訳した「進路に関する親のサポート」尺度を用いたため、その尺度の基準関連妥当性の検討のために嶋田（1996）の「知覚されたソーシャルサポート」尺度を用いた。各学校段階において信頼性、妥当性が確認されている実行されたサポート尺度は少なく、嶋田（1996）の知覚されたソーシャル・サポートを測定する1因子構造（5項目）の尺度であるが、各学校段階の生徒・学生において信頼性、妥当性が確認されている尺度であったため、この尺度を用いた。各項目について、自分の親はどの程度当てはまるか「絶対にちがう（1点）」から「きっとそうだ（4点）」の4件法で回答を求めた。中学校は時間等の関係上この尺度について調査を実施することができなかった。

2.3 結果

2.3.1 進路に関する親のサポートに関する尺度の検討

邦訳した「進路に関する親のサポート尺度」について、Turner et al., (2003) と異なる教育、社会文化、年齢の協力者に用いたため、各学校集団別に因子分析を行った。なお、高校生と大学生は、嶋田 (1996) の「知覚されたソーシャルサポート」との相関係数を算出し、基準関連妥当性を確認した。「知覚されたソーシャルサポート」については、回答を合計して項目数で割った平均を分析に用いた。高校生は $M=2.90$ ($SD=.58$) , 大学生は $M=2.62$ ($SD=.81$) であった。また、 α 係数は、高校生が.86, 大学生が.92 であった。

進路に関する親のサポートの中学生のデータについて、主因子法による因子分析を行ったところ、固有値の推移は 8.75, 2.73, 1.61, 1.28, 1.21...であり、因子の解釈可能性からも検討した結果、2 因子構造が妥当であると判断し、再度 2 因子を想定して主因子法 (Promax 回転) により分析を行った。その際、どの因子にも.30 以上の負荷量を示さない 1 項目を除外した。因子パターンおよび因子間相関を Table2-1 に示す。2 因子で 26 項目の全分散を説明する割合は 43.93%だった。第 I 因子は「22, 将来、私が仕事をする時に役に立つようなことを学んでいる時、うれしくなるような言葉をかけてくれる (ES) 」といったポジティブな感情の喚起するようなかかわりに関する項目が高い負荷量を示しており、また負荷量は低い「3, 私の将来の進路について、どんな授業や勉強が役に立つのか教えてくれる (IA) 」など助言に関する項目もあり、第 I 因子は「励ましと助言」と命名した。第 II 因子は親自身の職業経験を話すなどに関する項目が高い負荷量を示しており、「親の職業経験に関する情報提供」と命名した。下位尺度平均 (M) と標準偏差 (SD) を算出したところ、「励ましと助言」は $M=3.33$, $SD=.64$, 「親の職業経験に関する情報提供」は $M=3.72$, $SD=.89$ であった。内的整合性の確認のために信頼性係数を算出したところ、「励ましと助言」は $\alpha=.91$, 「親の職業経験に関する情報提供」は $\alpha=.84$ であった。

Table2-1 中学生の因子分析結果（主因子法・Promax回転）

		パターン行列		M	SD	I-T相関	項目を削除した場合の α 係数
		I	II				
22,	将来、私が仕事をする時に役に立つようなことを学んでいる時、うれしくなるような言葉をかけてくれる(ES)。	.82	-.18	3.02	.93	.69	.906
23,	私が将来どんなに素晴らしい仕事につけるかということについて、保護者と私は楽しく一緒に話す(ES)。	.73	-.02	3.08	1.08	.68	.906
16,	よい成績を取るように励ましてくれる(がんばれと言うなど、応援しているんだというような言葉を言ってくれる)(VE)。	.72	.04	3.65	1.06	.70	.905
21,	私の将来の職業が楽しみだ、と話してくれる(ES)。	.71	-.09	3.06	1.09	.63	.907
17,	卒業後、私が就職、または進学などすることを励ましてくれる(VE)。	.69	.03	3.62	1.04	.67	.906
25,	私が将来の進路について不安だなと思うことを、理解してくれる(ES)。	.69	-.04	3.24	1.02	.64	.907
20,	私が勉強をよくやっているととめてくれる(VE)。	.68	-.03	3.24	1.05	.62	.907
27,	私が仕事することに関連のある技術や知識を勉強しているとほめてくれる(ES)。	.65	-.07	3.00	1.00	.59	.908
18,	私が学校でよくやっていると言葉で私に言ってくれる(VE)。	.64	.02	3.29	.98	.61	.908
15,	私が学校で出来るかぎり多くのことを学べるよう励ましてくれる(VE)。	.61	.06	3.50	.88	.61	.908
24,	私が将来の進路について心配していることを私と話す(ES)。	.61	-.04	3.11	1.10	.57	.909
19,	私が学校をちゃんと卒業することを期待していると言う(VE)。	.57	.05	3.48	1.00	.57	.909
7,	私の(今やれる)仕事にほこり、自信をもてるようにしてくれる(IA)。	.54	.05	3.34	.91	.54	.910
4,	将来、私が仕事をする時に役に立つことを教えてくれる(IA)。	.46	.18	3.57	.94	.53	.910
3,	私の将来の進路について、どんな授業や勉強が役に立つのか教えてくれる(IA)。	.45	.09	3.49	.97	.50	.910
5,	将来、私が仕事をする時に役に立つ技術や知識を学べるようなことをさせてくれる(IA)。	.44	.04	3.32	.94	.45	.912
26,	将来、私にどんな仕事についてほしいか話す(ES)。	.43	.04	3.24	1.19	.43	.913
1,	私が学んでいることが、将来、私が仕事をする時にどのように役に立つのか話してくれる(IA)。	.39	.17	3.59	.88	.46	.911
2,	私が宿題（または課題）をするのを手伝ってくれる(IA)。	.37	.09	3.37	1.19	.39	.914
10,	職場に連れていってくれた(CM)。	-.12	.73	3.47	1.50	.62	.816
12,	職場で何をしているのか見せてくれる(CM)。	-.04	.72	3.28	1.39	.65	.810
11,	同僚に会わせてくれた(CM)。	-.11	.70	3.59	1.43	.60	.819
13,	仕事のことを話してくれる(CM)。	.11	.70	3.45	1.31	.68	.805
14,	どこで働いているか教えてくれる(CM)。	.06	.58	4.41	.82	.55	.830
9,	職場で起こったことを話してくれる(CM)。	.09	.57	3.89	1.13	.55	.825
8,	保護者の業務内容を話してくれる(CM)。	.18	.57	3.97	1.00	.57	.824
		II					
		因子間相関	I	.45			

注1) IA=Instrumental Assistance, CM=Career-Related Modeling, VE=Verbal Encouragement, ES=Emotional Support

注) 除外項目：「6, 将来の私の職業に関連するような技術や知識が学べる課外活動をさせてくれる (IA)」

高校生についても、同様に因子分析を行った結果、固有値の推移は 7.96, 3.03, 1.79, 1.64, 1.33 ……であり、因子の解釈可能性を検討した結果、2 因子構造が妥当であると判断した。2 因子を指定し、再度因子分析（主因子法・Promax 回転）を行った。その際、負荷量が.30 以下の 2 項目、他方の因子にも高い負荷量を示す 7 項目を除外した。因子パターンおよび因子間相関を Table2-2 に示す。

Table2-2 高校生の因子分析結果（主因子法・Promax回転）

		パターン行列		<i>M</i>	<i>SD</i>	I-T相関	項目を削除した場合の α 係
		I	II				
16,	よい成績を取れるように励ましてくれる(がんばれと言うなど、応援しているんだというような言葉を言ってくれる)(VE)。	.80	.00	3.64	.87	.76	.878
22,	将来、私が仕事をする時に役に立つようなことを学んでいる時、うれしくなるような言葉をかけてくれる(ES)。	.78	.05	3.10	1.01	.75	.877
23,	私が将来どんなにすばらしい仕事につけるかということについて、保護者と私は楽しく一緒に話す(ES)。	.76	.08	3.09	1.03	.74	.878
21,	私の将来の職業が楽しみだ、と話してくれる(ES)。	.75	-.24	3.08	1.02	.62	.886
27,	私が仕事することに関連のある技術や知識を勉強しているとほめてくれる(ES)。	.68	-.11	2.90	.96	.60	.887
15,	私が学校で出来るかぎり多くのことを学べるよう励ましてくれる(VE)。	.67	.13	3.80	.90	.66	.883
20,	私が勉強をよくやっているとみとめてくれる(VE)。	.66	-.08	3.41	.99	.59	.887
25,	私が将来の進路について不安だなと思うことを、理解してくれる(ES)。	.65	.14	3.31	.95	.68	.882
17,	卒業後、私が就職、または進学などすることを励ましてくれる(VE)。	.53	.07	4.04	.82	.53	.891
24,	私が将来の進路について心配していることを私と話す(ES)。	.51	.08	3.35	1.02	.51	.892
19,	私が学校をちゃんと卒業することを期待していると言う(VE)。	.48	-.05	3.65	.96	.44	.896
13,	仕事のことを話してくれる(CM)。	.01	.75	3.53	1.20	.66	.804
12,	職場で何をしているのか見せてくれる(CM)。	-.02	.75	3.06	1.41	.71	.795
8,	保護者の業務内容を話してくれる(CM)。	.01	.69	3.93	.94	.61	.816
9,	職場で起こったことを話してくれる(CM)。	-.03	.67	3.88	1.02	.55	.822
11,	同僚に会わせてくれた(CM)。	-.08	.66	3.07	1.53	.64	.811
10,	職場に連れていってくれた(CM)。	.00	.59	3.15	1.44	.58	.820
14,	どこで働いているか教えてくれる(CM)。	.06	.54	4.38	.76	.46	.835
		II					
因子間相関		I	.36				

注1) IA=Instrumental Assistance, CM=Career-Related Modeling, VE=Verbal Encouragement, ES=Emotional Support

注) 削除項目：「1, 私が学んでいることが、将来、私が仕事をする時にどのように役に立つのか話してくれる(IA)」、「2, 私が宿題(または課題)をするを手伝ってくれる(IA)」、「3, 私の将来の進路について、どんな授業や勉強が役立つのか教えてくれる(IA)」、「4, 将来、私が仕事をする時に役に立つことを教えてくれる(IA)」、「5, 将来、私が仕事をする時に役に立つ技術や知識を学べるようなことをさせてくれる(IA)」、「6, 将来の私の職業に関連するような技術や知識が学べる課外活動をさせてくれる(IA)」、「7, 私の(今やれる)仕事にほこり、自信をもてるようにしてくれる(IA)」、「18, 私が学校でよくやっていると言葉で私に言ってくれる(VE)」、「26, 将来、私にどんな仕事についてほしいか話す(ES)」

2 因子で 18 項の全分散を説明する割合は 51.35%であった。第 I 因子は「16, よい成績を取れるように励ましてくれる (がんばれと言うなど, 応援しているんだというような言葉を言ってくれる) (VE) 」, 「22, 将来, 私が仕事をする時に役に立つようなことを学んでいる時, うれしくなるような言葉をかけてくれる (ES) 」などポジティブな感情の喚起するようなかかわりに関する項目で構成されており, 第 I 因子は「励まし」と命名した。第 II 因子については親自身の職業経験に関する項目が高い負荷量を示しており, 項目内容と項目数が中学生と同じであったので中学生と同様に「親の職業経験に関する情報提供」と命名した。下位尺度平均と標準偏差は, 「励まし」は $M=3.40$, $SD=.67$, 「親の職業経験に関する情報提供」は $M=3.57$, $SD=.87$ であった。信頼性係数を算出したところ, 「励まし」は $\alpha=.90$, 「親の職業経験に関する情報提供」は $\alpha=.84$ であった。基準妥当性の検討のためにソーシャルサポートとの相関係数を算出した結果, 「励まし」 ($r=.66, p<.001$), 「親の職業経験に関する情報提供」 ($r=.34, p<.001$) とは共に正の有意な相関を示した。

大学生についても同様に因子分析を行った結果, 固有値の推移は 10.07, 2.60, 1.73, 1.42, 1.27……であり, 因子の解釈可能性を検討した結果, 2 因子構造が妥当であると判断, 2 因子を指定して再度因子分析 (主因子法・Promax 回転) を行った。その際, 他方の因子にも高い負荷量を示す 4 項目を除外した。因子パターンおよび因子間相関を Table 2-3 に示す。2 因子で 23 項の全分散を説明する割合は 47.02%であった。第 I 因子は「21, 私の将来の職業が楽しみだ, と話してくれる (ES) 」, 「3, 私の将来の進路について, どんな授業や勉強が役に立つのか教えてくれる (IA) 」などポジティブな感情の喚起するようなかかわりや情報提供に関する項目が高い負荷量を示しており, 第 I 因子は「情報提供と励まし」と命名した。第 II 因子は, 親の職業経験に関する内容の項目であり, また中学生, 高校生と同様の項目内容, 項目数から構成されていたので同様に「親の職業経験に関する情報提供」と命名した。下位尺度平均と標準偏差は, 「情報提供と励まし」は $M=2.28$, $SD=.62$, 「親の職業経験に関する情報提供」は $M=3.28$, $SD=1.04$ であった。信頼性係数については, 「情報提供と励まし」は $\alpha=.89$, 「親の職業経験に関する情報提供」は $\alpha=.88$ であった。ソーシャルサポートとの相関係数については「情報提供と励まし」 ($r=.69, p<.001$), 「親の職業経験に関する情報提供」 ($r=.60, p<.001$) との間に正の有意な相関を示した。

Table2-3 大学生の因子分析結果（主因子法・Promax回転）

		パターン行列		<i>M</i>	<i>SD</i>	I-T相関	項目を削除した場合の α 係
		I	II				
21	私の将来の職業が楽しみだ、と話してくれる(ES)。	.76	-.11	2.29	1.15	.65	.883
3	私の将来の進路について、どんな授業や勉強が役に立つのか教えてくれる(IA)。	.76	-.22	2.51	1.09	.62	.885
23	私が将来どんなにすばらしい仕事につけるかということについて、保護者と私は楽しく一緒に話す(ES)。	.72	.02	2.17	1.09	.68	.883
22	将来、私が仕事をする時に役に立つようなことを学んでいる時、うれしくなるような言葉をかけてくれる(ES)。	.69	.19	2.63	1.16	.74	.880
18	私が学校でよくやっていると言葉で私に言ってくれる(VE)。	.67	.05	2.77	1.36	.67	.882
16	よい成績を取るように励ましてくれる(がんばれと言うなど、応援しているんだというような言葉を言ってくれる)(VE)。	.66	.02	2.91	1.26	.64	.884
5	将来、私が仕事をする時に役に立つ技術や知識を学べるようなことをさせてくれる(IA)。	.64	-.06	3.09	1.15	.58	.886
4	将来、私が仕事をする時に役に立つことを教えてくれる(IA)。	.64	.00	3.15	1.11	.60	.885
7	私の(今やれる)仕事にほこり、自信をもてるようにしてくれる(IA)。	.63	.17	3.08	1.18	.69	.882
27	私が仕事することに関連のある技術や知識を勉強しているとほめてくれる(ES)。	.61	.14	2.76	1.20	.64	.884
1	私が学んでいることが、将来、私が仕事をする時にどのように役に立つのか話してくれる(IA)。	.54	.09	2.49	1.13	.56	.887
2	私が宿題（または課題）をするのを手伝ってくれる(IA)。	.42	-.03	1.98	1.09	.37	.893
6	将来の私の職業に関連するような技術や知識が学べる課外活動（塾や英会話などの習い事、体験、活動など）をさせてくれる(IA)。	.41	-.05	2.91	1.23	.37	.894
24	私が将来の進路について心配していることを私と話す(ES)。	.39	.13	3.07	1.28	.44	.892
26	将来、私にどんな仕事についてほしいか話す(ES)。	.38	-.08	2.53	1.17	.30	.896
20	私が勉強をよくやっているととめてくれる(VE)。	.38	.00	3.05	1.24	.35	.895
9	職場で起こったことを話してくれる(CM)。	-.22	.95	3.57	1.37	.74	.848
8	保護者の業務内容を話してくれる(CM)。	-.14	.91	3.74	1.28	.74	.849
13	仕事のことを話してくれる(CM)。	-.07	.80	3.23	1.42	.67	.858
14	どこで働いているか教えてくれる(CM)。	-.02	.68	4.09	1.10	.61	.866
12	職場で何をしているのか見せてくれる(CM)。	.27	.61	2.77	1.34	.72	.851
10	職場に連れて行ってくれた(CM)。	.21	.50	2.86	1.54	.61	.867
11	同僚に会わせてくれた(CM)。	.19	.46	2.67	1.54	.57	.873
		II					
因子間相関		I	.53				

注1) IA=Instrumental Assistance, CM=Career-Related Modeling, VE=Verbal Encouragement, ES=Emotional Support

注) 削除項目：「15, 私が学校でできる限り多くのことを学べるように励ましてくれる(VE)」, 「17, 卒業後、私が就職、または進学などすることを励ましてくれる(VE)」, 「19, 私が学校をちゃんと卒業することを期待しているという(VE)」, 「25, 私が将来の進路について不安だなと思うことを理解してくれる(ES)」

2.3.2 サポート量の比較のための下位尺度平均の算出および各学校段階の比較

下位尺度平均の算出について、第Ⅱ因子の「親の職業経験に関する情報提供」については、各学校段階においてこの因子を構成する項目数、項目内容が一致しており、各学校段階で比較検討が可能である。しかし、第Ⅰ因子については、どの学校段階においても気持ちの理解やポジティブな感情を喚起するようなかかわりに関する内容の項目が比較的高い負荷量を示しているが、因子を構成する項目数および項目内が各学校段階で異なった。そこで、サポートの量について各学校段階による差異を検討するために、今回は第Ⅰ因子について各学校段階に共通する 7 項目（「16, よい成績を取れるように励ましてくれる(VE)」、「20, 私が勉強をよくやっているとほめてくれる (VE)」、「21, 私の将来の職業が楽しみだ、と話してくれる (ES)」、「22, 将来, 私が仕事をする時に役に立つようなことを学んでいる時, うれしくなるような言葉をかけてくれる (ES)」、「23, 私が将来どんなにすばらしい仕事につけるかということについて, 保護者と私は楽しく一緒に話す (ES)」、「24, 私が将来の進路について心配していることを私と話す (ES)」、「27, 私が仕事することに関連のある技術や知識を勉強しているとほめてくれる (ES)」)を用い、「気持ちの支え」として 7 項目の回答を合計して項目数で割った平均、標準偏差を以降の分析に用いた (Tal2-4)。

Table2-4 記述統計および相関係数					
	中学生 (N=382)	高校生 (N=135)	大学生 (N=129)	相関係数	
	平均	平均	平均	親の職業経験に関する情報提供	ソーシャルサポート
気持ちの支え	3.17	3.22	2.70	.35 ***	—
	.77	.73	.84	.26 ***	.65 ***
				.52 ***	.64 ***
親の職業経験に関する情報提供	3.72	3.57	3.28	—	—
	.89	.87	1.04	—	.34 ***
				—	.60 ***
ソーシャルサポート	—	2.90	2.62	—	—
	—	.58	.81	—	—

注1) 上段が平均, 下段が標準偏差

注3) 相関係数については上段が中学生, 中段が高校生, 下段が大学生

注3) *** $p < .001$

なお、信頼性係数は、中学生が $\alpha=.86$ 、高校生が $\alpha=.87$ 、大学生が $\alpha=.86$ であった。また、高校生、大学生のみであるがソーシャルサポートとの相関係数を算出した結果、高校生、大学生共に正の有意な相関が示された（高校生： $r=.65, p<.001$ 。大学生： $r=.64, p<.001$ ）、「気持ちの支え」について、学校（中学生・高校生・大学生）×性別（男性・女性）の二要因分散分析を行った（Table2-5）。

Table2-5 学校（中学生・高校生・大学生）×性別（男性・女性）の二要因分散分析結果

	中学生 (N=382)		高校生 (N=135)		大学生 (N=129)		主効果		交互作用
	男性 (N=192)	女性 (N=190)	男性 (N=71)	女性 (N=64)	男性 (N=49)	女性 (N=80)	学校	性別	
気持ちの支え	3.16	3.17	3.18	3.28	2.71	2.68	19.21 ***	.16	.25
	.74	.81	.53	.91	.81	.86			
親の職業経験に関する情報提供	3.64	3.81	3.38	3.78	2.98	3.46	14.30 ***	17.81 ***	1.74
	.84	.94	.77	.93	1.04	1.01			

注1) 上段が平均、下段が標準偏差

注2) *** $p<.001$

その結果、「気持ちの支え」において学校の主効果が有意であり（ $F(2,640)=19.21, p<.001$ ），多重比較の結果（Bonferroni 法），中学生と高校生が大学生よりも平均が高く，中学生と高校生では有意な差異は示されなかった。「親の職業経験に関する情報提供」についても同様に二要因分散分析を行った結果，学校と性別の主効果が有意であり（学校： $F(2,640)=14.30, p<.001$ ，性別： $F(1,640)=17.80, p<.001$ ），女性の方が男性より平均が高く，学校差は「気持ちの支え」同様に中学生と高校生の方が大学生よりも平均が高く，中学生と高校生では有意差は示されなかった。

2.4 考察

本調査では、中学生、高校生、大学生の各学校段階における進路に関する親のサポートの量的比較について検討を行った。

邦訳した「進路に関する親のサポート」尺度について、Turner et al., (2003) では 4 因子構造が確認されていたが、本調査ではどの学校段階においても 2 因子構造が妥当であると判断した。本調査における「親の職業経験に関する情報提供」因子は、Turner et al., (2003) で抽出された「Career-Related Modeling」因子に対応する因子である。しかし、Turner et al., (2003) で抽出されたその他の 3 因子は、本調査ではどの学校段階においても 1 つの因子にまとまった。Turner et al., (2003) で想定された 4 因子構造が確認できず、結果として道具的なサポートなどを含めた様々なサポート機能横断的比較ができなかった。ソーシャルサポートを測定する尺度については、複数のサポート機能を想定して尺度を開発しても、多くの尺度が一因子にまとまり、サポートの機能的側面の検討を困難にしている（嶋田, 2001）。Turner et al., (2003) も、「Career-Related Modeling (CM)」以外の 3 つの下位尺度の相関係数が .51~.65 と下位尺度間相関の高さを指摘している。また、Turner et al., (2003) は「Career-Related Parent Support Scale」をアメリカの middle school の 7-8grade に在籍する disadvantaged の生徒を対象として作成しており、本調査の協力者との社会的、文化的背景、教育制度の差異から邦訳した項目文が十分にその因子を反映したサポート内容を表現できていなかったことが考えられる。複数の都道府県の高中生と保護者千名以上を対象とした調査によれば、高校生は保護者に対して、本人の考えの尊重等の距離を取ったサポートと共に、具体的なアドバイスを求めている生徒は多いが、保護者は先の見えない社会や情報の乏しさから具体的なアドバイスは保護者にとって困難であることが指摘されている（(社)全国高等学校 PTA 連合会・(株)リクルート合同調査調べ, 2012）。このように、進路に関する助言や情報といった道具的サポートとして位置づけられることが多いサポート機能についても検討すべき重要なサポートの一つである。どのような親のサポート、かかわりが青年の進路選択に促進的な影響を与えるのかということを検討するためには、具体的なサポート機能を明確にする必要があるだろう。また、嶋田（1996）のソーシャルサポート尺度との関連から基準関連妥当性を検討したところ、正の相関が示され、邦訳した尺度が親のサポートを測定している尺度として

判断できる。しかし、個々の項目を見てみると、3の「どちらともいえない」の回答にやや偏っており、分散も少ない。上記したように本尺度はアメリカで作成されたものであり、コミュニケーション、文化差などから生徒、学生にとって答えにくい項目が多くなっているように思われる。今後は、単なる邦訳ではなく、日本の文化的背景、日本人が取りやすいサポート内容や表現などを十分に考慮し、オリジナルの意図から外れない程度で、項目を改善することが必要である。

また、本調査で各学校段階での比較に用いた「気持ちの支え」は、大きく道具的サポートと情緒的サポートという分類で考えれば、気持ちの理解や、ポジティブな感情の喚起といった情緒的なサポートを表す因子であると考えられる。気持ちの理解やポジティブな感情の喚起といった「気持ちの支え」というサポートの学校段階による差異を検討した結果、中学生と高校生の方が大学生よりも多くサポートを受けていた。進路に限定したサポートを検討した研究ではないが、嶋田(1996)の研究では、中学生、高校生では家族からのサポートの利用可能性の知覚が高い者、大学生では友だちからのサポート利用可能性の知覚が高い者は、ストレス反応の表出が少ないことが示されている。また、中学生、高校生共に、受験というストレスフルなイベントにおいて、親からのサポートの重要性が示されている(久田ら, 1990; 石毛・無藤, 2005)。このような先行研究をふまえても、進路に関して親からのポジティブな感情を喚起するようなかかわりや励まし、理解といった情緒的なサポートの役割の重要性が示唆される。

大学生でサポートの量が減少する点については問題と目的において記したように就業先の選択については親の承認や物質的な支援が必須ではないこと、就職活動中のサポート研究から示された友人というサポート源の大きさ(水野ら, 2013; 下村・木村, 1997)だけでなく、親子の関係性の変化という点からも考察することが出来る。落合・佐藤(1996)の中学生、高校生、大学生を対象とした心理的離乳の過程に関する研究によれば、大学生は、中学生や高校生で見られた「親が子を危険から守る親子関係」が少なく、「子が親から信頼・承認されている親子関係」が多いことが明らかにされた。大学生では以前の学校段階に比べ、一人の大人として“信頼して見守る”など距離を置いたかかわりがサポートとなるのかもしれない。各学校段階における進路に関する課題の差異によりサポート内容も異なることが考えられ、今後は各学校段階に特異なサポートやサポートの質の相違について検討することも必要である。

次に、親の職業を話すなど「親の職業経験に関する情報提供」という親のかかわりの各学校段

階での比較を行った結果、中学生と高校生の方が、大学生よりも多く得ていた。しかし、「親の職業経験に関する情報提供」は、情報的なサポートとして位置づけられるかどうかは留意が必要である。Shumaker & Brownell (1984) は、サポートの受け手と送り手のサポートの認識について、両者がサポートと認識しなくても、どちらか一方がサポートと認識していればソーシャルサポートであるとしている。親は子どもの職業意識を高めるために情報を与えるという意識はなく、日常会話の一部として行われている場合も多いと考えられる。また、子ども側も親の話が役立ったのかどうか、本調査では質問していない。しかしながら、話をした時点で親子双方にサポートという意識はなくても、親から聞いた職業に関する話の累積が子どもの進路に影響していることが考えられる。内田 (2007) の高校生を対象とした調査では、フリーターといった不安定就労を選択する若者の特徴として周囲に安定した就労に従事するモデルが乏しいことが指摘されており、身近な働く大人がおり、その姿を見聞きすることの影響の重要性がわかる。

また、本調査においては「気持ちの支え」については男性よりも女性の方が多くサポートを受けていた。これは先行研究 (尾見, 1999; 嶋田, 1996; 谷口, 2007) と同様の結果である。しかし、本調査では親を父親と母親と区別せずに質問した。鹿内 (2005) は、同性の親、異性の親を区別して子の職業意識との関連を検討しており、同性の親と異性の親で異なった結果を得ている。今後は、父親、母親を区別し、両親の就業形態なども含め、また多様な学校において、進路選択に関する親のサポートを検討していくことも重要である。

以上、本調査では、気持ちの理解やポジティブな感情の喚起といった情緒的なサポート、親の職業経験に関する情報の提供について、大学生よりも中学生と高校生において多いという結果が得られた。

第3章 高校生の進路選択と親からのサポートの研究

—進路選択に関する自己効力、進路選択行動との関連の検討—

第2章では進路選択に関する親からのサポート量について横断的比較検討を行い、中学生と高校生の方が大学生よりも親からの言葉の励まし、ポジティブな感情を喚起するようなサポートおよび親からの職業経験に関する話を聞くといったかかわりを多く受けていたことが明らかになった。高校生から大学生にかけて親からのサポートについて差異が見られたことから、高校生と大学生それぞれについてより詳細な調査研究を行うこととする。

また、第2章ではサポート量の比較検討を目的としていたため、親のサポート進路関連変数との関連は検討しなかった。進路選択をめぐり親からどの程度サポートを受けているかという量的側面と共に、親からのサポートが生徒の進路選択にどのように関連を示しているかというサポートと進路選択との関連について検討していくことが必要であり、第3章では親からのサポートと高校生の進路選択との関連を検討する。

3.1 問題と目的

現代の日本において中学卒業者のほとんどが高等学校へ進学するが、高等学校卒業者の進路は大きく進学と就職に分かれる。さらに進学といっても、4年制大学から専門学校まで、教養学部から特定の職業人養成学部まで多様な進学先がある。また就職といっても、業種、職種は数えきれないほど存在する。そのような多様な進路選択をめぐり本人の興味関心、能力、希望といったことだけではなく、親の養育や職業に対する意識やサポートが本人の進路選択に及ぼす影響が存在すると考えられる。進路選択に限らず高校生にとって親からのサポートは重要な位置を占める(嶋田, 1996)。経済協力開発機構(2012)によれば、日本は他の加盟国に較べて家庭における子どもの教育支出が高いが、公的な支援が低く、高校卒業後の進学における家庭の経済的負担は大

きい。文部科学省の平成 24 年度学校基本調査によれば、高等学校卒業後、約 7 割の生徒が大学や専修学校などへ進学をしていた。高校生の進路選択を考えてみると、そこには本人の希望や能力だけでなく、親の教育観や養育態度、経済状況などの影響が少なくない（宮本, 2005）。

高校卒業後の進路選択において、心理的な面でも重要なサポート源である。坂・真中（2002）は心理的なサポートを受けている高校生ほど適切なストレスコーピングを行っていたことを示した。久田ら（1990）は、受験を控えた高校生について、周囲から自分がサポートを受けられるという期待が高い生徒ほど積極的に勉強に取り組んでいたということを明らかにしている。また、Nota et al., (2007) の高校生を対象とした研究では、進路に関する知覚されたサポートが進路選択に関する自己効力との間に正の影響を与え、間接的に職業未決定に影響を与えることを示唆した。宮本（2005）は、学校から職業への移行を困難にする要因として、親の経済水準の低さだけでなく、子どもの教育や職業に対する無関心や不適切な態度を指摘している。親は青年の進路選択を支える様々な援助資源を有する重要なサポート源としてだけではなく、子どもにとって最も身近な働く大人のモデルとして青年に影響を与える側面もあると考えられ、進路選択に関する自己効力だけでなく、進路選択に関する行動に直接関連を示すことが考えられる。

これらのことより、本調査では、高校生を対象として、親から受けたサポートと進路選択に関する自己効力、進路選択に関する行動との関連を検討する。

3.2 方法

3.2.1 調査時期と調査協力者および実施方法

2012 年 9～11 月上旬、地方の中都市の県立 A 高校に協力を依頼し、質問紙調査を実施した。同意して調査に参加した生徒 158 名のうち、無記入など分析に用いることができない票を除く 135 名分（1 年生 98 名、2 年生 37 名；男性 71 名、女性 64 名）のデータを分析対象とした。調査の実施は、協力校の各クラス担任が事前に受け取った調査の説明や同意、注意点などを記載した手引きに従い、HR などの時間に調査の説明をした後（調査の参加は任意であり、回答を始めて途中で辞退することも可能である、成績などとは一切関係ないことなど）、質問紙を配布、調査協力に同

意を得た生徒が質問紙に回答をし、その場で回収した。なお、A 高校は所謂進学校である。また、本調査は著者の所属機関の倫理委員会の承認を受け、調査に用いた尺度は全て開発者に使用の許可を得て行った。調査の実施に際しては、特に調査への参加や不参加、途中辞退に関して協力者に何ら不利益が生じないこと、個人情報の保護には最大限の配慮をする旨などを口頭および書面で説明するなど必要な配慮を行った。

3.2.2 調査内容

(1) 基本的属性：学年，性別。

(2)進路に関する親のサポート：Turner et al., (2003)の「Career-Related Parent Support Scale」を邦訳して用いた。この尺度は、「Instrumental Assistance」(7 項目)，「Career-Related Modeling」(7 項目)，「Verbal Encouragement」(6 項目)，「Emotional Support」(7 項目)の4下位尺度から構成されている。邦訳には、まず著者が日本語訳を行い、その後英語の専門家が back translation を行った。そして、著者と臨床心理学の教員がオリジナルと日本語訳した項目を比較検討し、オリジナルの各項目の意図から外れず、協力者の回答のしやすさを考慮して日本語訳した項目を完成させた。実施に際しては、“あなたの保護者（父親，母親，またはそれにあたる大人の男性，女性）は、以下のことについて、どの程度当てはまりますか？”と教示し、各質問項目についてどの程度当てはまるか（どの程度してくれていると思うか）を“全く当てはまらない（1 点）”から“とても当てはまる（5 点）”の5件法で回答を求めた。倫理的配慮という点から、教示文で親とせず保護者とし、()に父親，母親と表記し，“それに当たる大人の男性，女性”を想定した場合には誰を想定して回答したのか質問する項目を設けなかった。

(4) 進路選択に関する自己効力：富永（2009）の「進路選択自己効力」尺度を用いた。この尺度は、一因子構造（全7項目）であり、各項目について“まったく自信がない(1点)”から“とても自信がある(5点)”の5件法で回答を求めた。

(5) 進路選択に関する行動：進路を選択する上で求められる課題をどの程度行っているか、富永(2009)の「進路選択行動」尺度を用いた。この尺度は、一因子構造(全8項目)であり、各項目について“まったく当てはまらない(1点)”から“とても当てはまる(5点)”の5件法で回答を求めた。

3.3 結果

3.3.1 進路に関する親のサポートの因子分析、信頼性・妥当性の検討

邦訳した「進路に関する親のサポート」尺度の全27項目について、主因子法による因子分析を行った。その結果、固有値の推移は7.96, 3.03, 1.79, 1.64, 1.33.....であり、因子の解釈可能性も含めて検討した結果、2因子構造が妥当であると判断し、再度因子分析(主因子法・Promax回転)を行った。その際、負荷量が.30以下の2項目、両方の因子に同程度の負荷量を示す7項目を除外した。因子パターンおよび因子間相関をTable3-1に示す。

Table3-1 因子分析の結果（主因子法・Promax回転）

		パターン行列		<i>M</i>	<i>SD</i>	I-T相関	項目を削除した場合の α 係数
		I	II				
16,	よい成績を取れるように励ましてくれる(がんばれと言うなど、応援しているんだというような言葉を言ってくれる)(VE)。	.80	.00	3.64	.87	.76	.88
22,	将来、私が仕事をする時に役に立つようなことを学んでいる時、うれしくなるような言葉をかけてくれる(ES)。	.78	.05	3.10	1.01	.75	.88
23,	私が将来どんなにすばらしい仕事につけるかということについて、保護者と私は楽しく一緒に話す(ES)。	.76	.08	3.09	1.03	.74	.88
21,	私の将来の職業が楽しみだ、と話してくれる(ES)。	.75	-.24	3.08	1.02	.62	.89
27,	私が仕事することに関連のある技術や知識を勉強しているとほめてくれる(ES)。	.68	-.11	2.90	.96	.60	.89
15,	私が学校で出来るかぎり多くのことを学べるよう励ましてくれる(VE)。	.67	.13	3.80	.90	.66	.88
20,	私が勉強をよくやっているととめてくれる(VE)。	.66	-.08	3.41	.99	.59	.89
25,	私が将来の進路について不安だなと思うことを、理解してくれる(ES)。	.65	.14	3.31	.95	.68	.88
17,	卒業後、私が就職、または進学などすることを励ましてくれる(VE)。	.53	.07	4.04	.82	.53	.89
24,	私が将来の進路について心配していることを私と話す(ES)。	.51	.08	3.35	1.02	.51	.89
19,	私が学校をちゃんと卒業することを期待していると言う(VE)。	.48	-.05	3.65	.96	.44	.90
13,	仕事のことを話してくれる(CM)。	.01	.75	3.53	1.20	.66	.80
12,	職場で何をしているのか見せてくれる(CM)。	-.02	.75	3.06	1.41	.71	.80
8,	保護者の業務内容を話してくれる(CM)。	.01	.69	3.93	.94	.61	.82
9,	職場で起こったことを話してくれる(CM)。	-.03	.67	3.88	1.02	.55	.82
11,	同僚に会わせてくれた(CM)。	-.08	.66	3.07	1.53	.64	.81
10,	職場に連れていってくれた(CM)。	.00	.59	3.15	1.44	.58	.82
14,	どこで働いているか教えてくれる(CM)。	.06	.54	4.38	.76	.46	.84
		II					
因子間相関		I	.36				

注1) ()内はTurner et al., (2003)における当該項目が該当する因子。 IA=Instrumental Assistance, CM=Career-Related Modeling, VE=Verbal Encouragement, ES=Emotional Support

注2) 削除項目

“1, 私が学んでいることが、将来、私が仕事をする時にどのように役に立つのか話してくれる (IA)”

“2, 私が宿題（または課題）をするのを手伝ってくれる (IA)”

“3, 私の将来の進路について、どんな授業や勉強が役に立つのか教えてくれる(IA)”

“4, 将来、私が仕事をする時に役に立つことを教えてくれる (IA)”

“5, 将来、私が仕事をする時に役に立つ技術や知識を学べるようなことをさせてくれる (IA)”

“6, 将来の私の職業に関連するような技術や知識が学べる課外活動をさせてくれる (IA)”

“7, 私の（今やれる）仕事にほこり、自信をもてるようにしてくれる (IA)”

“18, 私が学校でよくやっていると言葉で私に言ってくれる (VE)”

“26, 将来、私にどんな仕事についてほしいか話す (ES)”

2 因子で 18 項目の全分散を説明する割合は 51.35%であった。第 I 因子は励まし、気持ちの理解、将来の期待を示すといった項目が高い負荷量を示しており、「期待・励まし」と命名した。第 II 因子は親自身の職業を話すなどの項目が高い負荷量を示しており、「親の職業経験に関する情報提供」と命名した。各因子に該当する項目を合計して項目数で割った平均および標準偏差を算出した結果、「期待・励まし」は $M=3.40$ ($SD=.67$)、「親の職業経験に関する情報提供」は $M=3.57$ ($SD=.87$) であった。内的整合性の確認のために信頼性係数を算出した結果、「期待・励まし」は $\alpha=.90$ 、「親の職業経験に関する情報提供」は $\alpha=.84$ であった (Table 3-2)。

3.3.2 進路選択自己効力、進路選択行動、進路に関する親のサポートの男女差の検討

「進路選択自己効力」と「進路選択行動」についても同様に平均と標準偏差を算出した結果、「進路選択自己効力」は $M=3.03$ ($SD=.75$)、「進路選択行動」は $M=3.34$ ($SD=.69$) であり、 α 係数は「進路選択自己効力」は $\alpha=.88$ 「進路選択行動」は $\alpha=.86$ であった (Table 3-2)。

男女差の検討のため、測定変数について t 検定を行った。その結果 (Table3-2)、「親の職業経験に関する情報提供」のみ有意差が示され ($t(133)=2.69, p<.01$)、男性よりも女性の方が平均が高かった。

Table3-2 全体と男女別の平均とSD, 男女差について t 検定の結果 ($N=135$)

	全体 ($N=135$)	α 係数	男性 ($N=71$)	女性 ($N=64$)	t 値
期待・励まし	3.40 .67	.90	3.33 .48	3.47 .83	1.25
親の職業経験に関する情報提供	3.57 .87	.84	3.38 .77	3.78 .93	2.69 **
進路選択自己効力	3.03 .75	.88	3.04 .67	3.02 .83	.19
進路選択行動	3.34 .69	.86	3.27 .64	3.41 .74	1.16

注1) 上段が平均、下段が標準偏差

注2) ** $p<.01$

3.3.3 進路に関する親のサポートと進路選択自己効力、進路選択行動との関連の検討

進路に関する親のサポートと「進路選択自己効力」との相関係数を算出した結果 (Table3-3) , 「進路選択自己効力」は「期待・励まし」($r=.39, p<.001$) , 「親の職業経験に関する情報提供」($r=.19, p<.05$) と共に正の相関を示したが、その値は低かった。また、進路に関する親のサポートと「進路選択行動」との相関係数を算出した結果、「期待・励まし」($r=.37, p<.001$) , 「親の職業経験に関する情報提供」と ($r=.22, p<.05$) 共に正の相関を示した。

Table3-3 進路に関する親のサポートと進路選択自己効力、進路選択行動との相関係数 (N=135)

	進路選択自己効力	進路選択行動
期待・励まし	.39 ***	.37 ***
親の職業経験に関する情報提供	.19 *	.22 *

注1) * $p<.05$, *** $p<.001$

続いて、進路に関する親のサポートと進路選択自己効力について階層的重回帰分析を行った。「進路選択自己効力」を目的変数とし、ステップ1で「期待・励まし」、ステップ2で「親の職業経験に関する情報提供」を説明変数として投入し、階層的重回帰分析を行った。その結果 (Table3-4) , 「期待・励まし」のみ正の標準偏回帰係数 ($\beta=.36, p<.001$) が有意であり、 R^2 は.15 で有意な値を示した ($p<.001$) 。次に、「進路選択行動」を目的変数とし、ステップ1で「期待・励まし」、ステップ2で「親の職業経験に関する情報提供」、ステップ3で「進路選択自己効力」を説明変数として投入し、階層的重回帰分析を行った。その結果 (Table3-5), 「進路選択自己効力」のみ正の標準偏回帰係数 ($\beta=.72, p<.001$) が有意であり、 R^2 は.58 で有意な値を示した ($p<.001$) 。

Table3-4 進路選択自己効力を目的変数とした階層的重回帰分析の結果 (N=135)

説明変数	β	R^2 の増加量	VIF
step1 期待・励まし	.36 ***	.14 ^{4***}	1.04
step2 親の職業経験に関する情報提供	.07 <i>n. s.</i>	.01 <i>n. s.</i>	1.04
	R^2	.15 ***	
	F	12.00	

注1) β : 標準偏回帰係数

注2) ***: $p < .001$

Table3-5 進路選択行動を目的変数とした階層的重回帰分析の結果 (N=135)

説明変数	β	R^2 の増加量	VIF
step1 期待・励まし	.08 <i>n. s.</i>	.13 ^{4***}	1.26
step2 親の職業経験に関する情報提供	.05 <i>n. s.</i>	.01 <i>n. s.</i>	1.11
step3 進路選択自己効力	.72 ***	.43 ***	1.18
	R^2	.57 ***	
	F	59.34	

注1) β : 標準偏回帰係数

注2) ***: $p < .001$

3.4 考察

本調査では、高校生を対象として、進路に関する親のサポートと進路選択に関する自己効力、進路選択に関する行動との関連を検討することを目的に調査を行った。親からのサポートは、子どもの進路選択に期待を示す、情緒的な支えなど「期待・励まし」、親自身の職業について話すという「親の職業経験に関する情報提供」に分けられた。また、男女差については、 t 検定の結果、「親の職業経験に関する情報提供」のみ差異が示され、女性の方が男性よりも親からのサポートを多く受けていた。

さて、本調査の目的である親のサポートと進路選択との関連の検討について、階層的重回帰分析の結果からは「期待・励まし」といった親のサポートが「進路選択自己効力」に正の有意な標準偏回帰係数を示しており、親の励まし、気持ちの理解、期待を示す言葉をかけるといった親のサポートは進路選択に関する自己効力と正の関連が明らかにされた。しかし、「進路選択行動」を目的変数とした階層的重回帰分析の結果では、進路に関する親のサポート下位尺度はどちらも有意な標準偏回帰係数は示されなかった。励まし、気持ちの理解等情緒的なサポートは自己効力という認知的側面に対しては関連を示すものの、直接行動には関連を示さなかったという本調査の

結果は先行研究（松田・前田, 2007 ; Nota et al., 2007 ; Restubog et al., 2010）と一致する。気持ちがポジティブになるような声かけ、気持ちに寄り添うなど情緒的なサポートは高校生の進路選択とポジティブな関連があり、子ども進路選択において重要であることが言える。しかし、重回帰分析における親のサポートの子どもの進路選択に関する自己効力に対する標準偏回帰係数は低かった。この結果について、親のサポートを測定した尺度がアメリカの生徒を対象として作成されたものであり、邦訳された項目では日本人が取りやすいサポート、またそのサポートの表現の仕方などが十分に考慮されておらず、親からのサポートを測定しきれなかったことが考えられる。親が進路選択をめぐり子どもに行うサポートについて日本人が取りやすいサポートのありようについて検討し、項目を増やし、再度関連を検討し、子どもの進路選択に対して促進的な親のサポートを明らかにしていく必要がある。

「親の職業経験に関する情報提供」については、進路選択との関連は、相関係数では「進路選択自己効力」、「進路探索行動」とは正の相関係数が示されたがその値は低く、階層的重回帰分析では「進路選択自己効力」、「進路選択行動」共に有意な標準偏回帰係数は示されなかった。この「親の職業経験に関する情報提供」の構成項目は、“仕事のことを話してくれる”、“職場で起こったことを話してくれる”などであり、そのようなかわりには特にサポートの意識はなく自然に日常会話中でやり取りされている場合もあると考えられる。しかし、親の職業に関する会話は、話をした時点では親子双方にサポートという意識はなくても、親から聞いた職業に関する話の累積が青年の進路選択の促進につながっていることが考えられる。

以上、本調査においては、進路選択に関する行動に直接関連を示す進路選択に関する自己効力の形成において、親が提供できるサポートとして励ましや、気持ちの理解、将来の期待を示すといったポジティブな感情を喚起するような言葉をかけるなどの情緒的なサポートの重要性が示された。

第4章 大学生の進路選択と親からのサポートの研究

—サポート源、サポート内容と進路選択との関連の検討—

大学生にとって、学校から職業への移行である卒業後の進路選択に関する課題が学生にとって大きな発達の課題である。進路選択をめぐる問題は重大なものだけに、学生が自ら最も身近な職業人である親に相談、サポートを求めることも多いかもしれない。サポートを求めるという行為は、ソーシャル・サポート関連研究の文脈ではサポート希求として概念化されている。大学生は進路選択に関して親を含め、周囲の誰に、どのようなサポートを求めているのだろうか。本研究は親からのサポートを検討するものであるが、大学生における進路選択においてはサポート源により異なるサポートを得ており、特に就職活動においては同じ活動している友人や学校のキャリア支援室からのサポートの重要性が明らかにされている(水野・佐藤・濱口, 2013; 下村・木村, 1997 など)。それらの点を踏まえ、本調査では大学生の進路選択に関するサポートについて親以外のサポート源として友人や大学のキャリア支援に関するスタッフも含め、大学生における進路選択に関する親のサポートを検討する。

4.1 問題と目的

進路選択という課題において大学生には周囲にさまざまなサポート源が存在する。木村・水野(2004)によれば、大学生は修学や進路に関する悩みが深刻であるほど、それについて家族や友達に援助を求める傾向があることを報告している。成田・緒賀(2010)の調査では、進路選択における悩みに関して最も援助を求めていたのは友人であり、次いで家族であり、大学の教職員の順だった。また、下村・木村(1997)は、就職活動に関して学生は家族から情緒的なサポート、友達や先輩から就職活動のノウハウや企業関連情報といった情動的サポートと情緒的サポートを主に得ており、サポート源により異なるサポートを得ていること明らかにした。友人は、社会的立場が近く、自分と同じ進路選択に関する課題に取り組んでおり、そのような友人から得られる情報や助言は重要であり、また同じ経験をしている立場であるからこそ情緒的な支えにもなるのであろう。親については、北原・佐々木・岡部(2005)は職業の選択をめぐる学生の親への相談につい

て看護、保育、福祉、栄養を先行する学部に入學した新入生を対象に調査を行った結果、職業の選択について親に相談する必要があると回答していた学生は約 8 割であり、必要とする理由としては「人生の経験者としての意見、他人の意見を聞くことは大切」、「職業選択は大切なこと」、「親なのだから、親は心配してくれている」、「親に協力してもらうことは不可欠」、「経済面などの援助が必要」という理由があった。木村・水野（2004）や成田・緒賀（2010）の調査でも友人に次いで大学生は家族に相談しやすく、親は最も身近で働く大人であり、友人とは異なるサポートが得られると考えられる。また、卒業後の進路選択をめぐり学内には、学生相談、また学生の進路選択を支援する部門としてキャリア支援室といった部門が設けられており、そこには就職活動などに関する情報が集中し、スタッフから専門的なサポートを受けることが可能である。

また、先述したように森田(1999)は自分の進路について明確な考えを抱いている学生は学生相談に対して具体的な情報や助言を期待し、考えが漠然としており不安などが高い学生は自分の気持ちの整理など話を聞いてもらうことを期待しているということを指摘し、学生の進路選択に対する状態により学生が期待するサポートが異なることを明らかにしたが、それは友人や親に対しても同様で学生の状態により求めるサポートに違いがあるかもしれない。進路選択をめぐり、大学生が求めるサポートには企業情報、就職活動のノウハウが知りたい、自己理解や職業適性を知りたい、自分の考えや判断について意見が欲しいといったものから、不安や焦りを聞いて欲しい、自分の考えを理解して欲しいといったものまでさまざまである。坂柳（1996）は”キャリアの選択・決定やその後の適応への個人のレディネスないし取り組み姿勢”を「キャリア・レディネス」と概念化し、自身のキャリアに対する関心、自律的な取り組み姿勢、将来展望をもった計画性の3つの側面からとらえている。このキャリア・レディネスと関連づけてサポート希求を考えると、進路選択を行っていく上で必要な情報や助言といったサポートを求めるという進路探索行動的なサポート希求は、職業について関心が高く、自律的であり、将来についての計画を考えているというキャリア・レディネスが高い者ほど、より強く求めると考えられる。また、近年、新卒学生の就業状況の困難さがたびたび報道され、社会の注目を集めている。身体的精神的にハードな就職活動、度重なる不採用が重なり、精神的健康を害する学生の存在が指摘されている（岡林・本田、2012）。個人の精神的健康いかんによっては進路選択という課題に取り組むことが難しくなる。職業の選択という課題に十分にに取り組むために、精神的健康の低い学生がどのようなサポートを

必要としているのかを検討することも重要であろう。

よって本調査では、大学生が親、友人、キャリア支援室や学生相談などの大学スタッフというサポート源にどの程度、どのようなサポートを求めており、それは学生自身の進路選択に対する準備状態、精神的健康とどのように関連するのかについて検討を行う。

4.2 方法

4.2.1 調査時期と対象者

2011 年 11～12 月初旬、地方の大都市および中都市の 3 つの国立・私立の 4 年制大学に在籍する学生 265 名に対して質問紙調査を行った。そのうち記入に不備等がない 235 名（女性 138 名、男性 97 名）を分析対象とした。分析対象者の平均年齢は 19.89 歳 ($SD=.97$)。所属学年は 1 年生 47 名、2 年生 98 名、3 年生 90 名であり、所属学部は、概して文系と称される学部在籍者が 160 名、理系と称される学部在籍者は 75 名であった。学年が上につれて卒業後の進路には差異が際立つと考えられるため、3 年生は全て文系学部生を対象とした（この調査を行った年は新卒学生の採用選考の見直しが行われ、2012 年度入社予定の新卒学生の採用選考が 12 月 1 日から開始された年である。その様な影響を考慮し、3 年生については 11 月中に全てのデータを取り終えた）。

4.2.2 調査手続き

調査は講義時間等を利用し、以下の内容で構成される質問紙を配布し、実施した。また、本調査は著者の所属機関の倫理委員会の承認を受け、調査に用いた尺度は全て開発者に使用の許可を得た上で行った。調査の実施に際しては、特に調査への参加や不参加、途中辞退に関して協力者に何ら不利益が生じないこと、個人情報保護には最大限の配慮をする旨などを口頭および書面で説明するなど必要な配慮を行った。

4.2.3 調査内容

(1) 大学，学部，学年，性別，年齢。

(2) 進路選択に関するサポート希求：サポートや相談についての先行研究（松田・前田, 2007; 森田, 1999; 落合・佐藤・岡本・国本, 1995; 下村・木村, 1997），また不安や悩み，ストレスに関する先行研究（藤井, 1999; 本多, 2008; 北見・茂木・森, 2009）を参考に，職業を選択していく上で必要な情報，助言，意見といった道具的なサポートを求める 9 項目，悩みを話したい，不安や焦燥を聞いて欲しい，理解して欲しいなど情緒的なサポートを求める 11 項目を設定した。親（母親，父親），友達（同性・異性の友達，先輩を含む），大学スタッフ（進路支援室，学生相談）の 3 種類の人物それぞれ個別に，“どの程度相談したい，求めたいと思いますか？”と教示し，各項目について“全く相談したくない，求めたくない”から“とても相談したい，求めたい”の 4 件法で質問した。得点が高いほど，サポート希求が高いことを示す。

(3) キャリア・レディネス：坂柳（1996）の「キャリア・レディネス」尺度を用いた。この尺度は，自分の進路について，積極的な関心を示す「関心性」，自律的な態度を示す「自律性」，計画的な将来展望を示す「計画性」の 3 下位尺度（各 9 項目）から構成される。本来この尺度は，「①人生キャリア・レディネス（人生や生き方への取り組み姿勢）」と「②職業キャリア・レディネス（職業選択と職業生活への取り組み姿勢）」の 2 系列で構成されるが，本調査では「②職業キャリア・レディネス」のみを用いた。各項目について，“全く当てはまらない”から“とても当てはまる”の 4 件法で質問した。得点が高いほど進路に対して関心性，自律性，計画性が高いことを示す。

(4) 精神的健康：Goldberg が開発し，中川・大坊（1985）が日本に導入した日本語版 GHQ の 12 項目版である GHQ-12（新納・森, 2001）を用いた。採点方法においては，4 段階 Likert 法を用いた（1 点～4 点）。得点が高いほど，精神的健康が低いことを示す。

4.3 結果

4.3.1 各サポート源に対する職業の選択に関するサポート希求

まず、親へのサポート希求を質問した全 20 項目について、主因子法による因子分析を行った結果、固有値の変化は 8.76, 1.85, 1.30, 1.05, .71・・・であり、因子の解釈可能性からも検討した結果、2 因子解を採用した。2 因子を指定し、主因子法、Promax 回転による因子分析を行い、十分な負荷量を示さなかった 4 項目を削除した。最終的な因子パターンを Table4-1 に示す。回転前の 2 因子、16 項目の全分散を説明する割合は 55.48%だった。内的整合性の検討のために α 係数を算出した結果、第 I 因子が.90、第 II 因子が.85 であった。第 I 因子は、助言、客観的な意見、情報が欲しいという内容の項目で構成されており、「道具的サポート：親」と命名した。第 II 因子は、不安や苛立ちを聞いて欲しい、理解や支持を得たいといった内容の項目で構成されており、「情緒的サポート：親」と命名した。

Table 4-1 進路選択に関する親へのサポート希求(主因子法・Promax回転)

項目内容	I	II
1, 希望する職業に就くためには何をしたらいいのかアドバイス	.80	-.15
2, 自分の職業に対する考え方は適切なものかどうか客観的な意見	.77	-.06
3, 自分の職業適性に関する客観的な意見	.75	-.06
4, 選択した職業に自分は適していると思うか客観的な意見	.72	.10
5, どのように職業を決めていくのか、その方法ややり方	.68	-.03
6, 興味のある職業について仕事内容等具体的な情報	.65	.05
7, 希望する職業への就職状況についての情報	.62	-.01
8, 自分の職業の選択は適切なものかどうか客観的な意見	.60	.25
9, どのような職業に就きたいのか明確にするための相談	.58	.20
10, 進路に関する不満やイラ立ちを聞いてもらう	-.17	.89
11, 進路に関する不安や焦りを聞いてもらう	-.07	.82
12, 自分の職業の選択は正しいものであるという保証（同意を示してくれる）	.02	.66
13, 自分と他者を比べて、劣等感を感じてしまうことを相談	.06	.63
14, 自分の職業に関する考えについて理解を示してくれる	.00	.56
15, 希望する職業に就けるように応援、励まし	.08	.51
16, 進路が決められず、どうしたらいいのか分からないことを相談	.27	.51
因子間相関		.63

※削除した項目は、「17, 自分はどんな性格の人間か客観的な意見」、「18, 卒業後どのような職業生活を送りたいのか明確にするための相談」、「19, 職業を選択することに関して自信が持てないことを相談」、「20, なぜこの職業を希望するのか整理するための相談」の 4 項目。

同様に、友達へのサポート希求を質問した全 20 項目についても、因子分析（主因子法）を行った結果、固有値の変化は 8.96, 1.56, 1.33, .90, .84・・・であり、因子の解釈可能性からも検討した結果、親と同様に 2 因子を採用した。2 因子を指定し、主因子法、Promax 回転による因子分析を行い、十分な負荷量を示さなかった 4 項目を削除した。最終的な因子パターンを Table4-2 に示す。回転前の 2 因子、16 項目の全分散を説明する割合は、54.21%だった。各因子の α 係数は、第 I 因子が.88, 第 II 因子が.86 であった。因子数、各因子を構成する項目が親と同様の因子数、項目であったので、因子の命名については親のサポート希求に習い、第 I 因子を「道具的サポート：友達」、第 II 因子を「情緒的サポート：友達」とした。

Table4-2 進路選択に関する友達へのサポート希求(主因子法・Promax回転)

項目内容	I	II
1, 希望する職業に就くためには何をしたらいいのかアドバイス	.84	-.15
5, どのように職業を決めていくのか、その方法ややり方	.79	-.12
7, 希望する職業への就職状況についての情報	.72	-.07
4, 選択した職業に自分は適していると思うか客観的な意見	.64	.09
9, どのような職業に就きたいのか明確にするための相談	.63	.08
2, 自分の職業に対する考え方は適切なものかどうか客観的な意見	.60	.16
3, 自分の職業適性に関する客観的な意見	.57	.12
8, 自分の職業の選択は適切なものかどうか客観的な意見	.54	.16
6, 興味のある職業について仕事内容等具体的な情報	.50	.14
10, 進路に関する不満やイラ立ちを聞いてもらう	-.17	.87
11, 進路に関する不安や焦りを聞いてもらう	-.14	.87
13, 自分と他者を比べて、劣等感を感じてしまうことを相談	.10	.64
15, 希望する職業に就けるように応援、励まし	.09	.59
14, 自分の職業に関する考えについて理解を示してくれる	.24	.49
16, 進路が決められず、どうしたらいいのかわからないことを相談	.29	.48
12, 自分の職業の選択は正しいものであるという保証（同意を示してくれる）	.22	.44
因子間相関		.66

※削除した項目は、親への被援助志向性の場合と同じ4項目。

続いて、大学スタッフへのサポート希求を質問した全 20 項目について、因子分析（主因子法）を行った結果、固有値の変化は 9.46, 2.32, 1.37, .89, .69・・・であり、因子の解釈可能性も検討した結果、3 因子解を採用した。3 因子を指定し、主因子法、Promax 回転による因子分析を

行い、十分な因子負荷量を示さなかった 4 項目を削除した。最終的な因子パターンを Table4-3 に示す。回転前の 3 因子、16 項目の全分散を説明する割合は、69.64%だった。 α 係数は、第 I 因子から順に、.91, .87, .88 だった。第 I 因子は、不安や苛立ちを聞いて欲しい、悩みを聞いて欲しいといった内容の項目で構成されており、「情緒的サポート：スタッフ」と命名した。第 II 因子は、情報、助言が欲しいという内容の項目で構成されており、「情報的サポート：スタッフ」と命名した。第 III 因子は、進路に関する自らの考えや判断に関して客観的な意見が欲しいといった項目で構成されており、「評価的サポート：スタッフ」と命名した。

Table4-3 進路の選択に関する大学スタッフへのサポート希求(主因子法・Promax回転)

項目内容	I	II	III
10, 進路に関する不安や焦りを聞いてもらう	.95	-.04	-.10
11, 進路に関する不満やイラ立ちを聞いてもらう	.92	-.18	-.03
13, 自分と他者を比べて、劣等感を感じてしまうことを相談	.91	-.14	-.08
16, 進路が決められず、どうしたらいいのか分からないことを相談	.65	.23	.01
19, 職業を選択することに関して自信が持てないことを相談	.64	.27	-.01
15, 希望する職業に就けるように応援、励まし	.56	.08	.19
14, 自分の職業に関する考えについて理解を示してくれる	.51	.02	.30
7, 希望する職業への就職状況についての情報	-.07	.87	-.14
1, 希望する職業に就くためには何をしたらいいのかアドバイス	.00	.82	.01
6, 興味のある職業について仕事内容等具体的な情報	-.09	.80	.06
5, どのように職業を決めていくのか、その方法ややり方	.06	.76	.02
4, 選択した職業に自分は適していると思うか客観的な意見	-.09	-.08	.95
3, 自分の職業適性に関する客観的な意見	-.18	.09	.80
6, 自分の職業の選択は適切なものかどうか客観的な意見	.12	.01	.75
17, 自分はどんな性格の人間か客観的な意見	.18	-.16	.63
2, 自分の職業に対する考え方は適切なものかどうか客観的な意見	.22	.23	.41
因子間相関		.43	.63
			.56

※削除した項目は、「12, 自分の職業の選択は正しいものであるという保証（同意を示してくれる）」、「20, なぜこの職業を希望するのか整理するための相談」、「18, 卒業後どのような職業生活を送りたいのか明確にするための相談」、「9, どのような職業に就きたいのか明確にするための相談」の 4 項目。

各サポート源へのサポート希求得点、キャリア・レディネス各下位尺度得点（関心性、自律性、計画性）、GHQ 得点の平均値および SD、得点範囲を Table4-4 に示す。キャリア・レディネスと GHQ の α 係数については、関心性が.84、自律性が.81、計画性が.76、GHQ が.76 であった。サ

ポート希求，キャリア・レディネス，GHQ についての学年差および性差の検討を行うため，性別（男性・女性）×学年（1 年・2 年・3 年）の 2 要因分散分析を行った（Table 4-4）。

Table 4-4 全体および性別と学年による各得点と分散分析結果

	全体		男性 (N=97)			女性 (N=138)			主効果		交互作用
	(N=235)	得点範囲	1年 (N=19)	2年 (N=49)	3年 (N=29)	1年 (N=28)	2年 (N=49)	3年 (N=61)	性別	学年	
道具的サポート：親	25.65 (5.36)	1~36	26.89 (5.69)	24.84 (4.49)	24.48 (6.03)	26.07 (6.53)	26.41 (4.68)	25.67 (5.52)	.72	.99	.80
情緒的サポート：親	18.50 (4.49)	1~28	17.26 (5.49)	16.76 (3.44)	15.90 (4.54)	19.11 (4.81)	19.57 (3.74)	20.39 (4.25)	26.24 ***	.00	1.62
道具的サポート：友達	26.48 (5.17)	1~36	24.89 (6.41)	24.31 (5.06)	25.10 (5.07)	27.21 (5.68)	27.27 (4.62)	28.39 (4.23)	16.50 ***	.84	.14
情緒的サポート：友達	19.51 (4.50)	1~28	19.11 (5.57)	17.94 (3.69)	17.03 (4.24)	20.75 (4.67)	19.86 (4.47)	21.25 (3.95)	18.31 ***	.91	1.98
情動的サポート：スタッフ	14.10 (2.49)	1~16	13.74 (2.60)	13.41 (3.07)	12.66 (2.86)	14.79 (1.87)	14.90 (1.54)	14.51 (2.23)	18.72 ***	1.66	.41
評価的サポート：スタッフ	13.74 (3.66)	1~20	13.63 (3.93)	12.59 (4.02)	12.97 (3.98)	13.39 (3.75)	14.47 (2.72)	14.64 (3.50)	4.70 *	.15	1.44
情緒的サポート：スタッフ	16.80 (5.21)	1~28	16.16 (5.82)	15.31 (5.08)	13.52 (5.15)	16.54 (4.48)	17.67 (4.25)	19.16 (5.07)	16.16 ***	.02	4.64 *
関心性	25.69 (4.64)	1~36	25.53 (4.01)	24.41 (5.23)	25.41 (4.87)	25.89 (4.41)	25.00 (3.87)	27.34 (4.59)	2.22	2.99	.61
自律性	26.16 (4.06)	1~36	26.79 (4.42)	26.02 (4.08)	25.90 (5.22)	27.14 (3.68)	25.71 (3.41)	26.11 (4.04)	.02	1.19	.14
計画性	20.38 (4.22)	1~36	19.84 (4.98)	20.00 (4.18)	21.00 (4.46)	21.57 (4.09)	19.73 (3.82)	20.54 (4.26)	.31	1.19	1.11
GHQ	26.36 (4.69)	1~48	24.00 (5.10)	26.24 (4.35)	25.03 (3.35)	26.36 (5.08)	26.73 (4.52)	27.51 (5.05)	7.36 **	1.29	1.21

*, $p < .05$, **, $p < .01$, ***, $p < .001$

上段：平均値 下段：標準偏差

その結果，「情緒的サポート：スタッフ」では有意な交互作用（ $F(2,229) = 4.64$, $p < .05$ ），有意な性別の主効果（ $F(1,229) = 16.16$, $p < .001$ ）が示された。交互作用が有意であったため，単純主

効果の検定を行った結果、学年が 1 年では性別の単純主効果は有意ではないが、2 年 ($F(1,229) = 5.67, p < .05$)、3 年 ($F(1,229) = 25.90, p < .001$) では性別の単純主効果が有意であった。また、学年の単純主効果では男性では有意ではなかったが、女性で有意な傾向が示され ($F(2,229) = 3.03, p < .10$)、女性では 1 年生よりも 2 年生、3 年生のほうが「情緒的サポート：スタッフ」の値が高かった (Bonferroni 法)。また、有意な性別の主効果が、「情緒的サポート：親」 ($F(1,229) = 26.24, p < .001$)、「道具的サポート：友達」 ($F(1,229) = 16.50, p < .001$)、「情緒的サポート：友達」 ($F(1,229) = 18.31, p < .001$)、「情動的サポート：スタッフ」 ($F(1,229) = 18.72, p < .001$)、「評価的サポート：スタッフ」 ($F(1,229) = 4.70, p < .05$)、「GHQ」 ($F(1,229) = 7.36, p < .01$) において見られ、いずれも男性よりも女性の方が得点が高かった。

サポート希求とキャリア・レディネスの関連 サポート希求とキャリア・レディネスとの関連を検討するため、キャリア・レディネス各下位尺度得点の平均以上を High 群、平均未満を Low 群とし、各サポート希求得点を従属変数として、関心性(Low 群・High 群)×自律性(Low 群・High 群)×計画性(Low 群・High 群)の 3 要因分散分析を行った。その結果を Table4-5 に示す。

Table 4-5 キャリアレディネス各下位尺度得点による分散分析結果

	関心性		Low				High				主効果			交互作用			
	自律性		Low		High		Low		High								
	計画性		Low	High	Low	High	Low	High	Low	High							
			N=72	N=24	N=12	N=5	N=16	N=25	N=31	N=50	関心性	自律性	計画性	関心×自律	関心×計画	自律×計画	関心×自律×計画
道具的サポート：親	25.49 (5.40)	25.46 (5.62)	23.42 (5.71)	26.40 (1.14)	25.88 (3.77)	24.88 (5.04)	27.68 (5.50)	25.50 (5.78)	.71	.12	.00	.89	2.65	.24	1.24		
情緒的サポート：親	18.65 (4.49)	17.25 (4.44)	16.17 (5.29)	18.20 (3.77)	20.13 (3.07)	17.84 (4.49)	19.71 (4.46)	18.54 (4.64)	3.60	.16	.81	.34	1.70	2.11	.55		
道具的サポート：友達	26.28 (5.25)	24.17 (5.35)	24.83 (5.24)	25.20 (4.09)	27.25 (2.74)	26.72 (4.25)	28.39 (5.71)	26.84 (5.45)	5.87 *	.06	1.13	.22	.01	.17	.94		
情緒的サポート：友達	20.08 (4.35)	16.96 (4.07)	18.33 (6.08)	18.40 (4.51)	19.69 (2.57)	19.24 (4.42)	20.77 (3.95)	19.62 (5.01)	3.16	.14	2.23	.32	.22	.63	1.56		
情報のサポート：スタッフ	14.19 (2.37)	12.38 (3.37)	13.50 (3.61)	12.80 (3.27)	14.56 (1.67)	14.32 (2.32)	15.00 (1.59)	14.26 (2.23)	9.57 **	.00	4.22 *	.14	.81	.13	.90		
評価的サポート：スタッフ	13.43 (3.82)	11.79 (3.73)	12.33 (3.55)	13.00 (3.94)	15.00 (2.13)	13.28 (2.92)	15.32 (3.71)	14.38 (3.60)	8.82 **	.38	2.11	.28	.46	1.52	.37		
情緒的サポート：スタッフ	16.49 (5.00)	14.42 (4.00)	15.33 (4.44)	14.60 (2.88)	20.00 (4.86)	17.48 (5.26)	18.65 (6.19)	16.44 (5.19)	10.78 **	.89	4.44 *	.16	.29	.21	.08		

*: $p<.05$, **: $p<.01$

上段：平均値 下段：標準偏差

有意な交互作用は示されなかったが、有意な関心性の主効果が、「道具的サポート：友達」($F(1,227)=5.87, p<.05$)、「情動的サポート：スタッフ」($F(1,227)=9.57, p<.01$)、「評価的サポート：スタッフ」($F(1,227)=8.82, p<.01$)、「情緒的サポート：スタッフ」($F(1,227)=10.78, p<.01$)で見られ、いずれも関心性の高い者の方が低い者よりも得点が高かった。また、有意な計画性の主効果が、「情動的サポート：スタッフ」($F(1,227)=4.22, p<.05$)、「情緒的サポート：スタッフ」($F(1,227)=4.44, p<.05$)で見られ、計画性が低い者の方が高い者よりも得点が高かった。

サポート希求と GHQ の関連 サポート希求と GHQ との関連の検討のため、GHQ 得点の平均以上を High 群、平均未満を Low 群とし、各サポート希求得点を従属変数として t 検定を行った。その結果を Table4-6 に示す。

Table4-6 GHQ得点による t 検定結果

	Low群 (N=121)	High群 (N=114)	t 値
道具的サポート：親	25.49 (5.30)	25.82 (5.45)	.48
情緒的サポート：親	18.10 (4.44)	18.93 (4.53)	1.42
道具的サポート：友達	26.44 (5.36)	26.52 (4.99)	.12
情緒的サポート：友達	19.09 (4.66)	19.96 (4.29)	1.49
情動的サポート：スタッフ	13.83 (2.80)	14.39 (2.08)	1.77
評価的サポート：スタッフ	13.45 (3.70)	14.04 (3.60)	1.24
情緒的サポート：スタッフ	15.79 (5.08)	17.86 (5.15)	3.09 **

**: $p<.01$

上段：平均値 下段：標準偏差

その結果（Table4-6），「情緒的サポート：スタッフ」で有意な差異が示され($t(233) = 3.09$, $p < .01$)，GHQ得点が高い者の方が低い者よりも得点が高い，つまり精神的健康の程度が低い者の方がスタッフに対して情緒的なサポートを求めている。

4.4 考察

4.4.1 各サポート源に対するサポート希求

本調査の目的は、大学生の進路選択に関するサポート希求について、求めているサポート内容が、援助者であるサポート源により異なるのか、またそれがキャリア・レディネス及び精神的健康とどう関連しているのかを検討することであった。

まず、進路選択に関するサポート希求について、親と友達へのサポート希求は、助言、客観的な意見や情報を求めるといった「道具的サポート」と、不安や苛立ちを聞いて欲しい、理解や支持が欲しいといった「情緒的サポート」という2つのサポート希求にまとめられた。大学スタッフへのサポート希求については、情報や助言が欲しいという「情動的サポート」、客観的な意見が欲しいという「評価的サポート」、不安や苛立ち聞いて欲しいという「情緒的サポート」の3つにまとめられた。親や友達への「道具的サポート」と大学スタッフへの「情動的サポート」、「評価的サポート」は、職業を選択していく上で必要な情報、助言、意見、評価を求めるという点から進路探索行動ともとらえられる。親や友達では「道具的サポート」として1つの因子にまとまったが、大学スタッフでは「情動的サポート」と「評価的サポート」の2つの因子に分かれたことから、大学生にとって進路支援室や学生相談といった専門的な部門から提供されるサポートは、親や友達からのサポートよりも分化してとらえられているのではないかと考えられる。また、友人だけでなく親からのサポートも情動的サポートと情緒的なサポートにまとめられ、大学生の就職活動及びそれを取り巻く社会的情勢が時代と共に変容しても、大学生は親に対して情緒的なサポート源であると共に、社会で働く職業人として助言やアドバイスを有している存在としてもとらえられていると考えられる。

4.4.2 各サポート源に対するサポート希求とキャリア・レディネス、精神的健康との関連

まず、基本的分析として性別と学年の差異を検討した結果、サポート希求については、「道具的サポート：親」以外で男性よりも女性の方が得点が高く、女性の方が職業の選択をめぐり援助を求めている。先行研究からは一般的に男性よりも女性の方が援助を求めやすいとされており（水野・石隈, 1999），本調査においても同様の知見が得られた。また、男性よりも女性の方が精神的

健康の程度が低かった。この点については、職業に関連する問題に由来するのと言及することは困難であるが、「道具的サポート：親」以外のサポート希求について女性の得点が男性に比べて高かった点、および女性については1年生よりも2年生、3年生において「情緒的サポート：スタッフ」が高かった点について、それらが女性の職業の選択に関する困難さを反映している可能性が考えられる。成田・緒賀（2010）において、男性より女性の方が職業に関する不安が高ことが示された。現代でも、職業をめぐる女性であることが不利に働くという意識、またそれを感じさせる経験は少なくないと考えられる。さらに、大学卒業後の人生を考える際には、結婚や出産、育児など女性特有のライフイベントといった検討すべき点が多い。そのようなことが卒業後の職業の選択に関するサポート希求の高さに関連している可能性がある。しかし、男性についても男性であるが故の困難さ（社会期待、性役割規範など）があると予測され、職業をめぐる性別に関する問題については今後検討していく必要があると考えられる。

学年差に関しては、学年が上り、大学から社会に出て働くということがよりリアリティをもって迫ってくるにつれて、自身の職業に関する関心が高まり、自ら今後について具体的な計画を考え、それに関してサポートを求める機会も多くなると考えられるが、今回の調査ではサポート希求の一部で学年差が示されただけだった。この点については、各学年を通じて得点が高かったために有意な差異が示されなかった可能性が考えられる。この背景として、現在の大学生が置かれている社会状況の影響が少なくないであろう。就業先を得られないまま卒業、また留年を余儀なくされた学生の姿が広く報道され、各種就職支援サイトや関連書籍などではより早期から学生に就職活動等へ向かわせる風潮が近年かなり強い。そのような中で大学生は卒業後の進路について入学以前から強く意識せざるをえない状況にあると考えられる。それらは大学卒業後の進路について考える機会が増える、職業意識の高まりという好ましい面だけではなく、職業の選択、就業先の確保だけを目的とした活動に大学4年間を費やし、大学時代に取り組むべきその他の青年期の重要な発達的な課題に十分に取り組めないことにもつながり得るという側面は注意すべき点であろう。

そして進路選択に対する準備状態と周囲へのサポート希求との関連について検討したところ、自分の進路に対して関心性が高い者は、低い者に比べ、「道具的サポート：友達」、「情動的サポート：スタッフ」、「評価的サポート：スタッフ」の得点が高く、つまり卒業後の職業など進路に関

して関心の高い者は、自分の進路を考え、選択していく上で必要な助言、意見、情報といったサポートを友達や大学スタッフに対してより求めるということである。インターネット等を用いた就職活動が主流の現代でも、就職活動や企業関連情報などについて大学の友達や先輩といったインフォーマルな関係の中で得られるものは大きく（下村・木村, 1997；下村・堀, 2004）、進路支援室などは職業に関する情報等の資源が集中している。関心の高い者は自分の求める情報や助言といったサポートを、それを有していそうなサポート源に求めていくと考えられる。一方、計画性が高い者よりも低い者の方が、「情動的サポート：スタッフ」、「情緒的サポート：スタッフ」の得点が高かった。これは、将来展望が低く、今後の自分の進路について計画を立てることが困難な者は、考える材料となる情報を大学内の専門部門に求めるのではないかと考えられる。また、計画が立てられていない為に生じる焦り、不安といった面について、専門部門に情緒的なサポートを求めるのではないかと考えられる。

次に、各サポート源に対するサポート希求と精神的健康との関連について検討した。精神的健康の指標である GHQ 得点の高群と低群での比較から、精神的健康の低い者は高い者よりも、「情緒的サポート：スタッフ」が高かった。精神的健康が低い者は、職業の選択という重要な課題に取り組むことにおいて負担が大きく、情緒的なサポートを求めるのではないかと考えられる。また、キャリア・レディネスとサポート希求の関連からは、関心性が高い者は低い者よりも「情緒的サポート：スタッフ」が高く、大学スタッフに情緒的なサポートを求めている。臨床心理士による相談機会を設けているハローワーク等もあるように、大学の進路選択を援助する部門においても、情報提供等だけではなく、情緒的な側面へのサポートや、時には精神的な支援を専門とする部門との連携など、各学生に応じたサポートを提供することが必要であろう。

第5章

進路選択における日常生活の中での親のサポートに関する質的研究 —医療系専門学校に進学した学生のインタビュー調査から—

第2章から第4章までは調査研究という手法を用いて検討を行ってきたが、進路選択に関する親からのサポートは日常生活の中で、親の些細な言動や職業に対する姿勢、日常会話などを通じて青年に与えられている面もあり、それが青年の進路選択に影響を及ぼすことが考えられる。青年にとって親は幼少期から目にしてきた最も身近な職業人である。例えば、幼少期の子どもの目に映った親の働く姿から親の職業に興味を持ち、それがきっかけとなり青年期において親と同一または類似の職業を選択する場合が考えられる。また、幼少期は特に意識しなかったものの、青年期において自分の進路を決めなければならない段階になり、これまでの生活において親を通じて身近だった職業に興味をもち、進路選択に影響を与えることが考えられる。このように過去から何らかの進路に関する決断をする時期に至るまでの親のサポート、かかわりの経験の累積が、青年の進路選択にどのように影響を及ぼしているのかを全体的に検討するためには、限られた質問項目から親のサポートを検討するには限界があり、本章ではインタビュー調査による質的研究を用いて親のサポートについて検討する。

5.1 問題と目的

現在、特定の職業人を養成することを目的とした大学や短期大学、専門学校といった高等教育機関は数多くあり、そのような学校では在学中に学ぶ内容が卒業後の職業と密接に関連している。そのため、入学時点から学生は卒業後に特定の職業に就業することを希望ないし意識して入学してくる。中野・中屋・山本・山崎・平賀・片山・重島・高地（2010）は、医療系専門学校の学生の進学動機を検討した結果、進学動機には、自分の特性・能力を生かせる、専門職に関する学習に向いている「適性考慮」、専門職に就きたい、国家資格を取得したい「専門性追求」も存在したが、自分の可能性を広めたい「可能性追求」、親の勧めといった「他律的動機」、漠然と決めた「無目的・漠然」という動機も存在していたことを明らかにした。さらに進学動機と入学

後の学校適応の関連を検討した結果、「無目的・漠然」が高い学生は学校適応感が低く、「適性考慮」，「専門性追求」が高い学生は学校適応感が高いという，学校適応と入学動機との関連性を指摘している（中野ら，2010）。山中・安達（2009）は医療系専攻学生の入学動機を検討した結果，専門分野の学習に興味があり，専門職を目指すという入学動機が，入学後の学習に対する積極的な態度と関連していたことを明らかにしている。このように専門学校入学時にその学校で学ぶ内容への関心や卒業後に就くことになるであろう職業への就業希望の高さが入学後の適応に重要であることが分かる。

しかし，数多くある職業の中，高校生の段階で特定の職業を選択，決定することは容易なことではない。本多・落合（2004）は，医療系専攻の学生の進路決定プロセスを検討し，小学生頃から希望して進学した「早期決定型」，他に希望職があったが，成績や周囲の反対などから葛藤を経験し，希望を変更して進学した「中途変更型」，直前進学まで職業について明確でなく，直前に決定したが，その決定は運命だと受け止めている「直前決定型」，いつまでもどのような職業に就くのかははっきりせず，将来の見通しも明確ではなく，その時あった話に乗り合格した「回避型」，高校生で現在の希望職業を知り，その職業に就こうと思って進学した「出会い型」の5類型を提唱した。その5類型の特徴として，「早期決定型」と「出会い型」は他の型に比べて，明確な職業イメージを持ち，主体的に進学を決定しており，「回避型」や「直前決定型」は職業イメージが不明確で，決定において主体性が低く，「中途変更型」は希望する別の進路があったにもかかわらず変更し，選択した進路への自信が低い傾向にあるということを報告している。このように，進学時に卒業後就業するであろう職業への就業希望や関心，イメージだけでなく，進学を主体的に行ったという点も重要であり。

特定の職業への就業と結びついた学部や専門学校への進学は，そこでの学習が卒業後の職業と関連するため，進学自体が職業の選択と言っても過言ではない。しかし，高校生という学校中心の生活を送り，社会経験が十分とは言えない段階でそのような課題に取り組むことは容易なことではない。そこでは自分の関心や適性を考える，職業を調べる，職業と自己の適性との関連を検討するなど探索だけでなく，周囲からの影響も大きいことが考えられる。労働に関する価値観（work values）は，家庭，学校，労働場面の経験，さまざまな人々との関わりや同一視，相互作用といったことを通じて発達する（Super, 1962）。Ginzberg et al., (1951)においても，進路発

達においてまず自分にとって重要な人物である大人の役割を想像することから始まるとされている。特に同性の親は働く大人のモデルとされやすく、子どもの職業観や希望職業に影響を与える(松本, 2008; 鹿内, 2006; 田中・小川, 1985)。田中・小川(1982)は、親と同様の職業を継承する行為を「他者の職業上の態度、行動様式などを意識的、無意識的に自分の中に取り入れる過程」である職業的同一視として、同姓の親が職業モデルとされやすいことを指摘している。

Wijting, Arnold & Conrad (1977) は、職業に関する価値は、最も身近な職業モデルである親との同一視を通じて形成されると指摘している。また、親の労働に関する価値観は、日常生活の中で親が子どもに対する態度、自分の就業経験を子どもに話すことを通じて子どもに伝達される(Wijting, Arnold & Conrad, 1978)。このように、幼少期から日常生活において親が自分自身の職業に関する話や態度、働く姿が子どもの労働に対する価値観や志向性に与える影響は大きい。

本調査では、ある特定の職業を高校生という時期に選択、決定した学生に対して、日常生活の中で過去から現希望職の決定に至るまでの親のサポートについて、その内容だけでなく、どのようなタイミングで親のサポートが青年の進路選択のプロセスに影響を与えていたのか、インタビュー調査により質的に検討する。

5.2 方法

5.2.1 インタビュー協力者

地方の大都市に位置する A 医療系専門学校 1 年次に在籍する学生に対して、学内ポスターや知人の紹介を通じてインタビューへの参加を集い、調査の説明をした上で同意が得られた 9 名の学生の語りを分析データとした(Table5-1)。今回インタビュー対象として選んだのは、医療機器や器具等を扱う某医療系職業人を養成する専門学校に在籍する学生である。インタビュー協力者の募集の際に、親の職業については一切触れていない。医療系専門学校学生を対象としたのは、その学校の入学がある特定の職業への従業とほぼ直結しており、過去の学校のデータから卒業生のほぼ全てがある特定の職業に就業するためである。また、医師や看護師などと比べると知名度が高くはなく、身近に触れ合う機会が少ない職業であり、問

題と目的にて指摘したように、高校生という学校中心とした生活を送っている段階でそのような特定の職業を決定したプロセスにおいて、周囲の影響、特に親のサポートを検討しやすいと考えたためである。

Table 5-1 協力者の年齢、性別、出身高校、家族構成および現在の職業を選択した時期

氏名	年齢	性別	出身高校	同居家族構成及び家族の職業				現在の職業を選択した時期
A	19	女性	普通科	父親：会社員	母親：他医療職	兄：学生		中学3年生
B	19	女性	普通科	父親：会社員	母親：他医療職	弟、妹：学生		高校3年生
C	19	女性	普通科	父親：会社員	母親：専業主婦	弟：学生		高校3年生
E	19	女性	普通科	父親：会社員	母親：他医療職			高校3年生
G	19	女性	普通科	父親：製造自営業	母親：会社員	兄：製造自営業	姉：他医療職	中学2年生
J	19	男性	工業科	父親：他医療職	母親：会社員			高校3年生
K	19	男性	普通科	父親：会社員	母親：会社員			高校3年生
L	19	男性	普通科	父親：製造自営業	母親：他医療職	姉：福祉職		高校3年生
M	19	男性	工業科	父親：飲食店経営	母親：他医療職	兄：学生		高校3年生

5.2.2.インタビュー実施

協力者が学生であり、学業への支障を避けるために夏季休業中の2013年7～9月に筆者が個別インタビューを行った。事前に調査の目的、ICレコーダーでの録音などインタビューの方法、個人情報の保護、途中で調査を辞退しても協力者に不利益とならないこと、回答したくない質問には回答しなくてよいことなど必要な説明を口頭および書面で十分に行い、口頭および書面において同意を得てからインタビューを開始した。なお匿名性を十分に配慮した上で今後論文等で発表する可能性についても承諾を得た。なお本調査は著者の所属する機関の倫理審査委員会の承認を得た上で行った。

インタビューについて、インタビュー内容を正確に筆者が理解しているか確認するために1人当たり1回50分程度のインタビューを2回行った。インタビューにおいてはTable5-2にあるような質問項目を用意し、半構造化面接にて行った。

Table 5-2 半構造化面接における主な質問内容











①氏名、年齢、性別、家族構成とその職業
②現在の希望職になろうと思った時期とその理由
③他職との迷いの有無
⑤親からの進路選択に関するかかわり(助言や情報提供、相談など)
⑥親の職業に触れる機会
⑦日常会話における親の職業に関する会話

5.2.3. 分析方法

インタビューデータをもとに逐語録を作成し、K J法により記録を意味のまとまりごとに切片化し、その内容を表す見出しを付けて整理した。その後、まとまりを時系列に並べ、各項目を、複線径路・等至性モデル (Trajectory Equifinality Model: 以下 TEM) の方法を用い (サトウ・安田・木戸・高田・ヤーン, 2006), 現希望職を選択するのに至るまでの出来事, 経験を検討した。

TEM とは、人間は常に外界と交渉し、自己システムを維持する開放システムとして捉え、時間を捨象して外在的に扱わず個人が経験した時間の流れを重視し、ある選択にたどり着くまでにそれまでの経験、社会との関係性、時間を丁寧に扱い分析する手法である (安田・サトウ, 2012)。本調査においては、「現希望職を選択する」に至るまでの個人の経験、親のサポートの累積を全体的に検討することが可能であり、またそれを図示することで過去から現在までの個人の歩み、親と青年が影響を及ぼしあうダイナミックな流れがわかりやすく視覚化され検討可能になることからこの手法を用いた。また、TEM では、ある現象を丁寧に分析するための枠組みとしての概念ツールが設定されており、これらを Table5-3 に示す。なお、これらの概念ツールはすべてを必ず使わなければならないわけではなく、得られたデータを適切に検討するために必要な概念のみを用いて分析が行われることが多く (安田・サトウ, 2012), 本調査においても必要なツールを選択して用いた。

Table5-3 TEMで用いられることが多い概念ツール（安田・サトウ，2012より作成）

TEM概念	図	概念説明
非可逆的時間 (Irreversible Time)		クロックタイム（物理的時間）ではなく、本人が生きてきた時間を示す
径路 (Trajectory)		非可逆的な時間の流れの中で実現した個人の行動や選択などの道、径路
仮想径路		論理的には考えられるが個人に歩まれなかった仮想径路
分岐点 (Bifurcation Point)		その後の径路が複数に分かれるような経験
等至点 (Equifinality Point)		ある定常状態に等しく (Equi)、辿りつく (Final) ポイント、収束点
必須通過点 (Obligatory Passagr Point)		制度など通常ほとんどの人が経験するような経験
両極化した等至点 (Polarized Equifinality Point)		論理的には考えられるが辿りつかなかったポイント、収束点
仮想される経験		論理的には考えられるが個人には経験されなかった経験
社会的ガイド (Social Guidance)		等至点に近づくことを促進する力
社会的方向づけ (Social Dierctionz)		等至点に近づくことを抑制する力

本調査においては、現在の職業を決定した「現希望職を選択する」を「等至点」として設定し、そこに至るまで個人がどのような経験をしてきたのか、いくつかの事象を時系列順に並べ、そして径路が複数に分かれる経験、ターニングポイントとなるような経験を「分岐点」として設定し、親のサポートを等至点にたどり着くことを促進する「社会的ガイド」と位置づけ、特に焦点を当て検討した。その際、「他の職業を選択、あるいは未決定」という、論理的には考えられるが実際には個人によって歩まれなかった径路である「両極化した等至点」、また、選ばれなかった径路である「仮想径路」ならびにそこで経験されていたかもしれない「仮想される経験」を設けた。その理由は「ある特定の事象が達成されるということが好ましいという価値観や信念を抱いてしまっていることがあるので、これを避けるため」（荒川，2012）である。

この手法を用いて、一人一人の語りから TEM 図を作成したところ、「現希望職を選択する」までのプロセスが大きく 3 つの類型に分けられたため、類型ごとにインタビュー協力者の TEM 図を 3 つにまとめた。今回は進路選択のプロセスに焦点を当てるというのではないが、親から

のサポートがなされた時、その青年の進路選択のプロセスはどのような状態にあったのか、前後の文脈を含めて検討するためにこの方法を用いた。また、親のサポートについて焦点を当てるため、重複はするが親のサポートに関する事象をまとめ、そのサポートについて検討した。

5.3 結果

5.3.1 現希望職の選択プロセス

協力者の全9名が現希望職を選択したプロセスには、個々で違いはあるものの、本田・落合(2004)の類型にあてはめて類型化した。協力者が現希望職を決定し、そのための進学を決意した時期は、早期に現希望職を希望していた2名は中学生、他の協力者が高校3年の春から秋にかけてであり、その前後で協力者全員が現進学先のオープンキャンパスに参加している。受験先については、元々養成学校が少ないため、現進学先の学校のみ志願し受験して合格している。しかし、そこに至るまでのプロセスは大きく3つに分けられ、まずはそのプロセスについて検討する。また、インタビュー時、全ての協力者は現進学先に進学したことを自分が主体となって選択したと感じており、現希望職に就きたいという思いも強く持っていた。

<直前決定型>

この類型に分類された4名の語りをTable5-4に、語りから作成したTEM図をFigure5-1に示す。この4名は、高校2年生の終わりから3年生という卒業後の進路を決めなくてはならない時期になり、それまで特定の職業を自分の将来の職業として十分に検討することはなかった「漠然とした将来」であった状態から、周囲が受験ムードになってきたこともあり、「卒業が近づき、将来の職業を考え始める」。将来の職業を考え始めるが、これまで特に明確な志望があったわけではなく、漠然と～のようなというイメージはあっても具体的な職業領域や職業名は出てこないという状態であった。どうしたらよいか考え始めた頃、親との会話などをきっかけに、「現希望職を知る、意識する」ようになった。具体的には、日常的な会話の中で医療職である親自身の職場の話を聞いており、そのことから現希望職を知ったという「親との会話から知る」場合、親と将来について会話をしている中で自分がやりたいことが自分の中で整理、明確になってい

き、そこで親に自分が求めるような職業である現職業を勧められ、これまで知っている程度だった職業が自分の将来の職業の選択肢の一つとして意識するようになった「親の対話と紹介から意識する」場合、子どもが進路について考えていないと「心配」した親が専門学校展に連れて行ってくれた過去の出来事をこの時期に思い出し、自分の興味のある職業を意識した「以前、親と行った専門学校展を思い出す」場合、漠然としておりどんな職業があるのかもわからず、親から3つの職業を紹介され、まずその3つから調べ、現希望職を知り、検討し始めた「親から複数の医療職を紹介されて知る」場合があり、親がどこまで動くかという積極性に差はあった。

そして「現希望職を知る、意識する」という経験から、「現希望職を検討する」という径路をたどっている。しかし、「他職に関心をもち検討する」ということも考えられるが、協力者は親を介して知った現希望職を自らさらに調べ、職業内容、自分自身の関心なども含めて「現希望職について検討する」。その結果、自分の興味や関心と仕事内容や雇用状況などが一致していたため、「現希望職を選択する」というプロセスをたどっていた。また4名は、幼少期から親の職業に関する話を日常的に聞いており（「親の職業に関する会話」）、また親の職場に行き親の働く姿を見るなどの経験（「親の職業に触れる機会」）もしており、現希望職をめぐり情報の得やすさや就労のイメージのしやすさとして影響を受けていたことが考えられる。また、親のサポートについて後述するが、「現希望職を知る、意識する」という経験から「現希望職を選択する」までには、そもそも現希望職を知ったきっかけに親の存在が大きく役割を果たしており、また現希望職を検討する段階においては親から雇用状況や資格の強さといった具体的な「助言」や職業に関して親と話す「対話」などが目立った。また、進路について漠然としていた頃から一貫して親の態度は自分の進路は自分で選ぶこと、子どもがやりたいことを尊重する「自主性の尊重」があった。

Table5-4 漠然としていた進路から高校卒業が近づき現希望職を知り、選択した（直前決定型）4名の語り

	語り
漠然とした将来	「最終的には絵が描ければいいかと思って。漠然となんか」（女子B・父：会社員，母：他医療職）
	「高校入った頃は、早いところ就職して、金ためて遊ぶみたい」（男子J・父：他医療職，母：会社員）
	「（将来は）全く考えてなかったです。（その時）やりたいことをやりました」（男子L・父：製造自営業，母：他医療職）
	「何になりたいとかも全然思っていなかった」（男子M・父：飲食店経営，母：他医療職）
卒業が近づき、将来の職業を考え始める	「私は遅かったんです（高2の終わり頃）。友達は高校入る時点でなりたいて思っているものがある子もいたり」（女子B）
	「なにやろっかなって（高2の終わり頃）」（男子J）
	「高校3年になって、うん」（男子L）
	「高校3年生になってから」（男子M）
親との会話から知る	「（看護師の）母が知っていて。高校3年ころ。それ以前は知らなかったです。癌センターで働いていて、そういう職業があるよと聞いて、興味がわいてって感じですかね」（女子B）
現希望職を知る，意識する	「（父親と）どんな職業に就きたいかみたいな話をしていた。一略一そしたら、ものつくって人を幸せにしたいというのが、」（父親から）そういえば、ああいう人たち（現希望職従事者）興味ない？みたいな話になって。あ、ちょっと興味あるかもみたいな」（男子J）
以前、親と行った専門学校の思い出	「母さんに連れられて行って。専門学校展に1年生の時に行ってそういう仕事があるんだって知って。一略一その時は、別に何も思わずに聞いていましたね（すべての学校、職業に対して）一略一三年生の時にふと思い出して、」（その学校行って（現希望職）になったら、就職はできるなあと思っというのを3年生の時に」（男子L）
親から複数の医療職の紹介されて知る	「母さんが看護師をしていて、高校3年の夏に（現希望職）と歯科技工士と臨床工学のオープンキャンパス進められて、行って」（男子M）
現希望職を検討する	「興味がわいて、調べて、」（自分のやりたいことだけやればいいかっていうふうには考えられないっていうか。ちゃんと安定できる職業につきたいのは大きい、）「職業にするってなった時に、多く必要とされている」（好きなものづくりが出来て、人の役に立つ仕事」（女子B）
	「かっこいいんですよ。義足とかパーツをドライバー一つで調節している、」（人としゃべるのが結構好きなんです。ものをつくるだけだったらラインでいいじゃないですか。でも人とかかわりたかったから」（男子J）
	「学校行くな就職を考えるじゃないですか。就職はと思ったので。そこだけはしっかり考えて。（誰かに言われたわけではなく）卒業したら就職しないとさすがに親に悪いなあ、」（ものづくりをしながら、人と接するような仕事がいいなあと思って」（男子L）
	「国籍とかも関係なく働ける。ちゃんと技術を持っていれば雇ってくれる。そういうのも結構参考にして、」（ものづくりが好きなんです、）「一番役に立てて面白そうなのは」（男子M）
現希望職を選択する	「高3の夏ごろ（には決めた）」（女子B）
	「高2の終わり（には決めた）」（男子J）
	「ここにしようと思って」（男子L）
	「自分で決めました（高3年の初め）」（男子M）

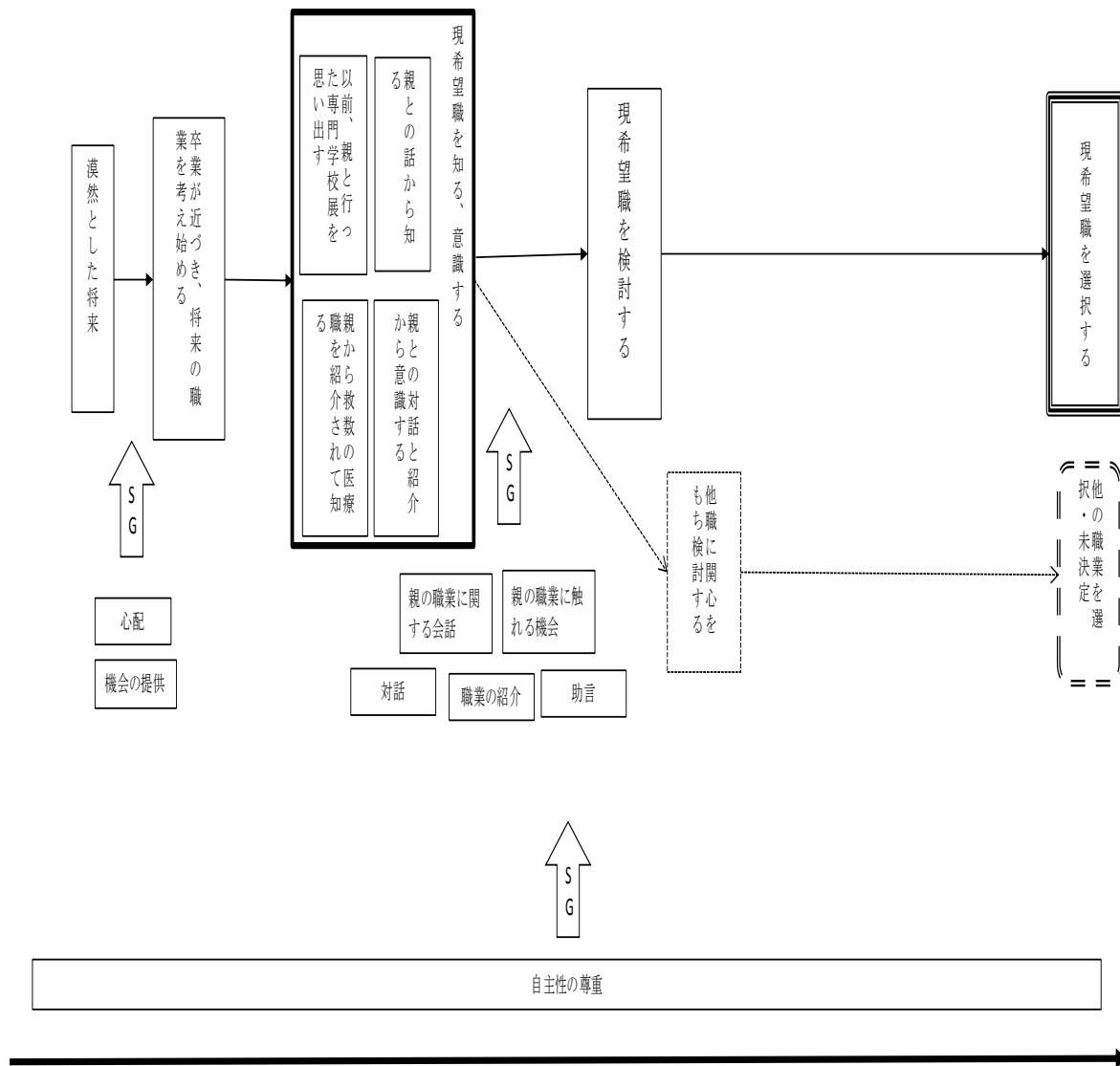


Figure5-1 直前決定の4名のTEM図

用いた概念ツール(安田・サトウ, 2012)

非可逆的時間：物理的時間ではなく、本人が生きてきた時間 → 経路：個人の行動や選択などの道 →

仮想経路：論理的には考えられるが歩まれなかった経路 → 仮想される経験：論理的には考えられるがされなかった経験

分岐点：その後の経路が複数に分かれる経験 等至点：ある定常状態に等しく辿りつくポイント

両極化した等至点：論理的には考えられるが辿りつかなかったポイント、収束点

社会的ガイド：等至点に近づくことを促進する力

<早期決定型>(2名)

この類型に分類された2名の語りをTable5-5に、語りから作成したTEM図をFigure5-2に示す。この2名は、中学生の頃に「他の希望職を調べる」中で、他の希望職に関する雑誌に載っていた、希望する職業についてパソコンで調べていたところ偶然、現希望職を発見したという

「他の希望職を調べる中で現希望職を知る」。それまでは現希望職の存在は知らず、現希望職を一目見て「おもしろそう、カッコいい」など魅力感じ、「現希望職に興味を持つ」。そして現希望職になることを考え始めた。しかし、「他の希望職を調べる中で現希望職を知る」ことがあったとしても、もともと持っていた希望職を自分の進路として追い求め、偶然知った現希望職には関心が少し生じた程度で終わったことも考えられる。しかし、2名は現希望職に関心を強く持ち、なりたいたいと思い、中学生の時点で現希望職の養成校学校を探すなどしており、高校進学ではその養成学校に入学に有利な科目を学べるような高校を選ぶなど「現希望職になれる学校を探す」。高校進学後は、オープンキャンパスなどや自身で職業を調べる中で、自分が抱いていたイメージと現実との違い、就職への迷いなど「憧れとの違いや迷い」を経験するが、憧れだけではなく現実の職業内容や職務要件、雇用状況も含め「現希望職を再検討する」上で、中学生の頃に抱いた思いを捨てず、「現希望職を選択する」というプロセスをたどっていた。親のサポートについて、青年が選んだ希望職に対する「心配」、進学をめぐり「経済的支援の表明」などの進学を決める直前にそのようなサポートが目立った。また、この2名についても一貫して親の態度は自分の進路は自分で選ぶこと、子どもがやりたいことを尊重する「自主性の尊重」があった。

Table5-5 中学生の頃から現希望職を希望していた（早期決定型）2名の語り

	語り
他の希望職について調べる	「昔から看護師」, 「将来どこの看護学校に行こうかなって」 (女子A・父: 会社員、母: 他医療職)
	「医療の仕事に就きたいと思って、なんとなく」, 「医療の仕事でいろいろしらべて」 (女子G・父: 製造自営業、母: 会社員)
他の希望職を調べる中で現希望職を知る	「看護学校の雑誌があつて。(現希望職) もあるよって隅っこに載っていて。一略一中三の夏に」, 「本当に短い(職業の説明)」 (女子A)
	「(医療職をPCで調べている時) たまたま見つけて、中学生2年生ぐらい」 (女子G)
現希望職に興味を持つ	「カッコいいと思って。金属で手を作るっていうのがカッコよかった」 (女子A)
	「こういう職業があるんだと思って興味をもってそれから、なんかいろいろ調べて」, 「調べていくうちに義足とか、義手にすごい興味を持って。カッコいいと思ったんですよ」, 「こういう職業に就きたい」 (女子G)
現希望職になれる学校を探す	「みつけて。(HPで現専門学校を知り) もの作るので、工業高校に行った方がいいのか迷って(自ら現専門学校に問い合わせた)」 (女子A職)
	「調べて、学校も調べて」 (女子G)
憧れとの違いや迷い	「(希望職に就いて知る中で想像では) キラキラしてるじゃないですか、(でも実際は) 生々しいぞ、大変そうだよ」 (女子A)
	「だんだん薄れて言っちゃうっていうか」, 「自分も就職でいいかと思った時期はあります。学費が高い。もう就職しちゃうかなって」 (女子G)
現希望職を再検討する	「カッコいいんですよ」, 「でも、やっぱりやりたいことやりたいなって思いましたね」「雇用面でも(よい)」 (女子A)
	「でも(なりたいたい)」, 「機械とかが金属とかすごいカッコいい。自分も作ってみたいと思いました」, 「(オープンキャンパス) どういう工程を踏んでいるとか知らなかったんでいい勉強になったと思います」 (女子G)
現希望職を選択する	「(現実を知っても) ブレなかったですね」, 「(中学から) なりたいたい」 (女子A)
	「高校3年の夏ごろ」 (女子G)

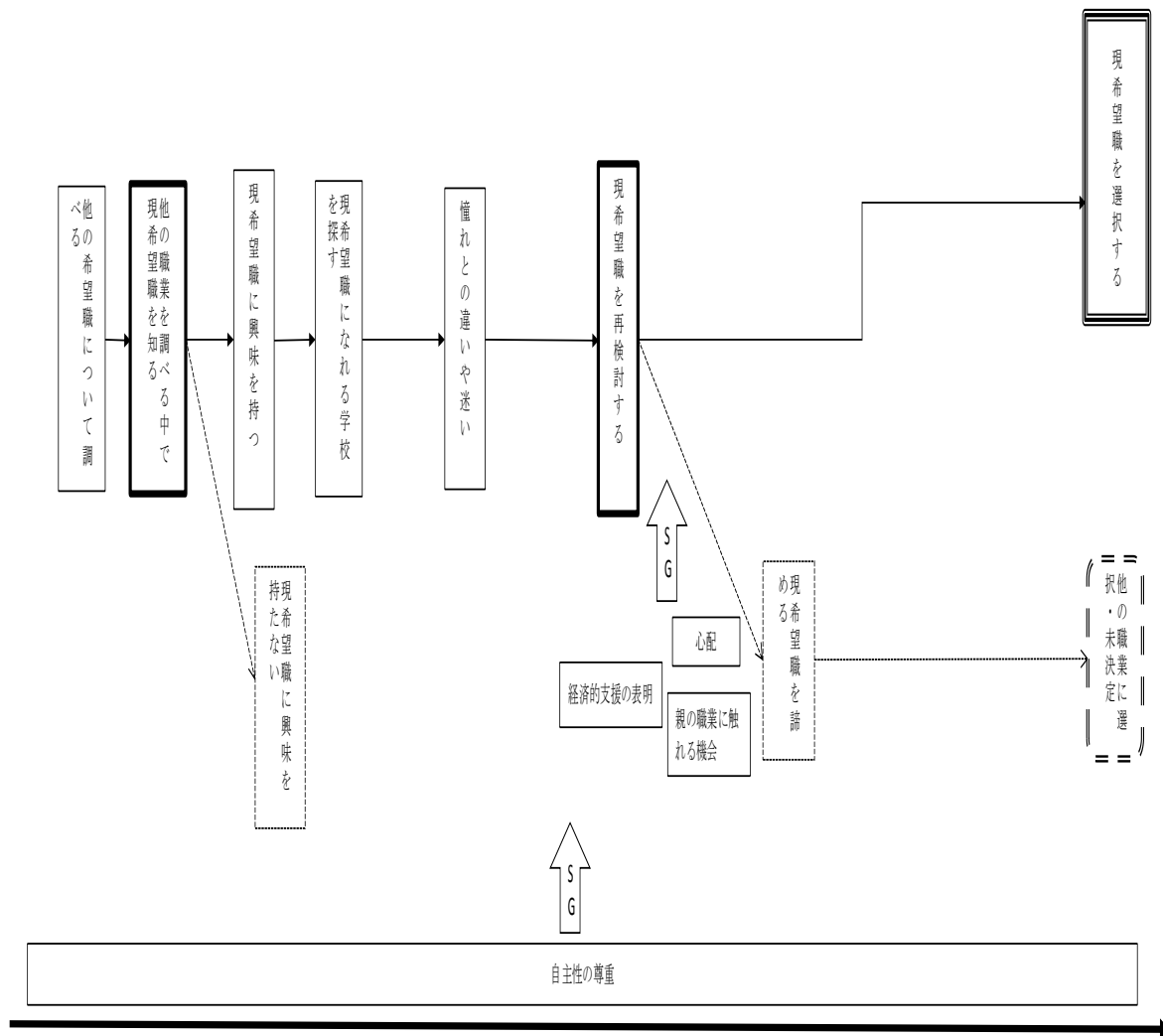


Figure5-2 早期決定型の2名のTEM図

用いた概念ツール(安田・サトウ, 2012)

非可逆的時間: 物理的時間ではなく、本人が生きてきた時間 → 経路: 個人の行動や選択などの道 →

仮想経路: 論理的には考えられるが歩まれなかった経路 → 仮想される経路: 論理的には考えられるがされなかった経路

分岐点: その後の経路が複数に分かれる経路 等至点: ある定常状態に等しく辿りつくポイント

両極化した等至点: 論理的には考えられるが辿りつかないポイント、収束点

社会的ガイド: 等至点に近づくことを促進する力

< 中途変更型 > (3 名)

この類型に分類された 3 名の語りを Table5-6 に、語りから作成した TEM 図を Figure5-3 に示す。この 3 名は中学生の頃から高校生にかけて他に希望していた職業があり、その職業について実習や職業体験など積極的に体験し「他の職業を希望、検討する」が、その中で希望していた職業の職業内容が希望と異なっていた、自分の関心や適性にあわないと感じるようになり、「希望していた職業への迷い、断念」を経験し、「他の職業を模索する」。その時、現希望職を「高校の授業から知る」、母親との日常会話で偶然現希望職が出てきて知るという「親との会話から知る」、受験情報誌を見ている時に偶然現希望職を知るという「受験情報誌から知る」といったきっかけで「現希望職を知る、意識する」ようになり、現希望職を調べるうちに関心が高まり、自分の関心や適性、仕事内容や雇用条件など含めて「現希望職について検討する」ようになった。前希望職を自身の体質から断念しなければならなかった 1 名を除き、その他 2 名は現希望職への魅力が高まり、具体的に自分の進路の一つとして検討しながらも、以前の希望職も捨てきれず、「現希望職か他の職業か迷う」ものの、最終的には自身の関心や適性、仕事内容や雇用状況を検討し、時に周囲の意見も聞きながら、「現希望職を選択する」に至っていた。また、この 3 名について、親からのサポートとして、現希望職を検討する、他職との間で迷いを経験している時、雇用状況など具体的な「助言」、「経済的支援の表明」などの親のサポートが目立った。また、彼らについても進路について一貫して親の態度は自分の進路は自分で選ぶこと、子どもがやりたいことを尊重する「自主性の尊重」があった。

Table5-6 他の希望職との迷いや挫折を経験し、選択した（中途変更型）3名の語り

	語り
他の職業を志望，検討する	「保育士になりたいくて」，「保育園実習をしたくて高校に入って，保育を高校でいろいろ体験してみて（授業や保育関連のボランティア）」（女子C・父：会社員、母：専業主婦）
	「看護を志望していて」，「オープンキャンパスも全部看護の方に行つて。模試も看護で全部受けて」，「実習とかも」（女子E・父：会社員、母：他医療職）
	「曾祖母ちゃんとかの世話とかしてて，介護（に関心があった）」，「地元の老人ホームのデイって見て，実際やったりとか（高校の職業体験で）」（男子K・父：会社員、母：会社員）
希望していた職業への迷い，断念	「最後この保育実習（高校2年生の冬）で自分は向いているか確かめようと思って挑んだら，なんか違うのかもしれないって。やっぱり向いていないのかなって感じて」，「給料も安い」（女子C）
	「手荒れがひどくて，消毒液負けしちゃう。看護体験行くうちに，あ，もう無理だと思ったのが高三の夏休み初めの頃で」（女子E）
	「世話するのは好きなんだけどそれずっとはちょっときついなぁと思って」，「仕事になったら，（介護士は仕事としても雇用面でも）ちょっと，厳しいっすよね」（男子K）
他の職業を模索する	「すごいいろいろ考えて」（女子C）
	「医療系には行きたかったんで，じゃあ医療系で何か出来ること無いかぁって探して」（女子E）
	「社会福祉士も考えて調べると，デスクワークみたいなのが主で。自分体動かすのが好きなんでそういうのちょっと窮屈かなぁと思って」，「作業療法は，患者様が主でそれを見守るみたいな感じ。多分眠くなるなぁと思って」（男子K）
現希望職を知る，意識する	高校の授業から知る 「高校で福祉とかの勉強をしていて，現希望職のことを知って」（女子C）
	親との会話から知る 「母親が看護師でもともと聞いていて」（女子E）
	受験情報誌から知る 「全国模試とかのいろんな大学，専門の医療系の表で探したら，その仕事見つけて。なんやろ，みたいになって」（男子K）
現希望職について検討する	「調べていく中で，自分ものづくり好きだし，こういうのいいかなぁって思って」（女子C）
	「ネットとかで調べて，オープンキャンパスも見つけて」，「足がないじゃないですか，お前に何がわかるって怒られたりってう話を聞いて，その時どんな対応自分だったらできるんだろう」（女子E）
	「ネットとかで調べて」，「作るじゃないですか。もともと，そういうの好きだったっていうのが」（男子K）
現希望職か他の職業か迷う	「すごい悩んでいて。両方とも向いてないのかな，でもこのどっちかしかないなぁといろいろ考えていました」，「保育士か（現希望職）に向いてるか周りの人に聞きまくったんですよ，私ってどっちに合ってますって。そしたらみんな両方とも会うよって，人にはあんまりたよっちゃいかなあって」（女子C）
	「作業（療法士養成の大学）でしようがないかみたいで決めてたんすよ。でも，ちょっと半身，納得いかないよなぁって感じで。これでいいのかなぁ，みたいな」（男子K）
現希望職を選択する	「モノ作りが好きだし，興味を持ってやりたい」，「あと給料とかも，そういうところも考えて」，「高3の夏ごろ（に決めた）」（女子C）
	「医療職につきたかったのでもう，ここにしよう」「（夏休み中に学校の教師に）こうこう言って進路変えます」（女子E）
	「ものづくり系はもともと好きな方で」，「作業はなあなみたいな感じで来たじゃないですか。で，（現希望職について学ぶことが）楽しそうやなぁと思ったんで，もうここで」（男子K）

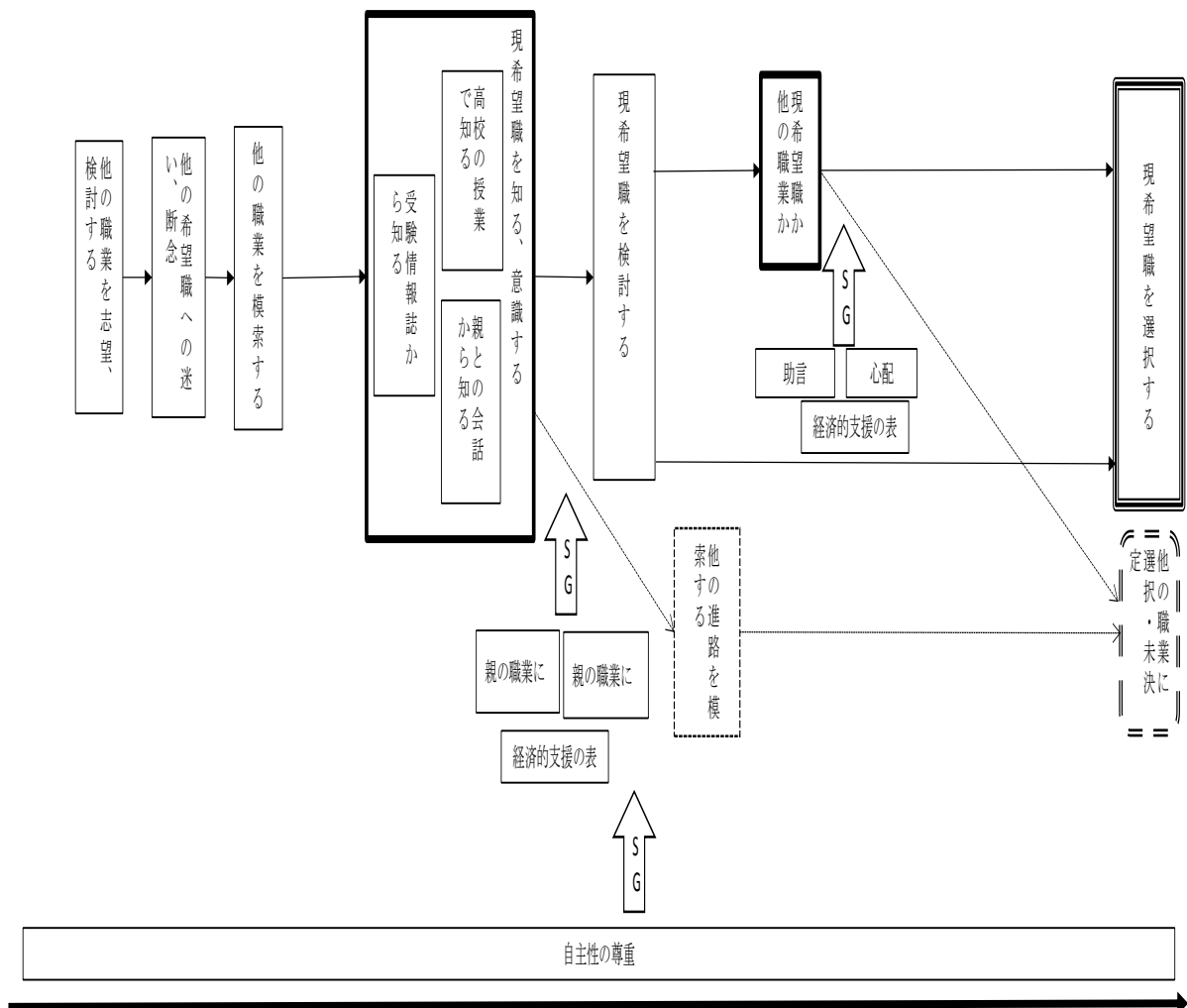


Figure5-3 中途変更型の3名のTEM図

用いた概念ツール(安田・サトウ, 2012)

非可逆的時間: 物理的時間ではなく、本人が生きてきた時間 → 経路: 個人の行動や選択などの道 →

仮想経路: 論理的には考えられるが歩まれなかった経路 → 仮想される経験: 論理的には考えられるがされなかった経験

分岐点: その後の経路が複数に分かれる経路 等至点: ある定常状態に等しく辿りつくポイント

両極化した等至点: 論理的には考えられるが辿りつかなかったポイント、収束点

社会的ガイド: 等至点に近づくことを促進する力

5.3.2 親のサポート

今回、インタビュー協力の募集時には親の職業については触れていないにもかかわらず、Table5-1のように、学生と同じ職業に就いている親、両親ともに医療職という学生はいなかったが、9名中6名の学生は父親、母親のどちらかの親が医療職であった。しかし、親自身の職業を子どもに勧めるというかわりほどの協力者においても見られなかった。

青年の進路選択に影響を及ぼしたと考えられる親のサポート Table5-7 に示す。親のサポートについて、青年の進路の選択、決定を促すという意図、親がどの程度動くかという積極性により違いがあった。子どもの進路選択を促進しようという意図的な関わりではなく、日常生活において何気なく行われている親自身の職業に関する会話や、親の職場に行き、働く姿に触れた経験が、協力者が現希望職を選択することのきっかけ、職業に関する情報の得やすさや選択する際の基準や視点、従業イメージをさせやすくするなどしており、現希望職を決定することに促進的な役割を果たしていた。特に、「直前決定型」では、漠然と進路について考えていた時、親との会話から現希望職を知る、触れるのをきっかけに現希望職を自分の進路の選択肢の一つとして考えるようになった者が目立つ。親の職場に行き、親の働く姿を見る、親の職場でさまざまな職業人や物などに触れるなどの経験（「親の職業に触れる機会」）、親が自身の職業、職場でのことを家庭で話す（「親の職業に関する会話」）といったやりとりは、幼少期から現在まで日常生活の中で自然に行われており、親に子どもの進路選択を促進させるなど教育的かわりという意図はなかったように思われるが、子どもにとってはそのような経験は進路選択において重要な経験として蓄積されていたことが考えられる。

Table5-7 親のサポート

	語り
対話	「将来どうしよっかなあって（母親に）話してて。そうしたら、手に職が大事だよって。確かになあ」（女子B・父：会社員、母：他医療職）
	「保育師と〇〇迷ってるんだって話してて、母に。そしたら、母は保育士はこうこうこうだよ（雇用面について）、〇〇の方はこうだよ、というアドバイスを」（女子C・父：会社員、母：専業主婦）
	「どんな職業に就きたいかみたいな話を父親と話してて。そしたら、ものを作って幸せにしたいっていうのが（自分の中に）あって（ということがわかってきた）」（男子J・父：他医療職、母：会社員）
助言	「絶対に職つけなよ、そしたら何しようと子供産もうと大丈夫だからって母が言ってる」（女子B）
	「プライベート仕事をちゃんと区別できないのは…（勧めない）、母はそういうアドバイスを」（女子C）
心配	「そんなよくわからん職業は（大丈夫なのか）って」（女子A・父：会社員、母：他医療職）
	「大変そうやけど大丈夫か、みたいな」（女子C）
	「自分が考えなさ過ぎてちょっと心配したらしくて（その後専門学校展に連れて行った）」（男子L・父：製造自営業、母：他医療職）
経済的支援の表明	「学費でお金がかかる義肢装具士になっていいのかなあと。でも、（母から）あきらめないでとも言われて」（女子C）
	「これでがんばりなさいって通帳渡さされて」（女子E・父：会社員、母：他医療職）
	「（学費が高いことを気にしていたが）母にもせっかくだから学校行ったらって言われたんで」（女子G・父：製造自営業、母：会社員）
機会の提供	「自分が（将来のことを）何も考えなくて心配したらしくて、専門学校展は、母親に行くぞって言われて連れられて行って」（男子L）
職業の紹介	「〇〇と歯科技工士と臨床工学士のオープンキャンパスを勧められて」、「（母親が）知っていて、その3つ（の職業）。何があるか分らなかったし、何になりたいとかもなかったんで、とりあえず親が知っている範囲でいってみようっていう感じ」（男子M・父：飲食店経営、母：他医療職）
	「（父親から）そういえば、ああいう人たちが興味ない？みたいな話になって。あ、ちょっと興味あるかもみたいな」（男子J）
自主性の尊重	「やりたいならいいんじゃないって言ってくれたので」（女子A）
	「うちはやりたいものをやらせてくれるって感じなので小さい頃から。〇〇に進めた時、資料出した時もやりたいときはやればいいんじゃない」（女子E）
	「自分好きなようにやって、自分の好きなように生きてきて、なんか文句言われたこととかなくて。そういう面では、すごい、親には感謝してます。」（女子G）
	「親は自分がやりたいことをやればいいかなあっていう。好きなようにやらしてくれる」（男子J）
	「高校3の時、進路考えるってなった時に店継ごうかって聞いたら、そんなこと考えなくていいから、自分の好きなようにやっていいよって」（男子L）
	「自分の好きなやつを選びなさいという感じ」（男子M）
親の職業に関する会話	「母が看護師で—略—癌センターで働いていて、ガンだと切断する方がいらっしやるってそういう話を聞いていて」（女子B）
	「母親が看護師で、もともと聞いていて。リハビリの方で一時期働いていたみたいで」（女子E）
	「けっこうしゃべるんで（仕事のこと）（男子J）」
親の職業に触れる機会	「母が看護師だったので、母がやってるから私もやるみたいな感じで、なんかやってみたいなあとか」（女子A）
	「昔からよく（母が働く）ディサービスセンター行ってたんで。そこで医療器具とかは見たことはありました。近所だったんで遊びに行ったりとか」（女子E）
	「父が建築の仕事をしていて、（自分も）もともとものを作るのとかすごい好きで」（女子G）
	「父が理学療法士で病院についてたりとかしてて、そんな時に〇〇さんがいらっしやって」、「父の仕事柄、小さいころから周りに障害があった人多かったんで。切断者の方、寝たきりの人とか、聾の子とかいたんで。普通に仲良く」（男子J）
	「家に道具とかいっぱいあったんで、釘とかのこぎりとかで作ってたりはしてたんで。ものづくり系はもともと好きな方でしたね。〇〇も作るじゃないですか、そういうのでは影響されたのがありますけどね」（男子K・父：会社員、母：会社員・同居祖父：製造業）
	「お父さんの仕事見てましたし。工具がたくさんあって。（工具を扱う仕事に）ちょっと興味はありました」、「人にたずさわってけるような職業がいいなあっていうのは考えてました。それは多分お母さんだと思いますね。お母さん看護師で時々迎えにいくのについていって、お母さんが働いているのをたまに見てたりしたんで」（男子L）

親の職業に関する会話

女子 B（直前決定型・父：会社員，母：他医療職）：「母が看護師で 一略— 癌センターで働いていて、ガンだと切断する方がいらっしゃるってそういう話を聞いていて」

女子 B はデザイン系の仕事をしたいという漠然とした将来像はあったものの、どのような領域で働くのか、具体的な職業名までは出ずに漠然としていた。卒業が近づき、将来どのような進路に進もうか考えていた時に、以前の母親との会話を思い出し、そこで出てきた現希望職を調べ、関心をもち始めた。それが、現希望職の決定に至るきっかけとなっていた。

女子 E（中途変更型・父：会社員，母：他医療職）：「母親が看護師で、もともと聞いていて。リハビリの方で一時期働いていたみたいで」

女子 E はもともと他の医療職を希望していたが、その進路を断念しなければならず、他の進路を考えなければならなくなった時、以前、母親から聞いた職場の話の中に登場した現希望職を思い出し、自ら関心をもち、調べはじめた。

親の職業に触れる機会

女子 E（中途変更型・父：会社員，母：他医療職）：「昔からよく（母が働く）ディサービスセンター行ってたんで。そこで医療器具とかは見たことはありました。近所だったんで遊びに行ったりとか」

女子 E は現希望職を考える以前から現希望職を知っており、しかし当時は他の職業を希望していたため関心をもたなかったが、自分の進路を考え始めた時、当時のことを思い出し、関心をもち、調べ始めた。

男子 J（直前決定型・父：他医療職，母：会社員）：「父が理学療法士で病院ついてたりとかしてて、そんな時に（現希望職従事者）さんがいらっしゃって」，「父の仕事柄、小さいころから周りに障害をアット人多かったんで。切断者の方、寝たきりの人とか、聾の子とかいたんで。普通に仲良く」

男子 J は父親が医療職であり、幼いころから父親の職場に行き医療職や障害者と交流があり、また現希望職に従事する者も目にしていた。しかし、自分が実際に進路を選択しなければならぬ時期になるまでは自分の進路として意識はされていなかった。しかし、これまでの父親の職場

での経験や父親との対話を通じ、自分の関心や興味が整理され、自分の関心のあることについて明確になっていき、現希望職が自分の進路の一つとして意識されるようになった。

男子 L（直前決定型・父：製造自営業，母：他医療職）：「お父さんの仕事見ましたし。工具がたくさんあって。（工具を扱う仕事に）ちょっと興味はありました」，「人にたずさわってけるような職業がいいなあっていうのは考えてました。それは多分お母さんだと思いますね。お母さん看護師で時々迎えにいくのについていって，お母さんが働いているのをたまに見てたりしたんで」

男子 L は将来について漠然としていたが、漠然としている中でも働く父親，母親を見て、漠然とではあるが働くということにイメージを持っており、そのイメージに沿う職業を選んでいる。これらの語りにあるように、親が働いてる姿や親の職場で医療職に関わる人々や医療器具に触れる機会があり、働くことのイメージのしやすさが形成されていたと思われる。

また、親のサポートとして、現希望職を検討している段階において、職業を選ぶ際の基準に関するアドバイスや雇用状況など具体的な「助言」，希望している職業に就くために必要な教育機関への入学，授業料について経済的支援を言葉で話す「経済的支援の表明」があった。

助言

女子 B（直前決定型・父：会社員，母：他医療職）：「“絶対手に職つけなよ，手に職が大事だよ。そしたら何しようとして子ども産もうと大丈夫だから” って母が言ってて，確かになとか」

将来の進路について考えていた当時，特に現希望職に限ったことではないが母親からこのようなアドバイスを受け，B の中で進路を選択していく際の一つの視点として取り入れられていた。

女子 C（途中変更型・父：会社員，母：専業主婦）：「プライベート仕事をちゃんと区別できないのは…（勧めない）。母はそういうアドバイスを（C）」

現希望職と他職との間で迷いを感じていた C は母親に助言を仰いだところ，そのようなアドバイスを得ており，彼女も職業を考える上での一つの視点として取り入れられていた。

経済的支援の表明

女子 C（途中変更型・父：会社員，母：専業主婦）：「学費でお金がかかる現希望職になっていいのかなあと。でも、（母から）あきらめないでとも言われて」

女子 G（早期決定型・父：製造自営業，母：会社員）：「（学費が高いことを気にしていたが）母にもせっかくだから学校行ったらって言われたんで」

青年自身が家庭の事情から進学にかかる経済的負担を懸念してそれを親に告げた際、このように親は経済的な支援を表明していた。

また、親から比較的意図的、積極的なものとして、子どもの将来について対する懸念を示す「心配」、漠然としている将来について親と話す「対話」、親が子どもにあっていそうな特定の職業をいくつか勧めるといった「職業の紹介」、専門学校展といった将来の職業の意識が高まるイベントに連れて行くといった「機会の提供」というものもみられた。

心配

女子 A（早期決定型・父：会社員，母：他医療職）：「そんなよくわからん職業は（大丈夫なのか）って」

女子 C（途中変更型・父：会社員，母：専業主婦）：「大変そうやけど大丈夫か、みたいな」

女子 A と C の心配は、自分の進路について十分に考えていないから、向き合っていないからというものではなく、子どもが既に決めた職業を聞いて、その道でやっていけるのか懸念であり、反対ではなく、そこには子どもの自主性を尊重する態度があり、両者とも気にかけてくれていたという肯定的なとらえ方をされていた。

男子 L（直前決定型・父：製造自営業，母：他医療職）：「自分が考えなさ過ぎてちょっと心配したらしくて（その後専門学校展に連れて行った(L)」

という語りにあるように、子どもが自分の進路について考えていないので親がその機会を与えるという積極的な行動に結びつく心配もあった。親が心配を示すことは子どもにとって時にプレッシャー、自分の考えている進路への自信を失うといった阻害的な働きも考えられるが、今回の

インタビュー協力者は心配を自分のことを気にかけてくれているというポジティブな受け取りをしていた。そのため、今回は当該進路を選択することを促進させるサポートとして位置づけている。

対話

男子 J（直前決定型・父：他医療職，母：会社員）：「どんな職業に就きたいかみたいな話を父親と話していて。そうしたら，ものつくって人を幸せにしたいっていうのがずっとあったので，それだったら一番近いのこれじゃないかみたいな感じで出てきた」

男子 J は将来について漠然としており，周囲に就職する者も多かったことから就職することも考えていたが，進路を決めなければならない時期が近づき，日常会話の中で父親と話し，その中で自分の興味や関心や希望する職業などが明確になっていった。

職業の紹介

男子 M（直前決定型・父：飲食店経営，母：他医療職）：「（母親から）〇〇と歯科技工士と臨床工学士のオープンキャンパスを勧められて」，「（母親が）知っていて，その 3 つ（の職業）。何があるか分らなかったし，何になりたいとかもなかったので，とりあえず親が知っている範囲でいってみようっていう感じ」

男子 M も将来について漠然としており，特に気になる職業もなかったせいか，母親から 3 つの職業を紹介されるという積極的なかわりをきっかけにそのすすめられた 3 つの職業を調べ始め，自分の関心と最も合う現希望職の選択，決定に至っている。彼は母親からの勧めを肯定的に受け入れている。母親がなぜその 3 つの職業を勧めたのか理由は告げられていなかったが，彼自身は母親が自分の関心と関連しており，かつ国家資格として安定しているなど自分の将来を思っていることではないかと推測している。

機会の提供

男子 L（直前決定型・父：製造自営業，母：他医療職）：「高校一年生の専門校展に。母親に行くぞって言われて連れられて行って」

彼は専門学校展に母親と行った高校一年生の当時、将来について全く考えておらず、それを心配した母親からの行動を伴う積極的なかわりを受けている。しかし、当時は彼自身に将来についての関心が薄く、「ああ、そうなんだって感じで」とあまり印象的な出来事としてとらえられていなかったが、実際に進路を考えなければならぬ時期になり当時のことを思い出し、専門学校展で出会った現進学先を検討するようになった。

最後に、全ての協力者に共通して見られたのは、自分の進路は自分で選ぶ、子どもの将来の職業に対して子どものやりたいこと、子どもの判断に任せるといった「自主性の尊重」といった親のありようがあった。職業の紹介や機会の提供など親の比較的積極的なかわりがあっても、このような態度が強く子どもに認識されていたため、プレッシャーや過干渉といった否定的なとらえ方をせずに子どもに受け入れられていたと考えられる。

自主性の尊重

女子 G（早期決定型・父：製造自営業，母：会社員）：「自分好きなようにやって、自分の好きなように生きてきて、なんか文句言われたこととかなくて。そういう面では、すごい、親には感謝してます」

女子 E（中途変更型・父：会社員，母：他医療職）：「うちはやりたいものをやらせてくれるって感じなので小さい頃から。現希望職に進めた時、資料出した時もやりたいときはやればいいんじゃない」

男子 J（直前決定型・父：他医療職，母：会社員）：「親は、自分がやりたいことをやればいいかなあっていう。好きなようにやらしてくれる」，

男子 L（直前決定型・父：製造自営業，母：他医療職）：「高校3の時、進路考えるってなった時に店継ごうかって聞いたら、そんなこと考えなくていいから、自分の好きなようにやっていいよって」

5.4 考察

5.4.1 現希望職の選択、決定のプロセス

本調査は高校生という比較的早い段階で特定の職業を決定し、そのための専門学校に進学した学生を対象としたインタビュー調査により、日常生活の中で行われてきた親からのサポートの累積を全体的に検討することを目的として質的研究を行った。学生の語りから、現希望職を選択し、決定に至るまでのプロセスを踏まえ上で、親のサポートについて検討する。

まず、協力者の語りから、現希望職に決定するまでのプロセスは個々で異なるものの、本田・落合（2005）の類型である「直前決定型」、「早期決定型」、「中途変更型」の3つのプロセスに分けることができた。「直前決定型」は、将来の職業について漠然としていたが、卒業後の進路を考える時期になって現希望職を知る、また意識し、調べた結果、自分の求めている仕事内容や雇用条件が合い、現希望職を選択していた。「早期決定型」は、中学生の頃から現希望職を志し、その後高校生になり、憧れていた職業についてさらに情報を得て、憧れと現実とのギャップなどで心が揺らぐこともあったが、思いを捨てずに現希望職を選択した。「中途変更型」は、それまで何らかの他の職業に関心、その職業に就きたいという思いがあり、勉強などに励んでいたが、その中で希望職に対する思いが揺らぐ、断念を経験し、ではその他にどのような職業があるか模索していた時、現希望職を知り、検討し、選択したというプロセスである。また、協力者である学生は全員、高卒後の進路について、どの学校に進学するかではなく、どのような職業に就くかという視点から卒業後の進路を考えていた。山中・安達（2009）は医療系専攻学生にとって、専門分野への興味、専門職への志望という入学動機の高さが入学後の学習適応において重要であると指摘している。本調査では現在の学習態度や決定した進路に対する自信などについての客観的なデータは得られていないが、専門学校に入学して半年後のインタビュー時、すべての協力者が自分の意志で現在の希望職を決定し、進学したと語っており、それに迷いや後悔はなく、現希望職としての将来展望も述べる者もいた。本多・落合（2006）は進路を自分の意志で決定したことが自分の進路に対する自信において重要であると指摘している。専門学校の入学において専門分野への興味やその専門学校卒業後の職業への志望、また進学において自ら進学したという意思是、進学後の適応において重要であると考えられる。

5.4.2 進路選択に関する親のサポート

本調査からは、幼少期から親の職業について話を聞く、職場に行くなどの経験が、親の職業を中心とした職業に触れる機会、情報、就労イメージのしやすさ、職業を選ぶ際に考える基準や視点を培っており、時に現希望職を選択するきっかけとなっていた。親の職場に行く、親の職業に就いての会話をした時には特に自分の職業の選択肢として意識されなかったものの、進路を決めなければならない時期にその経験を思い出し、現希望職に就いて調べ始めたという協力者は、

「直前決定型」の協力者である高校卒業後の進路について卒業が近くなってくるまで将来について漠然としていた協力者に多かった。その他の型の協力者についても、このような日常的な親の職業に関する親子のかかわりは、親の職業領域に関する親しみや情報の得やすさ、働くことに対するイメージの形成につながっており、親と同じ職業領域の現希望職の選択に影響を及ぼしていた。

他方で、現希望職を含めていくつかの職業を紹介する、専門学校展などに進路について考えるイベントなどを体験させる、進路について対話するといった、比較的親が積極的に働きかけ、それが現希望職を知る、意識するきっかけとなっていた学生もいたが、そのような比較的積極的な親のサポートを受けていた学生は少数であった。そして、そのようなかかわりを青年は肯定的に受け止めていた。また、現希望職を具体的に検討する段階においては、子どもが自ら親に対して助言を求める、経済的な面で懸念を示すといった青年から親に対して働きかけるという場合もあった。本調査においては既に医療系専門学校在籍中の学生を対象として回想してもらい、親のサポートに対してポジティブなものが思い出されがちとなった。ネガティブな側面についてあまり語られず、その要因として、本人自身の回想であったため、また協力者は現在の学校生活に適応しており、希望職に対しても将来の展望を持ち意欲的に勉学に励んでいたため、ネガティブな想いが喚起されにくかった可能性がある。しかし、青年期は、「脱衛星」の時期であり、親に対する反発心も抱きやすく、進路選択をめぐる親と衝突する場合も少なくない。中條(2012)でも進路をめぐる親子が対立する、親が決めた特定の進路を真剣に検討せずにそれに従う高校生の事例が報告されている。しかし、親との討論などを通じてアイデンティティ形成が促進される面がある(高橋, 2008; 2009)。進路選択をめぐる親との衝突や本人の意思とは異なる親の期待など、今後はそのような点について検討する必要がある。

そして、全協力者が共通して語っていた親のサポートとして、親が自分のやりたいこと、希望を尊重してくれるという「自主性の尊重」があり、そのような親のありようが、青年に自分が決めたという感覚、やや積極的なサポートなども肯定的に受け入れられていた可能性がある。

今回は医療系専門機関に進学した者を対象に調査を行い、この知見を一般化するには限界がある。特定の専門職ではなく会社員など、住職分離の現代の社会において親の働く姿が見えにくい家庭において、子どもはどのようなかかわりや言動から親の職業に触れ、自身の進路選択とどのように影響するのか、親のサポートについて検討していくことが今後必要である。

以上、本調査からは、進路選択における親のサポートとして、親が自分自身の職業について話す、働く姿や職場を見せるといった日常生活の中での何気ないかかわりが、親が従事する職業領域に関する情報の得やすさ、親が従事する職業領域への親しみ、就業イメージの形成のしやすさに影響を与え、それが親と類似した職業領域への進路選択に関連していた。しかし、その影響は、親側には子どもの進路選択を促進させようという意図はなく、普段の日常生活の中で何気なく行っていたことであり、子どももそのような親の行動を日常生活の中の“普通のこと”として自分の進路選択を真剣に考え、選択するまでは特別意識していたことではなかった。しかし、それらの経験は子どもの中に蓄積され、子どもが具体的に進路を選択しなければならない時期になり促進的に働くことが示唆された。また、両者にとってサポートの意識があったものには、親からの助言や経済的支援の表明といった具体的なサポートがあった。また、自分の進路は自分で選ぶ、やりたいことをやらせてもらえるという自分の希望を尊重してもらえるという親の態度は、青年が主体的に進路選択に取り組むことを可能にさせており、その重要性が明らかにされた。

第6章 総合考察

6.1 本研究で得られた知見

本研究においては、進路選択という課題に直面し、心理的に大きく成長する重要な時期である青年期において、主要なサポート源であり、かつ最も身近な働くモデルである親からのサポートと青年の進路選択との関連についてさまざまな角度から検討した。

まず、第1章においては、親のサポートと青年期の進路選択との関連について国内外の先行研究を概観した。先行研究において親のサポートは進路選択に関する自己効力を媒介として青年の進路選択行動に促進的な関連を及ぼす示唆が得られている(松田・前田, 2007 ; Nota et al., 2007 ; Restubog et al., 2010)。国内においては、ソーシャル・サポートに関する研究、青年の進路選択に関する研究それぞれについては活発になされてきたが、親のサポートと青年期の進路選択との関連を検討した研究は少ない。しかし、養育態度やコミュニケーション、継承行為などの点から検討されており、親自身の職業態度が好ましいものであり、自律的な養育態度や進路選択をめぐる相手の意見を聞きながらも自身の意見を主張し、調整していくような親子間のコミュニケーションの重要性が指摘されてきた。それらの知見も活かしながら進路選択を促進する親のサポートを検討していくことの必要性を指摘した。

それらを踏まえて第2章においては、進路選択に関する親のサポートの基礎的知見を得るために、まずそもそも進路選択をめぐる青年はどの程度親から進路選択に関する親のサポートを受けているのか、中学生、高校生、大学生を対象とした横断的比較検討を行った。その結果、中学生と高校生の方が大学生よりも、親から励ましや言葉によるポジティブな感情の喚起といった情緒的なサポート、また親の職業経験について話すといったかかわりを多く受けていた。中学生と高校生の進路選択は、主に上級学校への移行であるが、大学生の進路選択は学校から職業という移行であり、進路選択の内容に違いがある。さらに、青年期における（親が子を）守る関係から見守る関係への親子関係の変化(落合・佐藤, 1996)という視点も含め考えると、中学生・高校生と大学生との間では、親からのサポートの量が減少するのに加えて、一歩引いて見守るサポートの変化といった質的な相違もあるのではないかと示唆された。そこで、高校生と大学生それぞれについて、より詳細な調査研究を行うことにした。

第3章においては高校生に焦点を当て、親のサポートと進路選択と関連を検討した。その結果、励ましやポジティブな感情の喚起といった親の情緒的なサポートは進路選択に関する行動に直接関連は示さないものの、進路選択に関する自己効力を介して促進的な影響を及ぼす示唆が得られた。これは、先行研究(Nota et al., 2007 ; Restubog et al., 2010)から得られた知見と同様の結果である。情報や助言など道具的サポートの必要性も指摘されているが(中條, 2012 ; (社)全国高等学校PTA 連合会・(株)リクルート合同調査調べ, 2012), 励ましやポジティブな感情の喚起といった情緒的なサポートは、進路選択という重要な課題を前にした高校生にとって、自律的にその課題に取り組んでいくための精神的な支えになると考えられる。一方で、親の職業経験を話す、親の職場に連れていくなどの職業人としての親のかかわりは、進路関連変数との関連が示されなかった。しかし、第5章の高校生の時点で特定の進路を選択、決定した学生に対するインタビュー調査からは、日常生活の中で幼いころから触れてきた親の職業に関する会話、親の働く姿は、親の職業領域に関する職業に触れる機会の多さ、情報の得やすさや親しみ、就業イメージの形成につながっており、本人の関心や興味を中心として、親の職業領域と類似した職業を選択することを促進していた。このように、青年が進路を選択していく上で情緒的なサポート、職業人としての親の存在の重要性が示された。

そして、第4章においては学校から職業への移行を課題とする大学生を対象として、自分の進路選択に対する関心や自立性、計画性、そして精神的健康の程度により、求めるサポートはどのように異なるのか、ここでは親以外のサポート源も含めて検討を行った。その結果、進路をめぐり関心の高い学生は、情報や助言、意見といったサポートを友人や就職支援に関する大学スタッフに求めるが、将来展望が低く、進路について計画を立てることが難しい学生は、計画が立てられていない為に生じる焦り、不安といった面について、大学専門スタッフに情緒的なサポートを求めることが明らかにされた。さらに、精神的健康が低い学生は、職業の選択という重要な課題に取り組むことにおいて負担が大きく、情緒的なサポートを大学専門スタッフに求めている。大学生の進路選択においては親以外に友人や大学の進路支援部門の存在も大きく、大学の進路専門部門において学生の進路選択に関する状態や精神的健康の度合いなど個人のニーズに応じて内容の異なるサポートを提供することが重要である。

さらに、親のサポートが青年の進路選択のプロセスに与える影響について日常生活を含めて広

く全体的に検討するために、第 5 章ではインタビュー調査による質的調査を行った。親自身が社会の中で職業人としての役割を果たしている姿は、日常生活の中で自然な親の言動から子どもが感じ取る面が大きい。日常生活の中で親の職業について親が話す、職場に連れて行くといった幼少期からの体験が、子どもが親と類似した職業に関する情報の得やすさや親しみ、就労イメージのしやすさとして影響しており、また自分の職業を考えるきっかけともなっていた。その他にも、助言や経済的支援の表明といったサポートが存在する一方で、自分の進路は自分で選ぶ、やりたいことを尊重してもらえという親の態度の下、青年は自分の興味を中心としながら自らの意思である進路を選択していくということにつながっており、子どもの進路選択を信頼して任せるといった態度の重要性が明らかにされた。

6.2 青年の進路選択における親のサポートの役割

本研究の知見から明らかにされた青年の進路選択における親のサポートの役割、重要性について考察していきたい。進路選択は青年にとって重要な課題であり、過去の自分、現在の自分をふまえ、将来の自分が社会の中でどのような役割を担い、生きていくのかということを構築していく課題ともいえる。そのような課題に取り組むことは青年に必要なことであり、その課題を通じて人間として成長していくが、それは明確な一つの解が直ぐに出るような容易な課題ではなく、悩みながら前に進んでいくものであると考えられ、その中で周囲からの助言や励ましといったサポートが重要になる。本研究においては主要なサポート源であり、幼少期から目にしてきた最も身近な職業人である親という存在に注目し検討してきたが、どのような親のサポートが重要になるのだろうか。本研究の第 2 章の調査からは、親の励ましやポジティブな感情を喚起する言葉によるサポート、親の職業について話すといったかかわりは、中学生、高校生と大学生との間に差があることが示された。それらのサポートは大学生で減少するものの、第 4 章の大学生を対象とした調査から、大学生にとっても親は情緒的なサポート源であると共に、職業に関する情報、助言を有するサポート源でもあるとしてとらえられており、中学、高校、大学と青年期を通じて親はサポート源として存在していると言える。また、第 2 章の調査では、大学生よりも中学生、高

校生は、親と職業に関する会話を多く交わしていた。大学生は学校から職業への移行を目前にして、幼少期から、中学、高校時代における親との職業に関する会話を元に、自分が具体的に何らかの職業に就くため自分が活動する時期であると考えられる。第 5 章の専門学校生を対象としたインタビュー調査では、幼少期から日常生活の中で経験してきた親の職業に関する会話を聞いてきた経験が、自分が具体的に何らかの進路を選択、決定をしなければならない時期になり、重要な役割を持っていたことが明らかにされた。つまり、日常生活の中で親、子ども共に意識されず“普通のこと”としてやり取りされていた親の職業に関する会話や職業人としての親の姿を見聞きしてきたことが、子どもの職業イメージや親しみの形成に影響を及ぼしており、それらは進路を選択していく基準として子どもの中に取り入れられており、具体的に子どもが進路選択を行う段階になり、進路を選択していく際の視点や基準、就労イメージ、また特定の進路について検討していくきっかけになるなど重要な意味を持つようになってくる。親が意識的に自分の職業を活かして子どもの進路選択に促進的な働き、教訓的な言葉や意図的な働きかけをしなくとも、子どもは日常生活の中でなにげなくされる親の職業に関する会話や姿から、職業に対するイメージや情報、進路選択をしていく上で検討すべき自分の視点や基準などを培っていると考えられる。

さらに本研究の第 3 章では、高校生の進路選択において、親からの励ましや精神的な支え、ポジティブな感情の喚起といった情緒的サポートの重要性が明らかになった。しかし、そのような親のサポートは直接高校生の行動を促進するというよりも、高校生自身が自分の進路について、探索し、迷い、悩みながら模索していくことを可能にさせるための基礎的な土壌としての意味を持つと考えられる。第 5 章でも、どのような進路を選ぶのかは子どもに信頼して任せる、自主性を尊重するというサポートが子どもの進路選択において重要であることが明らかにされた。精神的に支えとなる存在がいる、どのような進路を選択していくかについて信頼されている、“自分が”やりたいことを尊重してもらえ親の存在があり、だからこそ自分が何をしたいのか真剣に進路について向き合い、進路選択に取り組むことを可能にさせているのではないだろうか。親は子どもの進路選択について～しなくてはならないと意図的にサポートを気負ってしなくとも、日常生活の中で子どもは親から職業についての姿勢や情報を吸収しており、また子どものことを信頼し、自主性を尊重するという態度を示すだけで十分に子どもの進路選択には促進的な影響を及ぼしていると考えられる。

6.3 本研究の限界と今後の課題

6.3.1 父親と母親としての特有の役割を含めたサポートについて

本研究では、父親と母親を区別せず親として一連の研究を行った。しかし、父親として、母親としての役割に注目し、子どもの進路選択に対するサポート内容や影響について検討していくという視点も必要である。例えば、女子青年については、女性特有のライフイベントと職業の関連が大きく、そのため同性の母親のアドバイスや生き方から得ることが多く、その影響も強いと考えられる。今後その点を踏まえて親からの進路選択に関するサポートについて検討していくことが必要である。

6.3.2 本研究から得られた知見の一般化の限界

本調査の対象者は、中学生については地方の中都市の公立中学に在籍する生徒、高校生は同じ地方の所謂進学校に在籍する生徒、大学生については地方の大都市および中都市の国立大学、私立大学に在籍する学生、インタビュー調査においては地方の大都市の医療系専門学校に在学する学生であり、それぞれ得られた知見を一般化することについては慎重にならねばならない。例えば、今回の対象者はいずれも親が子どもの進路選択に比較的関心が高く、協力的な集団だった点などである。海外の研究では、Leal-Muniz & Constantine(2005)や,Navarro et al., (2007) など社会的にマイノリティと言える特定の集団に焦点を当て、社会的に立場が弱いゆえに親というインフォーマルなサポートの重要性が明らかにされている。また、宮本（2005b）は移行の危機にある若者家族に対するアプローチとして、「成長過程における家族への支援と介入」、「親・家庭に代わる社会的支援」を提唱している。移行の危機にある若者の中には、幼いころから親の離婚、失業、病気などによる貧困、放任的な養育態度などの家庭の問題を抱えており、それが学校からのドロップアウト、希薄な職業意識による不安定就労の原因になっていることがあり、家族への経済的な支援、情報提供や相談の拡充、子どもの成長過程での早期の「家族への介入」の必要性が指摘されている。それらの点を踏まえ、支援が必要と思われる青年を集団とした調査研究等を行い、さらに親のサポートがどのような形で補われているのか、そうではないのかなど検討することが今後望まれる。

文献

A

- 安達知郎・佐藤修哉・赤木麻衣 2014 中学生の進路決定時のコミュニケーション体験に関する研究：親、友達とのコミュニケーションを中心にして 家族心理学研究, **28**, 38-52.
- 安達智子 2009 サポート認知が就業動機とキャリア選択活動に及ぼす影響 大阪教育大学紀要第4部門教育科学, **57**, 1-13.
- 赤田太郎・若槻優美子 2011 職業的不安に対する大学・短期大学のキャリア教育の現状と課題：ソーシャルサポートと自己効力が与える影響から 龍谷紀要, **33**, 77-88.
- 荒川歩 2012 第1章第4節出来事を揃える—4±1 程度のデータを扱ってみる TEM— 安田裕子・サトウタツヤ編 TEM でわかる人生径路 質的研究の新展開 誠信書房. pp.21-31.

B

- Bandura, A. 1977 Self-efficacy : Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191-215.
- Bandura, A. 1986 *Social foundation of thought an action*: A Englewood Cliffs, NL: Prentice-Hall.
- Barrera, M., Jr 1986 Distinction between social support concepts, measures, and models. *American Journal of Community Psychology*, **51**, 413-445.
- Baumrind, D. 1971 Current patterns of parental authority. *Developments Psychology Monographs*, **4**, 1-102.
- Blustein, D.L. 1989 The role of goal instability and career self efficacy in the career exploration process. *Journal of Vocational Behavior*, **35**, 194-203.
- Blustein, D. L., Walbridge, M. M., Friedlander, M. L., & Palladino, D. E. 1991 Contributions of psychological separation and parental attachment to the career development process. *Journal of Counseling Psychology*, **38**, 39-50.
- Blustein, D. L., Prezioso, M. S., & Schultheiss, D. P. 1995 Attachment theory and career development: Current status and future directions. *The Counseling Psychologist*, **23**, 416-

Buhrmester, D., & Furman, W. 1986 The changing function of friends in childhood: A neo Sullivanian perspective. In V. J. Derlega & B. A. Winstead (Eds.), *Friendship and social interaction*. New York : Springer-Verlag. pp. 41- 62.

Buhrmester, D., & Furman, W. 1987 The development of companionship and intimacy. *Child Development*, **58**, 1101-1113.



中條敦仁 2012 高等学校における進路相談：困難事例の分類とその関連要因の分析
学校カウンセリング研究, **13**, 19-26.

Cobb, S 1976 Social support as a moderator of life stress. *Psychosomatic Medicine*, **38**, 300-314.

Cohen, S., & Wills, T. A. 1985 Social support and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, **98**, 310-357.

Constantine, M. G., Wallace, B. C., & Kindaichi, M. M. 2005 Examining Contextual Factors in the Career Decision Status of African American Adolescents. *Journal of Career Assessment*, **13**, 307-319.

Creed, PA, Fallon, T., & Hood, M. 2009 The relationship between career adaptability, person and situation variables, and career concerns in young adults. *Journal of Vocational Behavior*, **74**, 219-229.

Crites, J.O. 1962 Parental identification in relation to vocational interest development. *Journal of Educational Psychology*, **53**, 262-270.

Crites, J. O. 1965 Measurement of vocational maturity in adolescence: I. Attitude Test of the Vocational Development Inventory. *Psychological Monographs*, **79**. (道脇正夫訳
1972 職業的発達インベントリーによる態度テスト 職業的発達の概念と測定 職業研究所
pp.11-98.)

D

Dietrich, J. & Kracke, B. 2009 Career-septic parental behaviors in adolescents' development. *Journal of Vocational Behavior*, **75**, 109-119.

E

Emmanuelle, V. 2009 Inter-relationship among attachment to mother and father, self-esteem, and career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, **75**, 91-99.

F

Felsman, D.E., & Blustein, D.L. 1999 The Role of Peer Relatedness in Late Adolescent Career Development. *Journal of Vocational Behavior*, **54**, 279-295.

Flores, L. Y., & O'Brien, K. M. 2002 The career development of Mexican. American adolescent women: A test of social cognitive career theory. *Journal of Counseling Psychology*, **49**, 14-27.

湧上克義 1984a 進学志望の意思決定過程に関する研究 教育心理学研究 **32**, 59-63.

湧上克義 1984b 大学進学決定に及ぼす要因ならびにその人的影響源に関する研究 教育心理学研究 **32**, 228-232.

湧上克義・狩野素朗 1984 進学志望の意思決定における対人的影響に関する研究 九州大学教育学部紀要, **28**, 91-96.

福岡欣治・橋本幸 1997 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソ・シャル・サポートとそのストレス緩和効果 心理学研究, **68**, 403-409.

古市裕一 1993 大学生の大学進学動機と価値意識 日本進路指導学会研究紀要, **14**, 1-7.

藤井義久 1999 女子学生における就職不安に関する研究 心理学研究, **70**, 417-420.

G

Garcia, P.R.J.M., Restubog, S.L.D., Toledano, L.S., Tolentino, L.R., & Rafferty, A.E. 2012 Differential moderating effects of student and parent-rated support in the relationship

between learning goal orientation and career decision-making self-efficacy. *Journal of Career Assessment*, **77**, 186-195.

Ginzberg, E., Ginzburg, S. W., Axelrad, S. & Herma, J. L. 1951 *Occupational choice: An approach to a general theory*. New York, NY: Columbia University Press.

神戸威行・菅野純・大月友 2013 大学受験期の進路選択過程におけるソーシャル・サポートの知覚効果 日本教育心理学会総会発表論文集, **55**, 242.

Guay, F., Senécal, C., Gauthier, L., & Fernet, C. 2003 Predicting career indecision ; A self-determination theory perspective. *Journal of Counseling Psychology*, **50**, 165-177.

H

Hackett, G., & Betz, N.E. 1981 A self-efficacy approach to the career development of women. *Journal of Vocational Behavior*, **18**, 326-339.

Hansen, J. C. 1984 The measurement of vocational interests: Issues and future directions. In S. D. Brown & R. W. Lent (Eds.), *Handbook of counseling psychology*. New York: Wiley pp.99-136.

平石賢二 1997 大学生の職業的アイデンティティの探究と親子間相互交渉 三重大学教育学部研究紀要教育科学, **48**, 177-187.

平尾元彦 2004 大学生の就職活動に関する親の意識--山口大学3年生の保護者アンケート調査 山口大学教育機構大学教育 **1**, 103-113.

久田満・箕口雅博・千田茂博 1990 大学受験生のコーピングとソーシャル・サポート 日本教育心理学会総会発表論文集, **32**, 478.

本多陽子 2004 高校生における進路決定にまつわる悩みと信念との関連 日本教育心理学会総会発表論文集, **46**, 646.

本多陽子・落合良行 2004 重要な決定にまつわる心理的特性からみた医療系大学生の進路決定プロセスの特徴 筑波大学心理学研究, **28**, 79-87.

本多陽子・落合幸子 2006 医療系大学生の進路決定プロセス尺度作成の試み：進路決定プロセスの類型と職業的アイデンティティからの検討 茨城県立医療大学紀要, **11**, 45-54.

本多陽子 2008 大学生が進路を決定しようとするときの悩みと進路決定に関する信念との関係 青年心理学研究, **20**, 87-100.

本田由紀 2005 若者と仕事―「学校経由の就職」を超えて 東京大学出版会.

堀有喜衣 2004 無業の若者のソーシャル・ネットワークの実態と支援の課題 日本労働研究雑誌, **46**, 38-48.

House, J. 1981 Work stress and social support. Reading, MA : Addison-Wesley.

I

石毛 みどり・無藤 隆 2005 中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャルサポートとの関連：受験期の学業場面に着目して 教育心理学研究, **53**, 356-367.

石隈利紀・小野瀬雅人 1997 スクールカウンセラーに求められる役割に関する学校心理学的研究 - 子ども・教師・保護者を対象としたニーズ調査の結果より - 平成 6 年度～平成 8 年度科学研究費助成金（基礎研究 (c) (2)）研究成果報告書（課題番号：06610095）.

礪本章子・工藤雄行・小池妙子 2011 看護師と介護福祉士の職務継続要因：職業選択動機に関する検討 弘前医療福祉大学紀要, **2**, 47-54.

伊藤裕子 1980 女子青年の性役割観と父母の養育態度：大学生の職経歴選択を中心に 教育心理学研究, **28**, 67-71.

伊藤裕子 1995 女子青年の職歴選択と父母の養育態度：親への評価を媒介として 青年心理学研究, **7**, 15-29.

J

城仁士 2004 高校生のキャリア発達支援活動の進路意識への影響(2) 日本教育心理学会総会発表論文集, **46**, 347.

K

菅徹・上地安昭 1996 高校生の心理・社会的ストレスに関する一考察 カウンセリング研究, **29**, 197-207.

- 金井篤子 2003 8 働く女性のキャリア・カウンセリング 田畑治・森田美弥子・金井篤子(編) 臨床実践の知 - 実践してきたこの私 ナカニシヤ出版. pp.103-116.
- 金井篤子・三後美紀 2004 高校生の進路選択過程の心理学的メカニズム—自己決定経験とキャリア・モデルの役割— 寺田盛紀(編著) キャリア形成就職メカニズムの国際比較—日独米中の学校から職業への移行過程— 晃洋書房. pp. 25-37.
- 川崎友嗣 2000 大学生のキャリア決定自己効力とキャリア不決断に及ぼす職業情報の効果(その1) 関西大学社会学部紀要, **31**, 197-240.
- 経済協力開発機構(OECD) 編 2012 図表で見る OECD インディケーター (2012 年度) 明石書店.
- Keller, B.K., & Whiston, S.C. 2008 The role of parental influences on young adolescents' career development. *Journal of Career Assessment*, **16**, 198–217.
- Ketterson, T. U., & Blustein, D. L. 1997 Attachment Relationships and the Career Exploration Process. *Career Development Quarterly*, **46**, 167-178.
- 木村真人・水野治久 2004 大学生の被援助志向性と心理的変数との関連について—学生相談・友達・家族に焦点をあてて— カウンセリング研究, **37**, 260-269.
- 北原佳代・佐々木美樹・岡部恵子 2005 職業選択に対する学生の考え方と親への相談状況との関係：新入生を対象にして つくば国際短期大学紀要, **33**, 121-139.
- 北見由奈・茂木俊彦・森和代 2009 大学生の就職活動ストレスに関する研究—評価尺度の作成と精神的健康に及ぼす影響— 学校メンタルヘルス, **12**, 43-50.
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター 2002 児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について
<RRL: <https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/sinro/sinro.htm>>
- 小杉礼子 2004a 終章職業への移行が困難な若者の背景を考える労働政策研究・研修機構移行の危機にある若者の実像—無業・フリーターの若者へのインタビュー調査(中間報告)— 労働政策研究報告書 No.6, pp212-220.
- 小杉礼子 2004b 若年無業者増加の実態と背景 学校から職業生活への移行の隘路としての無業の検討 日本労働研究雑誌, **46**, 4-16.

小竹正美 1988 進路指導の諸活動 小竹正美・山口政志・吉田辰雄 進路指導の理論と実践
日本文化科学者. pp. 47-106.

小島貴子・東海左由留 2004 子どもを就職させる本―親が読む子どものための就職ガイド
ス メディアファクトリー

Kracke, B. 1997 Parental behaviors and adolescents' career exploration. *The Career Development Quarterly*, **45**, 341-350.

Kracke, B., & Schmitt-Rodermund, E. 2001 Adolescents' career exploration in the content of educational and educational and occupational transitions. In J. –E. Nurmi (Ed.), *Navigating through adolescence: European perspective*, New York: Routledge. pp.141-165.

Kracke, B. 2002 The role of personality, parents and peers in adolescents career exploration. *Journal of adolescence*, **25**, 19-30.

.



Lapan, R.T., Hinkelman, J.M., , Adams, A., & Turner, S. 1999 Understanding rural adolescents' interests, values, and efficacy expectations. *Journal of Career Development*, **26**, 107-124.

Leal-Muniz, V., & Constantine, M. G. 2005 Predictors of the career commitment process in Mexican American college student. *Journal of Career Assessment*, **13**, 204-215.

Lent, R. W., Brown, S. D., & Hackett, G. 1994 Toward a unifying social cognitive theory of career and academic interest, choice, and performance [Monograph] *Journal of Vocational Behavior*, **45**, 79-122.

Lent, R. W., Brown, S. D., & Hackett, G. 2000 Contextual supports and barriers to Career Choice: A Social Cognitive Analysis. *Journal of Counseling Psychology*, **47** , 36-49.

Lent, R.W., Brown, S.D., Nota, L., & Soresi, S. 2003 Testing social cognitive interest and choice hypotheses across Holland types in Italian high school students. *Journal of Vocational Behavior*, **62**, 101-118.

Lopez, F.G. & Andrews, S. 1987 Career indecision: A family systems perspective.

M

- Ma, P-W. & Yeh, C. J. 2010 Individual and familial factors influencing the educational and career plans of Chinese immigrant youths. *Career Development Quarterly*, **58**, 230-245.
- 松田由希子・前田健一 2007 大学生の職業選択未関与におよぼす自己効力感と親や友人からのサポートの影響 広島大学心理学研究, **7**, 147-158.
- 松井賢二 1986 親の態度の差異からみた親と子の労働価値観の関係 日本進路指導学会研究紀要, **7**, 26-33.
- 松井賢二・清水和秋 2008 大学におけるキャリア形成支援 日本キャリア教育学会編 キャリア教育概論 東洋館出版社. pp.211-213.
- 松本浩司 2008 高校生の職業観の構造と形成要因：職業モデルとの関連を中心に キャリア教育研究, **26**, 57-67.
- McWhirter, E. H., Hackett, G., & Bandalos, D. L. 1998 A causal model of the educational plans and career expectations of Mexican American high school girls. *Journal of Counseling Psychology*, **45**, 166-181.
- 南隆男・稲葉昭英・浦光博 1987 「ソーシャル・サポート」研究の活性化にむけて：若干の資料 慶應義塾大学哲学, **85**, 151-184.
- 耳塚寛明 2002 誰がフリーターになるのか：社会階層的背景の検討 小杉礼子（編）自由の代償／フリーター：現代若者の就業意識と行動 日本労働政策研究・研修機構. pp.133-148.
- 三浦正江・坂野雄二 1996 中学生における心理的ストレスの継時的変化 教育心理学研究, **44**, 368-378.
- 三浦正江・上里一郎 1999 中学生の学業における心理的ストレス - 高校受験期に実施した調査研究から - ヒューマンサイエンスリサーチ, **8**, 87-102.
- 三宅義和・遠藤竜馬 2005 進路選択における両親の影響―日選抜型大学の保護者の進路意識を通じて―(第7章) 居神浩・三宅義和・遠藤竜馬・松本恵美・中山一郎・畑秀和 大卒フリーター問題を考える ミネルヴァ書房 pp.175-211.

- 宮本みち子 2004 第4章 家庭・親族状況からみた移行 労働政策研究・研修機構移行の危機にある若者の実像—無業・フリーターの若者へのインタビュー調査(中間報告)— 労働政策研究報告書 No.6, pp.144-185.
- 宮本みち子 2005a 第三章家庭環境から見る 小杉礼子編 フリーターとニート 勁草書房, pp.145-197.
- 宮本みち子 2005b 第4章家族の問題 労働政策研究・研修機構 若年就業支援の現状と課題—イギリスにおける支援の展開と日本の若者の実態分析から 労働政策研究報告書 No.35 pp.179-203.
- 溝上慎一 2000 自己理解の「表現」における他者の視点参照の効果 性格心理学研究, 8, 101-112.
- 水野治久・石隅利紀 1999 被援助志向性, 被援助行動に関する研究の動向 教育心理学研究, 47, 530-539.
- 水野治久・石隈利紀・田村修一 2003 中学生を取り巻くヘルパーからのソーシャルサポートと適応に関する研究 コミュニティ心理学研究, 7, 35-46.
- 水野雅之・佐藤 純 2012 就職活動中のサポート資源に関する探索的検討 筑波大学発達臨床心理学研究, 23, 29-35.
- 水野雅之・佐藤純・濱口佳和 2013 就職活動中のサポート資源に関する研究の動向 筑波大学心理学研究, 45, 83-89.
- 文部科学省 2004 キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書—児童生徒一人一人の勤労観, 職業観を育てるために—
<URL:http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801.htm>
- 文部科学省 2006 小学校・中学校・高等学校キャリア教育推進の手引き：児童生徒一人一人の勤労観, 職業観を育てるために
<URL:[http://nanyo-kj.esnet.ed.jp/Page02/tebiki\(H18-11\).pdf](http://nanyo-kj.esnet.ed.jp/Page02/tebiki(H18-11).pdf)>
- 文部科学省 2011 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について
<URL: http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm>
- 文部科学省 2012 学校基本調査—平成24年度(確定値)結果の概要—

<URL:http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1329235.htm>

文部科学省 2014 子どもの自殺等の実態分析

<URL:http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afiedfile/2014/09/10/1351886_05.pdf>

森和代・堀野緑 1992 児童のソーシャルサポートに関する一研究 教育心理学研究, **40**, 402-410.

森田美弥子 1999 大学生の進路相談事例の分類 来談動機の視点から 名古屋大学学生相談室紀要, **11**, 12-24.

室山晴美 1997 自己の職業興味の理解と進路に対する準備度が職業情報の検索に及ぼす効果 日本進路指導学会研究紀要, **18**, 17-26.

室山晴美 2002 コンピュータによる職業適性診断システムの利用と評価 教育心理学研究, **50**, 311-322.



中川泰彬・大坊郁夫 1985 日本版 GHQ 精神健康調査票手引 日本文化科学社.

中野良哉・中屋久長・山本双一・山崎裕司・平賀康嗣・片山訓博・重島晃史・高地正音 2010 医療系専門学校生の進学動機と学校適応感 高知リハビリテーション学院紀要, **11**, 13-18.

中野良哉 2013 学生の学習動機づけに影響を及ぼす要因：進路決定時の親の関わりと進路自己決定性 理学療法科学, **28**, 551-556.

成田絵吏・緒賀郷志 2010 大学生における援助要請と進路選択の関連について 岐阜大学教育学部研究報告. 人文科学, **59**, 169-179.

Navarro, R. L., Flores, L. Y., & Worthington, R. L. 2007 Mexican American middle school students' goal intentions in mathematics and science: A test of social cognitive career theory. *Journal of Counseling Psychology*, **54**, 320-335.

新見直子・前田健一 2008 中学生のキャリア意識と家族・友人に対するコミュニケーション内容の関連 広島大学心理学研究, **8**, 67-75.

新納美美・森俊夫 2001 企業労働者への調査に基づいた日本版 GHQ 精神健康調査票 12 項目

版 (GHQ-12) の信頼性と妥当性の検討 精神医学, **43**, 431-436.

西山佐代子 2000 進路選択 久世敏雄・斎藤耕二監修 青年心理学辞典, pp233.

Nota, L., Ferrari, L., Solberg, V.S., & Soresi, S. 2007 Career search self-efficacy, family support, and career indecision with italian youth. *Journal of Career Assessment*, **15**, 181-193.



O'Brien, K. M., Friedman, S. M., Tipton, L. C., & Linn, S. G. 2000 Attachment, separation, and women's vocational development: A longitudinal analysis. *Journal of Counseling Psychology*, **47**, 301-315.

落合良行・佐藤有耕・岡本政博・国本勝正 1995 進路相談において生徒に望まれる教師の対応 教育心理学研究, **43**, 445-454.

落合良行・佐藤有耕 1996 親子関係の変化から見た心理的離乳への過程の分析 教育心理学研究, **44**, 11-22.

小川一夫・田中宏二 1979 父親の職業が息子の職業選択に及ぼす影響に関する研究 教育心理学研究, **27**, 272-281.

小川一夫・田中宏二 1980 親の職業が娘の職業選択に及ぼす影響に関する研究 教育心理学研究, **28**, 328-331.

岡林佐知・本田靖明 2012 否定され続け壊れる心 シューカツは今3 朝日新聞 2月24日朝刊.

岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森俊夫・矢富直美 1992 中学生の学校ストレスの評価とストレス反応との関係 心理學研究, **63**, 310-318.

岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究, **41**, 302-312.

尾見康博 1999 子どもたちのソーシャル・サポート・ネットワークに関する横断的研究 教育心理学研究, **47**, 40-48.

大瀨裕司・古川雅文 1999 高校生の進路選択に対する自己効力を高める：進路先訪問と先輩

の体験談の効果 日本教育心理学会総会発表論文集, **41**, 414.

太田千瑞・飯田順子 2009 高校生の進路決定過程における求めるソーシャルサポートの差異：
自律的進学動機の個人差をもとに 日本教育心理学会総会発表論文集, **51**, 200.

大谷哲弘・木村諭史・小関俊祐・藤生英行 2010 進路選択におけるソーシャルサポート知覚
尺度作成の試み 発達心理臨床研究 **16**, 169-179.

大谷哲弘・木村諭史・藤生英行 2013 就職を希望する高校生の進路選択におけるサポート知
覚と進路意思決定との関係 カウンセリング研究, **46**, 127-137.

Osipow, S. H. 1990 Convergence in theories of career choice and development: Review and
prospect *Journal of Vocational Behavior*, **36**, 122-131.



Raque-Bogdan, T.L, Klingaman, E.A, Martin, H.M., & Lucas, M.S. 2013 Career-related
parent support and career barriers: an investigation of contextual variables. *The Career
Development Quarterly*, **61**, 339-353. .

Restubog, S.L.D., Florentino, A.R., & Garcia, P.R.J.M. 2010 The mediating roles of career
self-efficacy and career decidedness in the relationship between contextual support and
persistence. *Journal of Vocational Behavior*, **77**, 186-195.

リクナビ HP 2012 保護者のための就職ジャーナル
<<http://journal.rikunabi.com/guardian/index.html>>

Roe, A. 1957 Early determinants of vocational choice. *Journal of Counseling Psychology*,
4, 212-217.

労働政策研究・研修機構 2007 大学生と就職—職業への移行支援と人材育成の視点からの検
討— 労働政策研究報告書, **78**.

<[URL:http://www.jil.go.jp/institute/reports/2007/078.htm](http://www.jil.go.jp/institute/reports/2007/078.htm)>

労働政策研究・研修機構 2010 「大学における未就職卒業生支援に関する調査」 労働政策研
究・研修機構

<[URL:http://www.jil.go.jp/press/documents/20100827_02.pdf](http://www.jil.go.jp/press/documents/20100827_02.pdf)>

Ryan, N. E., Solberg, V. S., & Brown, S.D. 1996 Family dysfunction, parental attachment, and career search self-efficacy among community college students. *Journal of Counseling Psychology*, **43**, 84-89.

S

坂晴己子・真中陽子 2002 高校生の学校ストレスとソーシャル・サポートおよびコーピングとの関連 明治学院大学大学院文学研究科心理学専攻紀要, **7**, 9-18.

柳井晴夫・清水留三郎・前川眞一・鈴木規夫 1989 進路指導と大学情報に関する調査結果の分析 独立行政法人大学入試センター研究紀要, **18**, 1-71.

坂柳恒夫 1990 進路指導におけるキャリア発達の理論 愛知教育大学研究報告, **39**, 141-155.

坂柳恒夫 1992 中学生の進路成熟に関する縦断的研究 愛知教育大学教科教育センター研究報告, **16**, 299-307.

坂柳恒夫 1993 高校生の進路成熟に関する縦断的研究 愛知教育大学教科教育センター研究報告, **17**, 127-135.

坂柳恒夫 1996 大学生の職業的不安に関する研究 広島大学大学教育研究センター大学論集, **25**, 207-227.

サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高井沙織・ヤーン・ヴァルシナー 2006 複線径路・等至性モデル—人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して— 真的心理学研究, **5**, 255-276.

社団法人全国高等学校 PTA 連合会・株式会社リクルート 2012 第 5 回高校生と保護者の進路に関する意識調査報告書

<URL:http://www.zenkoupren.org/active/2011shinrohokoku_5kai.pdf>

鹿内啓子 2004 女子高校生の進路選択に関わる要因 北星学園大学文学部北星論集 **41**, 13-28.

鹿内啓子 2005 大学生の職業決定に関わる親の態度認知と職業人イメージの要因 北星学園大学文学部北星論集, **42**, 69-88.

鹿内啓子 2006 大学生の職業未決定に関わる要因の検討：未決定型による比較 北星学園大学

- 文学部北星論集, **43**, 133-148.
- 鹿内啓子 2007 大学生の職業選択に対する職業意識と親の影響との関連性 北星学園大学文学部北星論集, **44**, 1-11.
- 鹿内啓子 2010 大学生における親の就職への態度および親との関係と職業意識との関連 北星学園大学文学部北星論集, **47**, 1-12.
- 鹿内啓子 2012 大学生における親との関係と職業未決定および就活不安との関連 北星学園大学文学部北星論集, **49**, 1-11.
- 鹿内啓子 2013 大学生の職業決定と親子関係との関連性についての面接調査 北星学園大学文学部北星論集, **50**, 1-12.
- 嶋田洋徳 1996 知覚されたソーシャルサポート利用可能性の発達的变化に関する基礎的研究 広島大学総合科学部紀要IV理系編, **22**, 115-128.
- 嶋田洋徳 2001 心理学的ストレスとソーシャルサポート ストレス科学, **16**, 40-50.
- 清水和秋・坂柳恒夫 1988 進路不決断と進路成熟：父親,母親,友人,教師の影響に関する高校生の横断的な研究 日本進路指導学会研究紀要, **9**, 28-36.
- 下村英雄・木村周 1997 大学生の就職活動ストレスとソーシャルサポートの検討 進路指導研究, **18**, 9-16.
- 下村英雄 2000 自己分析課題がコンピュータによる情報探索および進路選択に対する自己効力に与える影響 日本進路指導学会研究紀要, **20**, 9-20.
- 下村英雄・掘洋元 2004 大学生の就職活動における情報探索行動:情報源の影響に関する検討 進路指導研究, **20**, 93-105.
- 下村英雄 2007 中学校におけるコンピュータを活用したキャリアガイダンスが進路自己効力感に与える影響 教育心理学研究, **55**, 276-286.
- 下山晴彦 1984 ある高校の進路決定過程の縦断的研究 教育心理学研究, **32**, 206-211.
- 下山晴彦 1986 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, **34**, 20-30.
- Shumaker, S.A., & Brownell, A. 1984 Toward a theory of social support: Closing conceptual gaps. *Journal of Social Issues*, **40**, 11-36.
- 副田素子・柏木恵子 1980 女性の職業志向性に及ぼす母親の影響 東京女子大学紀要論集, **31**,

213-238.

杉村和美 2001 関係正の観点から見た女子青年のアイデンティティ探求: 2 年間の変化とその要因 発達心理学研究, **12**, 87-98.

Super, D.E. 1957 *The psychology of careers: An introduction to vocational development*. New York, NY : Harper & Row Publishers. (日本進路指導協会訳 1960 職業生活の心理学 - 職業経歴と職業的発達 - 誠信書房)

Super, D.E. 1962 The structure of work values in relation to status, achievement, interests, and adjustment. *Journal of Applied Psychology*, **46**, 231-239.

Super, D.E. 1980 A life-span, life-space approach to career development. *Journal of Vocational Behavior*, **16**, 282-298.

T

高橋彩 2008 男子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連 パーソナリティ研究, **16**, 159-170.

高橋彩 2009 女子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連 パーソナリティ研究, **17**, 208-219.

高井直美 2001 大学生における親の価値の継承 京都ノートルダム女子大学研究紀要, **31**, 147-156.

高村和代 2000 進路選択 久世敏雄・斎藤耕二監修 青年心理学辞典. pp. 233.

高野明・宇留田麗 2004 学生相談活動に対する援助要請のしやすさについての具体的検討—援助要請に関する利益とコスト認知との関連から— 学生相談研究, **25**, 56-68.

田中宏二・小川一夫 1981 親の期待と親への同一視が看護職の継承に及ぼす影響 教育心理学研究, **29**, 166-170.

田中宏二・小川一夫 1982 教師職選択に及ぼす親の影響: 子の認知した親の期待と職業モデル 教育心理学研究, **30**, 257-262.

田中宏二・小川一夫 1985 職業選択に及ぼす親の職業的影響: 小・中学校教師・大学教師・建築設計士について 教育心理学研究, **33**, 171-176.

- 谷口弘一 2007 ソーシャルサポートと発達 水野治久・谷口弘一福岡欣治・古宮昇(編) カウンセリングとソーシャルサポート つながり支えあう心理学 ナカニシヤ出版 pp.34-49.
- Taylor, K.M., & Betz, N.E. 1983 Applications of self-efficacy theory to the understanding and treatment of career indecision. *Journal of Vocational Behavior*, **22**, 63-81.
- Taylor, K.M., & Popma, J. 1990 An examination of the relationships among career decisionmaking self-efficacy, career salience, locus of control and vocational indecision. *Journal of Vocational Behavior*, **37**, 17-31.
- 田澤実 2006 大学生が認知する親との会話と職業不決断 武蔵野大学人間関係学部紀要, **3**, 113-122.
- Tokar, D. A., Withrow, J. R., Hall, R. J., & Moradi, B. 2003 Psychological separation, attachment security, vocational selfconcept crystallization, and career indecision: A structural equation analysis. *Journal of Counseling Psychology*, **50**, 3-19.
- 富永美佐子 2009 進路選択能力,進路選択自己効力,進路選択行動の関連—中学生・高校生・大学生を対象に— 福島大学人間発達文化学類論集, **10**, 39-49.
- 富安浩樹 1997 大学生における進路決定自己効力と進路決定行動との関連 発達心理学研究, **8**, 15-25.
- Turner, S.L., & Lapan, R. T. 2002 Career self-efficacy and perceptions of parent support in adolescent career development. *Career Development Quarterly*, **51**, 44-55.
- Turner, S.L., Alliman-Brissett, A., Lapan, R.T., Udipi, S. & Ergun, D. 2003 The career-related parent support scale. *Measurement and Evaluation in Counseling and Development*, **36**, 83-94.
- Turner, S. L., Steward, J. C., & Lapan, R. T. 2004 Family factors associated with sixth-grade adolescents' math and science career interests. *The Career Development Quarterly*, **53**, 41-53.
- 鶴田和美 1993 来談学年から見た大学生の個別相談事例の心理学的特徴 名古屋大学学生相談室紀要, **4**, 3-29
- 鶴田和美 1994 大学生活サイクルにおける学年別の心理学的特徴 第27回学生相談研究会議

鳥取シンポジウム報告書, 86-92.

鶴田和美 2001 学生のための心理相談 倍風館.

U

内田龍史 2007 フリーター選択と社会的ネットワーク—高校3年生に対する進路意識調査から— 理論と方法, **22**, 139-153.

上村和申 2004 大学生の就職活動における両親の影響に関する一考察 明治大学大学院 政治学研究論集, **21**, 35-54.

鶴木恵子・橋本ヒロ子 2014 大学3年生における進路自己効力の促進要因—媒介要因としての就職準備活動及びソーシャルサポートの検討— 十文字学園女子大学社会情報論叢, **17**, 75-86.

浦上昌則 1995 学生の進路選択に対する自己効力に関する研究 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), **42**, 115-126.

浦上昌則 1996a 女子短大生の職業選択過程についての研究: 進路選択に対する自己効力, 就職活動, 自己概念の関連から 教育心理学研究, **44**, 195-203.

浦上昌則 1996b 「進路選択に対する自己効力」の育成に関する予備的研究—ワークブックを用いた育成法について— 進路指導研究, **17**, 17-27.

浦上昌則・山中美香 2012 就職活動における言葉がけの影響—就職活動に対する意味づけとの関連に注目して— 南山大学人間関係研究, **11**, 116-128.

牛尾奈緒美 2005 第2章 大学生の就職活動と親子関係:ジェンダーを視点として 根本 孝・牛尾奈緒美・永野仁・木谷光宏 大学生の就職行動に関する調査研究 明治大学社会科学研究所 紀要, **44**, 103-116.

V

Vaux, A. 1988 *Social Support: Theory, research, and intervention*. New York: Praeger.

Vignoli, E., Croity-Belz, S., Chapeland, V., de Fillipis, A., & Garcia, M. 2005 Career

exploration in adolescents: The role of anxiety, attachment, and parenting style. *Journal of Vocational Behavior*, **67**, 153-168.

W

若者自立・挑戦戦略会議 2003 若者自立・挑戦プラン

<URL:<http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyou/wakachalle/pdf/sankou1>>

Williamson, E. G. 1939 *How to counsel students*. New York: McGraw-Hill.

Wijting, J. P., Arnold, C. R., & Conrad, K. A. 1977 Relationships between work values, socio-educational and work experiences, and vocational aspirations of 6th, 9th, 10th, and 12th graders. *Journal of Vocational Behavior*, **11**, 51-65.

Wijting, J. P., Arnold, C. R., & Conrad, K. A. 1978 Generational differences in work values between parents and children and between boys and girls across grade levels 6, 9, 10, and 12. *Journal of Vocational Behavior*, **12**, 245-260.

Wolfe, J. B., & Betz, N. E. 2004 The Relationship of Attachment Variables to Career Decision-Making Self-Efficacy and Fear of Commitment. *Career Development Quarterly*, **52**, 363-369.

Y

山口豊一・下平健史 2007 高校生の悩み深刻度と被援助志向性との関係 日本教育心理学会総会発表論文集, **49**, 712.

山中洋子・安達智子 2009 医療系専攻学生の意識調査 入学動機,教育・生活状況,職業価値観,就業動機からの検討 大阪教育大学紀要 第5部門 教科教育, **57**, 115-130.

山村滋・鈴木規夫・濱中淳子 2012 現代高校生の進路選択における入試の位置づけ 大学入試研究ジャーナル, **22**, 27-33.

安田裕子・サトウタツヤ編 2012 TEM でわかる人生の径路 - 質的研究の新展開 誠信書房.

安福純子 2005 大学生の進路問題と心理的意味 大阪教育大学紀要 IV 教育科学, **53**, 105-112.

- 矢崎裕美子 2006 大学生の進路選択における親の期待認知について：因子分析の結果および時期による得点の変化 日本教育心理学会総会発表論文集, **48**, 32.
- 横山明子 2004 WebCT による進路決定支援システムの開発 日本教育心理学会総会発表論文集, **46**, 518.
- 吉田辰雄 2007 第2章 職業指導・進路指導・キャリア教育の基礎理論 吉田辰雄・篠翰著 進路指導・キャリア教育の理論と実践 日本文化科学社 pp.20-35.

初出一覧

本研究は、以下の論文及び学会発表に加筆、修正したものである。

成田絵吏 2014 進路に関する親のサポートの横断的研究ー中学生，高校生，大学生を対象としてー. 学校心理学研究, **14**, 21-31. 【2章】

成田絵吏・森田美弥子 2014 高校生の進路選択における親のサポートについてー進路選択に関する自己効力と行動との関連からー. キャリア教育学研究, **33**, 47-54. 【3章】

成田絵吏・森田美弥子 2013 大学生における職業の選択に関する被援助志向性の研究. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（心理発達科学）, **59**, 91-100. 【4章】

成田絵吏・森田美弥子 2014 医療職の選択における親サポート，かかわりー専門学校生の語りからー. キャリア教育学会(琉球大学) 【5章】

使用調査票

アンケート調査票

この調査は、日ごろあなたが、どのように思っているか、感じているのかを質問するものです。

このアンケートに回答するかどうかはあなたが自分で自由に決めてください。

この調査は、研究のために行われるものです。あなたがこのアンケートにどのような回答をしても、成績やその他学校からの評価などには一切関係ありません。

また、この調査には名前を書きませんので、誰がどんな回答をしたのかは分かりません。また、全体として分析しますので、ある一人の回答だけが特別に取り上げられることもありません。安心して回答してください。

正しい答えや間違った答えというものはありません。あなたの思ったことをそのままお答え下さい。

※当てはまる番号に○をつける、または空らんに入力してください。

■学校：（ 1. 中学 2. 高校 ）

■学年：（ 年生）

■性別：（ 1. 男 2. 女 ）

I. あなたの保護者(父親、母親、またはそれにあたる成人の男性、女性)は、以下のことについて、どのくらい当てはまりますか(してくれますか)。当てはまると思う数字に○をつけてください。

	まったく当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらでもない	多少当てはまる	とても当てはまる
例) おもしろい本をすすめてくれる。	1	2	3	4	5
1. 私が学んでいることが、将来仕事をする上でどのように役に立つか話してくれる。	1	2	3	4	5
2. 私が宿題(または課題)をするのを手伝ってくれる。	1	2	3	4	5
3. 私の進路を考える上で、役立つような授業(または科目、コース、専攻)を選ぶことを手伝ってくれる。	1	2	3	4	5
4. 私が将来仕事をする時に役に立つことを教えてくれる。	1	2	3	4	5
5. 私が将来仕事をする上で、役に立つ技術や知識を学べるようなことをさせてくれる。	1	2	3	4	5
6. 私の将来の職業に関連するような技術や知識を学べる課外活動(習い事、体験、活動など)をさせてくれる。	1	2	3	4	5
7. 私の仕事にほこりをもてるようにしてくれる。	1	2	3	4	5
8. 自分たち(保護者)がどういう業務(仕事)をしているか話してくれる。	1	2	3	4	5
9. (保護者が)職場で起こった出来事について話してくれる。	1	2	3	4	5
10. 自分たちの職場(保護者が働いているところ)に私を連れて行ってくれた。	1	2	3	4	5
11. 同僚(保護者が仕事と一緒に働いている人)に私を会わせてくれた。	1	2	3	4	5
12. (保護者が)職場で何をしているのか私に見せてくれる。	1	2	3	4	5
13. 自分たち(保護者)の仕事について話してくれる。	1	2	3	4	5
14. 自分たち(保護者)がどこで働いているか教えてくれる。	1	2	3	4	5
15. 私が学校で出来るかぎり多くのことを学べるようにはげましてくれる。	1	2	3	4	5

	まったく当てはまらない 1	あまり当てはまらない 2	どちらでもない 3	多少当てはまる 4	とても当てはまる 5
16, よい成績を取れるようにはげましてくれる。	1	2	3	4	5
17, 卒業した後に私が専門学校や大学に進学する、または就職することをはげましてくれる。	1	2	3	4	5
18, 私が学校でよくやっていることをほこりに思うと話してくれる。	1	2	3	4	5
19, 私が学校をちゃんと卒業することを期待していると言ってくれる。	1	2	3	4	5
20, 私が学校で勉強をよくやっていることを評価してくれる(認めてくれる、ほめてくれる)。	1	2	3	4	5
21, 将来の私の職業が楽しみだということを話してくれる。	1	2	3	4	5
22, 私がいつか仕事をする上で役に立つようなことを学んでいる時、保護者は私がうれしくなるようなことを言ってくれる。	1	2	3	4	5
23, ときどき、保護者と私は、私が将来どんなに素晴らしい仕事につけるか楽しく一緒に話す。	1	2	3	4	5
24, 私が将来の進路について心配していることを、私と話してくれる。	1	2	3	4	5
25, 私がときどき将来の進路について不安に思うことを理解してくれる。	1	2	3	4	5
26, 将来私にどんな仕事についてほしいか話してくれる。	1	2	3	4	5
27, 私が、仕事をするに関する技術や知識を学ぶとほめてくれる(わかってくれる)。	1	2	3	4	5

質問は以上です。記入もれがないかもう一度確かめてください。
ご協力ありがとうございました。

第2章の調査において用いた質問紙 高校生使用質問紙

第3章の調査において用いた質問紙

アンケート調査票

この調査は、日ごろあなたが、どのように思っているか、感じているのかを質問するものです。

このアンケートに回答するかどうかはあなたが自分で自由に決めてください。

この調査は、研究のために行われるものです。あなたがこのアンケートにどのような回答をしても、成績やその他学校からの評価などには一切関係ありません。

また、この調査には名前を書きませんので、誰がどんな回答をしたのかは分かりません。また、全体として分析しますので、ある一人の回答だけが特別に取り上げられることもありません。安心して回答してください。

正しい答えや間違った答えというものはありません。あなたの思ったことをそのままお答え下さい。

※当てはまる番号に○をつける、または空らんに入力してください。

■学校：（ 1. 中学 2. 高校 ）

■学年：（ 年生）

■性別：（ 1. 男 2. 女 ）

I. あなたの保護者(父親、母親、またはそれにあたる成人の男性、女性)は、以下のことについて、どの
 いど当てはまりますか(してくれますか)。当てはまると思う数字に○をつけてください。

	ま っ た く 当 て は ま ら な い	あ ま り 当 て は ま ら な い	ど ち ら で も な い	多 少 当 て は ま る	と て も 当 て は ま る
例) おもしろい本をすすめてくれる。	1	2	3	4	5
1. 私が学んでいることが、将来仕事をする上でどのように役に立つか話 してくれる。	1	2	3	4	5
2. 私が宿題(または課題)をするのを手伝ってくれる。	1	2	3	4	5
3. 私の進路を考える上で、役立つような授業(または科目、コース、専 攻)を選ぶことを手伝ってくれる。	1	2	3	4	5
4. 私が将来仕事をする時に役に立つことを教えてくれる。	1	2	3	4	5
5. 私が将来仕事をする上で、役に立つ技術や知識を学べるようなことを させてくれる。	1	2	3	4	5
6. 私の将来の職業に関連するような技術や知識を学べる課外活動(習 い事、体験、活動など)をさせてくれる。	1	2	3	4	5
7. 私の仕事にほこりをもてるようにしてくれる。	1	2	3	4	5
8. 自分たち(保護者)がどういう業務(仕事)をしているか話してくれる。	1	2	3	4	5
9. (保護者が)職場で起こった出来事について話してくれる。	1	2	3	4	5
10. 自分たちの職場(保護者が働いているところ)に私を連れて行ってく れた。	1	2	3	4	5
11. 同僚(保護者が仕事と一緒に働いている人)に私を会わせてくれた。	1	2	3	4	5
12. (保護者が)職場で何をしているのか私に見せてくれる。	1	2	3	4	5
13. 自分たち(保護者)の仕事について話してくれる。	1	2	3	4	5
14. 自分たち(保護者)がどこで働いているか教えてくれる。	1	2	3	4	5
15. 私が学校で出来るかぎり多くのことを学べるようにはげましてくれる。	1	2	3	4	5

	まったく当てはまらない	あまり当てはまらない	どちらでもない	多少当てはまる	とても当てはまる
16, よい成績を取れるようにはげましてくれる。	1	2	3	4	5
17, 卒業した後に私が専門学校や大学に進学する、または就職することをはげましてくれる。	1	2	3	4	5
18, 私が学校でよくやっていることをほこりに思うと話してくれる。	1	2	3	4	5
19, 私が学校をちゃんと卒業することを期待していると言ってくれる。	1	2	3	4	5
20, 私が学校で勉強をよくやっていることを評価してくれる(認めてくれる、ほめてくれる)。	1	2	3	4	5
21, 将来の私の職業が楽しみだということを話してくれる。	1	2	3	4	5
22, 私がいつか仕事をする上で役に立つようなことを学んでいる時、保護者は私がうれしくなるようなことを言ってくれる。	1	2	3	4	5
23, ときどき、保護者と私は、私が将来どんなに素晴らしい仕事につけるか楽しく一緒に話す。	1	2	3	4	5
24, 私が将来の進路について心配していることを、私と話してくれる。	1	2	3	4	5
25, 私がときどき将来の進路について不安に思うことを理解してくれる。	1	2	3	4	5
26, 将来私にどんな仕事についてほしいか話してくれる。	1	2	3	4	5
27, 私が、仕事をするにに関する技術や知識を学ぶとほめてくれる(わかってくれる)。	1	2	3	4	5

Ⅱ. あなたの保護者(父親、母親、またはそれにあたる成人の男性、女性)は、以下のことについてどのくらい当てはまりますか。当てはまる数字に○をつけてください。

	絶対 にち がう	た ぶ ん ち がう	ま あ そ う だ	き つ と そ う だ
1, あなたに元気がないと、すぐに気づいてはげましてくれる。	1	2	3	4
2, あなたが悩みや不満を言っても、いやな顔をしないで聞いてくれる。	1	2	3	4
3, あなたが何か失敗しても、そっと助けてくれる。	1	2	3	4
4, ふだんから、あなたの気持ちをよくわかってきている。	1	2	3	4
5, あなたが何か悩んでいる時に、どうしたらよいか教えてくれる。	1	2	3	4

Ⅲ. 以下のようなことをすることについて、あなたはどのくらい自信がありますか。当てはまる数字に○をつけてください。

	ま っ た く 自 信 が な い	あ ま り 自 信 が な い	ど ち ら で も な い	多 少 自 信 が あ る	と て も 自 信 が あ る
1, 自分の理想の職業を思い浮かべること。	1	2	3	4	5
2, 自分が興味をもつ職業をいくつか言うこと。	1	2	3	4	5
3, 自分がつきたい職業の仕事内容を知っていること。	1	2	3	4	5
4, 自分の才能をいかせると思う職業分野をいくつかあげること。	1	2	3	4	5
5, 将来の計画に役立つと思われる免許・資格の計画を立てること。	1	2	3	4	5
6, 自分が将来どのような生活をしたいか分かること。	1	2	3	4	5
7, 5年先の目標を持ち、それにしたがって計画を立てること。	1	2	3	4	5

IV. 以下のようなことを、あなたはどのぐらいしていますか。当てはまる数字に○をつけてください。

	ま っ た く し な い	ほ と ん ど し な い	ど ち ら で も な い	た ま に そ う す る	い つ も そ う す る
1, 将来どんな仕事につくのか、見通しを立てている。	1	2	3	4	5
2, 希望する仕事にむかって、準備や実行していることがある。	1	2	3	4	5
3, 自分にあった生き方をあていど見つけている。	1	2	3	4	5
4, 大人の(親や先生)意見だけでなく、自分が何をしたいか考えている。	1	2	3	4	5
5, 職業につくための目標を立て、それにむかって努力していることがある。	1	2	3	4	5
6, 将来の職業については、自分の意思で決めている。	1	2	3	4	5
7, 職業を選ぶことについて、人にたずねたり、自分で調べたりしている。	1	2	3	4	5
8, コンピューター(やインターネット)を使って興味のある職業を調べることがある。	1	2	3	4	5

書き忘れたところがないか、もう一度確かめてください。

ご協力ありがとうございました。

アンケート調査票

この調査は、日ごろあなたが、どのように思っているか、感じているのかを質問するものです。

このアンケートに回答するかどうかはあなたが自分で自由に決めてください。

この調査は、研究のために行われるものです。あなたがこのアンケートにどのような回答をしても、成績やその他学校からの評価などには一切関係ありません。

また、この調査には名前を書きませんので、誰がどんな回答をしたのかは分かりません。また、全体として分析しますので、ある一人の回答だけが特別に取り上げられることもありません。安心して回答してください。

正しい答えや間違った答えというものはありません。あなたの思ったことをそのままお答え下さい。

※当てはまる番号に○をつける、または空らんに入力してください。

■専攻：（ ）

■学年：（ ）年生

■年齢：（ ）歳

■性別：（ 1. 男 2. 女 ）

I. あなたの保護者(父親、母親、またはそれにあたる成人の男性、女性)は、以下のことについて、どの
 いど当てはまりますか(してくれますか)。当てはまると思う数字に○をつけてください。

	ま っ た く 当 て は ま ら な い	あ ま り 当 て は ま ら な い	ど ち ら で も な い	多 少 当 て は ま る	と て も 当 て は ま る
例) おもしろい本をすすめてくれる。	1	2	3	4	5
1, 私が学んでいることが、将来仕事をする上でどのように役に立つか話 してくれる。	1	2	3	4	5
2, 私が課題をするのを手伝ってくれる。	1	2	3	4	5
3, 私の進路を考える上で、役立つような授業(または科目、コース、専 攻)を選ぶことを手伝ってくれる。	1	2	3	4	5
4, 私が将来仕事をする時に役に立つことを教えてくれる。	1	2	3	4	5
5, 私が将来仕事をする上で、役に立つ技術や知識を学べるようなことを させてくれる。	1	2	3	4	5
6, 私の将来の職業に関連するような技術や知識を学べる課外活動(習 い事、体験、活動など)をさせてくれる。	1	2	3	4	5
7, 私の仕事にほこりをもてるようにしてくれる。	1	2	3	4	5
8, 自分たち(保護者)がどういう業務(仕事)をしているか話してくれる。	1	2	3	4	5
9, (保護者が)職場で起こった出来事について話してくれる。	1	2	3	4	5
10, 自分たちの職場(保護者が働いているところ)に私を連れて行ってく れた。	1	2	3	4	5
11, 同僚(保護者が仕事と一緒に働いている人)に私を会わせてくれた。	1	2	3	4	5
12, (保護者が)職場で何をしているのか私に見せてくれる。	1	2	3	4	5
13, 自分たち(保護者)の仕事について話してくれる。	1	2	3	4	5
14, 自分たち(保護者)がどこで働いているか教えてくれる。	1	2	3	4	5
15, 私が学校で出来るかぎり多くのことを学べるようにはげましてくれる。	1	2	3	4	5

	まったく当てはまらない 1	あまり当てはまらない 2	どちらでもない 3	多少当てはまる 4	とても当てはまる 5
16, よい成績を取れるようにはげましてくれる。	1	2	3	4	5
17, 卒業した後に私が就職することをはげましてくれる。	1	2	3	4	5
18, 私が学校でよくやっていることをほこりに思うと話してくれる。	1	2	3	4	5
19, 私が学校をちゃんと卒業することを期待していると言ってくれる。	1	2	3	4	5
20, 私が学校で勉強をよくやっていることを評価してくれる(認めてくれる、ほめてくれる)。	1	2	3	4	5
21, 将来の私の職業が楽しみだということを話してくれる。	1	2	3	4	5
22, 私がいつか仕事をする上で役に立つようなことを学んでいる時、保護者は私がうれしくなるようなことを言ってくれる。	1	2	3	4	5
23, ときどき、保護者と私は、私が将来どんなに素晴らしい仕事につけるか楽しく一緒に話す。	1	2	3	4	5
24, 私が将来の進路について心配していることを、私と話してくれる。	1	2	3	4	5
25, 私がときどき将来の進路について不安に思うことを理解してくれる。	1	2	3	4	5
26, 将来私にどんな仕事についてほしいか話してくれる。	1	2	3	4	5
27, 私が、仕事をするに関する技術や知識を学ぶとほめてくれる(わかってくれる)。	1	2	3	4	5

Ⅱ. あなたの保護者(父親、母親、またはそれにあたる成人の男性、女性)は、以下のことについてどのくらい当てはまりますか。当てはまる数字に○をつけてください。

	絶対 に ち が う	た ぶ ん ち が う	ま あ そ う だ	き つ と そ う だ
1. あなたに元気がないと、すぐに気づいてはげましてくれる。	1	2	3	4
2. あなたが悩みや不満を言っても、いやな顔をしないで聞いてくれる。	1	2	3	4
3. あなたが何か失敗しても、そっと助けてくれる。	1	2	3	4
4. ふだんから、あなたの気持ちをよくわかってきている。	1	2	3	4
5. あなたが何か悩んでいる時に、どうしたらよいか教えてくれる。	1	2	3	4

Ⅲ. 以下のようなことをすることについて、あなたはどのくらい自信がありますか。当てはまる数字に○をつけてください。

	ま っ た く 自 信 が な い	あ ま り 自 信 が な い	ど ち ら で も な い	多 少 自 信 が あ る	と て も 自 信 が あ る
1. 自分の理想の職業を思い浮かべること。	1	2	3	4	5
2. 自分が興味をもつ職業をいくつか言うこと。	1	2	3	4	5
3. 自分がつきたい職業の仕事内容を知っていること。	1	2	3	4	5
4. 自分の才能をいかせると思う職業分野をいくつかあげること。	1	2	3	4	5
5. 将来の計画に役立つと思われる免許・資格の計画を立てること。	1	2	3	4	5
6. 自分が将来どのような生活をしたいか分かること。	1	2	3	4	5
7. 5年先の目標を持ち、それにしたがって計画を立てること。	1	2	3	4	5

IV. 以下のようなことを、あなたはどのぐらいしていますが、当てはまる数字に○をつけてください。

	ま っ た く し な い	ほ と ん ど し な い	ど ち ら で も な い	た ま に そ う す る	い つ も そ う す る
1, 将来どんな仕事につくのか、見通しを立てている。	1	2	3	4	5
2, 希望する仕事にむかって、準備や実行していることがある。	1	2	3	4	5
3, 自分にあった生き方があるていど見つけている。	1	2	3	4	5
4, 大人の(親や先生)意見だけでなく、自分が何をしたいか考えている。	1	2	3	4	5
5, 職業につくための目標を立て、それにむかって努力していることがある。	1	2	3	4	5
6, 将来の職業については、自分の意思で決めている。	1	2	3	4	5
7, 職業を選ぶことについて、人にたずねたり、自分で調べたりしている。	1	2	3	4	5
8, コンピューター(やインターネット)を使って興味のある職業を調べることがある。	1	2	3	4	5

書き忘れたところがないか、もう一度確かめてください。

ご協力ありがとうございました。

進路に関する相談についてのアンケートのお願い

今日は調査にご協力いただき、ありがとうございます。

この調査は、大学生の卒業後の進路選択に関する周囲への相談について調べるために行うものです。

回答は厳重な管理のもと、記号化され、コンピューターにより統計的に分析されますので、誰がどのような回答をしたということは決して公表されません。また、この調査はコンピューターにデータを入力後、シュレッダーにて処分するなど、個人情報の保護に最大限の配慮をいたします。

正しい答えや間違った答えというものはありませんので、率直に思ったままをお答えください。

大学・学部 ()

学年 () 年

性別 女性 · 男性

年齡 () 歲

I あなたは両親（母親，父親，その他それに当たる養育者）に対して，以下のようなことをどの程度相談したい、求めたいと思いますか？「(1) 全く相談したくない、求めたくない」から「(4) とても相談したい、求めたい」までのうち、もっとも当てはまると思う数字に○をつけてください。

注：以下、ここでの「進路」とは、「大学卒業後の進路」を指します。

	全く相談したくない、求めたくない	あまり求め相談したくない	少し相談したい、求めたい	とても相談したい、求めたい
1, 興味のある職業について，仕事内容など具体的な情報。	1	2	3	4
2, 自分の職業適性に関する客観的な意見。	1	2	3	4
3, 職業を選択していくことに関して自信が持てず，どうしたらいいかについての相談	1	2	3	4
4, 希望する職業に就くためには何をしたらいいのかアドバイス。	1	2	3	4
5, 自分の職業に対する考え方は適切なものかどうか客観的な意見。	1	2	3	4
6, 自分はどんな性格の人間か客観的な意見。	1	2	3	4
7, 希望する職業に就けるように応援，励まし。	1	2	3	4
8, どのような職業に就きたいのか明確にするための相談。	1	2	3	4
9, 選択した職業に自分は向いていると思うか客観的な意見。	1	2	3	4
10, どのように職業を決めていくのか，その方法ややり方。	1	2	3	4
11, 卒業後どのような職業生活を送りたいのか明確にするための相談。	1	2	3	4
12, 進路に関する不満やイラ立ちを聞いてもらう。	1	2	3	4
13, 自分の職業に関する考え、選択について理解を示してくれる。	1	2	3	4
14, 希望する職業への就職状況についての情報。	1	2	3	4
15, 進路が決められず，どうしたらいいのかわからないことを相談。	1	2	3	4
16, 自分の職業の選択の仕方は適切なものか客観的な意見。	1	2	3	4
17, 自分と他者を比べて，劣等感を感じてしまうことを相談。	1	2	3	4
18, 進路に関する不安や焦りを聞いてもらう。	1	2	3	4
19, なぜこの職業を希望するのか整理するための相談。	1	2	3	4
20, 自分の職業の選択は正しいものであるという保証（同意を示してくれる）。	1	2	3	4

Ⅱ あなたは友達(自分と同じ様に就職活動をしている、する予定の友達や就職活動をした先輩)に対して、以下のようなことをどの程度相談したい、求めたいと思いますか？「(1)全く相談したくない、求めたくない」から「(4)とても相談したい、求めたい」までのうち、もっとも当てはまると思う数字に○をつけてください。

	全く相談したくない、求めたくない	あまり相談したくない	少し相談したい、求めたい	とても相談したい、求めたい
1, 興味のある職業について、仕事内容など具体的な情報。	1	2	3	4
2, 自分の職業適性に関する客観的な意見。	1	2	3	4
3, 職業を選択していくことに関して自信が持てず、どうしたらいいかについての相談	1	2	3	4
4, 希望する職業に就くためには何をしたらいいのかアドバイス。	1	2	3	4
5, 自分の職業に対する考え方は適切なものかどうか客観的な意見。	1	2	3	4
6, 自分はどんな性格の人間か客観的な意見。	1	2	3	4
7, 希望する職業に就けるように応援、励まし。	1	2	3	4
8, どのような職業に就きたいのか明確にするための相談。	1	2	3	4
9, 選択した職業に自分は向いていると思うか客観的な意見。	1	2	3	4
10, どのように職業を決めていくのか、その方法ややり方。	1	2	3	4
11, 卒業後どのような職業生活を送りたいのか明確にするための相談。	1	2	3	4
12, 進路に関する不満やイラ立ちを聞いてもらう。	1	2	3	4
13, 自分の職業に関する考え、選択について理解を示してくれる。	1	2	3	4
14, 希望する職業への就職状況についての情報。	1	2	3	4
15, 進路が決められず、どうしたらいいのか分からないことを相談。	1	2	3	4
16, 自分の職業の選択の仕方は適切なものか客観的な意見。	1	2	3	4
17, 自分と他者を比べて、劣等感を感じてしまうことを相談。	1	2	3	4
18, 進路に関する不安や焦りを聞いてもらう。	1	2	3	4
19, なぜこの職業を希望するのか整理するための相談。	1	2	3	4
20, 自分の職業の選択は正しいものであるという保証(同意を示してくれる)。	1	2	3	4

Ⅲ あなたは大学スタッフ(指導教官,進路支援室などのスタッフ)に対して, 以下のようなことをどの程度相談したい、求めたいと思いますか? 「(1)全く相談したくない、求めたくない」から「(4)とても相談したい、求めたい」までのうち、もっとも当てはまると思う数字に○をつけてください。

	求 め く た く な い 、	い あ 、 ま り め 相 談 し た く な い	た 少 い し 相 談 し た い 、 求 め	め と た い も 相 談 し た い 、 求
1, 興味のある職業について, 仕事内容など具体的な情報。	1	2	3	4
2, 自分の職業適性に関する客観的な意見。	1	2	3	4
3, 職業を選択していくことに関して自信が持てず、どうしたらいいかについての相談。	1	2	3	4
4, 希望する職業に就くためには何をしたらいいのかアドバイス。	1	2	3	4
5, 自分の職業に対する考え方は適切なものかどうか客観的な意見。	1	2	3	4
6, 自分はどんな性格の人間か客観的な意見。	1	2	3	4
7, 希望する職業に就けるように応援、励まし。	1	2	3	4
8, どのような職業に就きたいのか明確にするための相談。	1	2	3	4
9, 選択した職業に自分は向いていると思うか客観的な意見。	1	2	3	4
10, どのように職業を決めていくのか、その方法ややり方。	1	2	3	4
11, 卒業後どのような職業生活を送りたいのか明確にするための相談。	1	2	3	4
12, 進路に関する不満やイラ立ちを聞いてもらう。	1	2	3	4
13, 自分の職業に関する考え、選択について理解を示してくれる。	1	2	3	4
14, 希望する職業への就職状況についての情報。	1	2	3	4
15, 進路が決められず、どうしたらいいのかわからないことを相談。	1	2	3	4
16, 自分の職業の選択の仕方は適切なものか客観的な意見。	1	2	3	4
17, 自分と他者を比べて、劣等感を感じてしまうことを相談。	1	2	3	4
18, 進路に関する不安や焦りを聞いてもらう。	1	2	3	4
19, なぜこの職業を希望するのか整理するための相談。	1	2	3	4
20, 自分の職業の選択は正しいものであるという保証(同意を示してくれる)。	1	2	3	4

IV 以下の項目の内容について、あなたにどの程度あてはまりますか。それぞれの項目について、「全く当てはまらない(1)」から「とても当てはまる(4)」までのうち、もっとも当てはまると思う数字に○をつけてください。

	全く 当て はま らない	あ ま り 当 て は ま ら ない	少 し は 当 て は ま る	と て も 当 て は ま る
1, 将来の職業や就職について、とても関心を持っている。	1	2	3	4
2, すでに計画に従って就職試験のための勉強をしている。	1	2	3	4
3, 職業や就職に関する記事には、よく目を通すようにしている。	1	2	3	4
4, 職場で難しい問題にぶつかっても、自分なりに克服していこうと思う。	1	2	3	4
5, 将来の職業生活をどう過ごすかは、あまり関心がない。	1	2	3	4
6, 自分の将来の職業生活の様子は、だいたい想像できる。	1	2	3	4
7, 職業生活を通して、さらに自分自身を向上させたい。	1	2	3	4
8, 将来の職業や就職先について、いろいろ比較し検討している。	1	2	3	4
9, どのような職業が自分に向いているのか、真剣に考えたことがある。	1	2	3	4
10, 自分は何のために働くのか、真剣に考えたことが無い。	1	2	3	4
11, 職業選択や就職は自分にとって重要な問題なので、真剣に考えている。	1	2	3	4
12, 職業人になったら、自分から進んで積極的に仕事を行おうと思う。	1	2	3	4
13, 就職の基準は、他の人に言われなくても自主的に進めることができる。	1	2	3	4
14, 職業の選択・決定では周囲の雰囲気流されることはない。	1	2	3	4
15, 希望する職業に就くにはどうすればよいか、調べたことがある。	1	2	3	4
16, 充実した職業生活が送れないのは、自分自身の責任が大きいと思う。	1	2	3	4
17, 職業人になってからは、責任を自覚して仕事に取り組もうと思う。	1	2	3	4
18, どのような職業人になりたいのか、自分なりの目標を持っている。	1	2	3	4
19, 職業人になっても、責任の重い仕事はやりたくない。	1	2	3	4
20, 将来、充実した職業生活を送るために参考となる話は、注意して聞いている。	1	2	3	4

	全く 当ては まらない	あ まり 当ては まらない	少 しは 当ては まる	と ても 当ては まる
21, 職業生活を充実させるためには、面倒なことでも積極的にチャレンジする。	1	2	3	4
22, 希望する職業に就くための具体的な計画を立てている。	1	2	3	4
23, 自分は将来どのような職業についているか、わからない。	1	2	3	4
24, どのような職業に就きたいか、まだわからない。	1	2	3	4
25, 今希望している職業は、またすぐに変るかもしれない。	1	2	3	4
26, 職業選択や就職は、自分の個性と就職機会の両面から十分に考えている。	1	2	3	4
27, 就きたい職業は決めたが、それに向けての積極的な努力は特にしていない。	1	2	3	4

V 現在のあなたの状態について教えてください。以下の項目についてどの程度当てはまりますか。それぞれの項目について、最も当てはまると思うものに○をつけて下さい。

例) 最近私は元気で		あった		なかった		まったくなかった	
1, 何かをする時いつもより集中して	できた	いつもと変らなかった	いつもよりできなかった	あった	なかった	まったくできなかった	まったくできなかった
2, 心配事がある、よく眠れないようなことは	まったくなかった	あまりなかった	あった	あった	なかった	まったくなかった	まったくなかった
3, いつもより自分のしていることに生きがいを感じることは	あった	いつもと変らなかった	あった	あった	なかった	まったくなかった	まったくなかった
4, いつもより容易に物ごとを決めることは	できた	いつもと変らなかった	あった	あった	できなかった	まったくできなかった	まったくできなかった
5, いつもストレスを感じたことが	まったくなかった	あまりなかった	あった	あった	なかった	まったくなかった	まったくなかった
6, 問題を解決できなくて困ったことが	まったくなかった	あまりなかった	あった	あった	なかった	まったくなかった	まったくなかった
7, いつもより日常生活を楽しく送ることが	できた	いつもと変らなかった	あった	あった	できなかった	まったくできなかった	まったくできなかった
8, いつもより問題があった時に積極的に解決しようとするのが	できた	いつもと変らなかった	あった	あった	できなかった	まったくできなかった	まったくできなかった
9, いつもより気が重くて、憂うつになることは	まったくなかった	いつもと変らなかった	あった	あった	なかった	まったくなかった	まったくなかった
10, 自信を失ったことは	まったくなかった	あまりなかった	あった	あった	なかった	まったくなかった	まったくなかった
11, 自分は役に立たない人間だと考えたことは	まったくなかった	あまりなかった	あった	あった	なかった	まったくなかった	まったくなかった
12, 一般的にみて、しあわせといつもより感じたことは	たびたびあった	あった	あった	あった	なかった	まったくなかった	まったくなかった

質問は以上です。記入もれがないかもう一度確かめてください。

ご協力ありがとうございました。

付記

本論文における調査に御協力および御理解いただきました各大学の先生方、また調査に御協力いただいた各学校の先生方および生徒・学生の皆様に心より感謝申し上げます。

名古屋大学・森田美弥子先生には、私自身が何を研究したいのかを常に大切にさせていただきながらご指導いただきました。毎回丁寧に研究をみていただいた後、研究室を出る際には自分がやるべきことが明確になり、ゆっくりではありますが少しずつ前に進んでいるという実感を持つことができ、森田先生の御助力なくしてはここまで研究を進めることができなかったと思います。

また、岐阜大学の修士課程では緒賀郷志先生に研究することの楽しさ、博士課程進学への道を教えていただきました。また、南山大学の学部生時代には楠本和彦先生に心理学という学問の一步を教えていただきました。

3名の先生とも私が何をしたいのかということを大切にいただき、森田先生、緒賀先生、楠本先生に深く感謝申し上げます。

博士課程在学中は指導会、研究会、学会発表などさまざまな刺激を受け、多くの貴重な経験を行うことが出来ました。その中でここには書ききれないほどさまざまな先生、先輩方に貴重なアドバイスをいただき、心より御礼申し上げます。

大学生の頃に初めて心理学の授業を受けた時の感動は未だに忘れることができません。その日から私の研究、臨床心理士としての道が始まったように思います。それから楽しいこと、辛いことさまざまなことがありましたが、これまで私が歩んできた道に悔いはなく、これまでの経験を大切にこれからも前を進んでいきたいと思っています。

2016年2月

成田絵吏